

一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅶ
北陸新幹線関係発掘調査報告書XXI

六反田南遺跡Ⅲ

2011

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅶ
北陸新幹線関係発掘調査報告書XXI

ろくたん だみなみ
六反田南遺跡Ⅲ

2011

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道8号は新潟市を起点とし、日本海沿いに北陸地方を縦断し、京都市に至る総距離561.2kmの幹線国道です。新潟県と北陸地方及び京阪神地方を結ぶとともに、新潟県の産業・経済・文化の交流発展に大きな役割を果たしてきました。しかし、現在の糸魚川市域の国道8号は、交通混雑に伴う渋滞・騒音、事故等の交通環境の悪化が深刻な問題となっています。一般国道8号糸魚川東バイパス建設事業は、このような問題を解決し、幹線ネットワークの充実と強化を図り、幹線道路としての役割や地域の生活道路としての機能を回復させるために計画されました。

北陸新幹線は、東京を起点に高崎市・長野市・金沢市を經由して大阪府に至る総延長700kmの新幹線鉄道です。その開通は日本海沿岸地域の産業・経済・文化の発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は、この糸魚川東バイパス及び北陸新幹線の建設に先立ち、平成20年度に発掘調査を実施した六反田南遺跡Ⅲの調査報告書です。

調査によって、断続的ではあるものの縄文時代、古墳時代～平安時代、中世までの多時期の遺跡であることが判明しました。中でも古墳時代～平安時代は川辺に営まれた集落跡が見つかり、当時の人々が日常生活に使用した土器のほかに、槽や曲物、形代類や建築部材など多種多様な木製品が多数出土しました。これらの木製品は当時の人々の暮らしぶりを具体的に知ることができる貴重な資料となりました。

今回の発掘調査で得られた資料や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されることを期待しています。

最後にこの発掘調査に対し、多大な御理解と御協力をいただいた糸魚川市教育委員会、並びに地元の方々、また発掘調査から本報告書の作成に至るまで格別な御配慮をいただいた国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北陸新幹線第二建設局、同糸魚川鉄道建設所に対して厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

新潟県教育委員会

教育長 武藤克己

例 言

- 1 本報告書は、新潟県糸魚川市大字大和川字六反田地内に所在する六反田南遺跡の発掘調査記録である。『六反田南遺跡Ⅲ』は平成20年度に実施した発掘調査記録であり、六反田南遺跡の3冊目の発掘調査報告書である。
- 2 六反田南遺跡Ⅱ・Ⅲの調査は、一般国道8号糸魚川東バイパス、北陸新幹線の建設に伴い、国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所（以下、国交省とする）、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、鉄道・運輸機構とする）から新潟県教育委員会（以下、県教委とする）が受託したもので、調査主体である県教委は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団とする）に調査を実施を依頼した。なお、六反田南遺跡Ⅱ・Ⅲの発掘調査及び整理作業、報告書刊行は、年度ごとに一契約で行い、経費負担は国交省の施工範囲と、鉄道・運輸機構の施工範囲との調査面積の案分による。整理作業の関係から、報告書刊行は『六反田南遺跡Ⅱ』を平成21年度、『六反田南遺跡Ⅲ』を平成22年度に行った。
- 3 埋文事業団は発掘調査及び関連諸工事を株式会社吉田建設（以下、吉田建設とする）に委託し、平成20年度に調査を行った。
- 4 出土遺物及び記録類は、県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保存・管理している。
- 5 遺物の注記は、「08六反ミ」とし出土地点や層位を続けて記した。
- 6 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。ただし、ここでいう「真北」とは日本平面国家座標のX軸方向を示す。
- 7 掲載遺物の番号は種別に係りなく通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 8 引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 9 調査の一部は現地説明会（平成20年7月12日）、埋文事業団発行の埋文にいがた第64号、平成20年度年報等で公表し、また新聞各紙（新潟日報・糸西タイムス）でも報道されているが、本報告書の記述をもって正式な報告とする。
- 10 本報告書の作成に当たり、航空写真・遺構の図化・自然科学分析は以下の機関に委託した。
航空写真……………J・T空撮
遺構の図化……………株式会社東北測量設計社
自然科学分析……………パリノ・サーヴェイ株式会社（以下、パリノ・サーヴェイとする）
- 11 遺構図及び遺物実測図のトレース、各種図版作成・編集については、吉田建設がデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。また遺物写真撮影はデジタルカメラ（ニコンD100・キャノンEOSKissDigitalN）で撮影し、遺構写真同様にデジタル化して編集を行った。また石器・石製品のデジタルトレースは、すべてNPO法人CUBISに委託した。
- 12 本報告書の執筆は、細井佳浩・瀧口泰孝・水落雅明（以上、吉田建設 調査員）、高橋保雄（埋文事業団調査課本発掘調査担当課長代理）、パリノ・サーヴェイが分担執筆したもので、分担は以下のとおりである。編集は平成20年度3月まで寺崎祐助（埋文事業団調査課本発掘調査担当課長代理）、平成21年度は高橋保雄の指導のもと細井が担当した。
第I章1・2-A：高橋保雄
第I章2-B～D、第IV章1-A・1-B-1）・2-A・2-B-2）・第V章2・2-A・B、第VII章1-A・B・2-A・B・D：細井佳浩
第I章2-B-1、第V章2-D・E、第VII章2-E：瀧口泰孝
第II章1・2-A、第III章、第IV章1-B-2）・2-B-2)、第V章2-C、第VII章1-C・2-C：水落雅明
第VI章：高橋 敦・千葉博俊
- 13 発掘調査から本報告書作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚くお礼申し上げる（敬称略 五十音順）。
相沢 央 相羽 重徳 岡村 道雄 岩崎 秀治 岩崎 満 金子 拓男 金子 直行
木島 勉 鈴木 徳雄 関根 慎二 高濱 信行 谷藤 保彦 土田 孝雄 藤田富士夫
細田 勝 百瀬 正恒 山岸 洋一 山田 昌久 綿田 弘実
糸魚川市教育委員会 フォッサマグナミュージアム 長者ヶ原遺跡考古館 大和川自治会

目 次

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	2
A 試掘確認調査	2
B 本発掘調査	4
1) 調査の方法	4
2) 調査の経過	4
C 整理作業の経過	6
D 調査・整理体制	6

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境	7
2 歴史的環境	7
A 周辺の縄文時代中期遺跡	7
B 周辺の古代遺跡	9

第Ⅲ章 調査の概要

1 グリッドの設定	12
2 基本層序	12

第Ⅳ章 縄文時代の調査

1 K F 区	14
A 調査の概要	14
B 遺 物	15
1) 土 器	14
2) 石 器	14
2 K C 区	16
A 調査の概要	16
B 遺 物	16
1) 土 器	16
2) 土器片円板	19
3) 石 器	19

第Ⅴ章 弥生時代以降の調査

1 遺 構	21
A 概 要	21

B 各 説	21		21
1) K F 区	21	2) K D 区	22
3) K C 区	26		
2 遺 物			29
A 土 器			29
1) 概要と記述の方法	29	2) 弥生～古墳時代の土器	29
3) 古代の土器	36	4) 中世の陶磁器	38
B 土 製 品			38
C 石器・石製品			39
1) 石器組成と石材組成	39	2) 各 説	39
D 木 製 品			42
1) 概 要	42	2) 記述の方法と分類	42
3) 各 説	42		
E 構築部材			47
1) 概 要	47	2) 記述の方法と分類	47
3) 各 説	47		

第Ⅵ章 自然科学分析

1 樹種同定			51
A 試 料			51
B 分析方法			51
C 結 果			51
D 考 察			52

第Ⅶ章 まとめ

1 縄文時代中期			55
A 六反田南遺跡Ⅲの調査			55
B 出土土器について			55
C 縄文時代の石器について			56
1) 各調査区出土石器の特徴	56	2) 磨製石斧の製作について	56
2 古墳時代～古代			58
A 遺構の様相と遺跡の存続期間			58
B 古墳時代～古代の土器			59
1) 古墳時代前期の土器	59	2) 古代の土器	60
C 古墳時代前期の石製品について			61
1) 玉類製作の比較	61	2) 玉類製作の工具について	61
D 木製品			62
1) 六反田南遺跡Ⅲの出土木製品の概観と年代	62	2) 古代の「大足」について	62
E 構築部材			63
1) 新潟県内出土構築部材について	63	2) 六反田南遺跡出土の構築部材について	63
3) 木材利用の傾向	64		

3 総括	67
《要約》	68
《引用・参考文献》	69
《観察表》	72

插图目次

第1図 一般国道8号糸魚川東バイパスの遺跡の位置	1	第9図 貝殻状剥片（スクレイパー）の器体幅による分類	41
第2図 試掘確認調査トレンチ位置図	3	第10図 木取りの種類	42
第3図 六反田南遺跡調査区分図	5	第11図 円形曲物の部位名称と分類	45
第4図 縄文時代中期の遺跡分布とヒスイの原産地	8	第12図 建築部材対応模式図	48
第5図 古代の主な周辺遺跡	11	第13図 出土材切片の顕微鏡写真	52
第6図 グリッド設定と土層柱状図	13	第14図 磨製石斧の製作工程	57
第7図 弥生後期～古墳前期土器分類図	30	第15図 板材の加工過程模式図	64
第8図 原石の長幅分布図	41	第16図 板目材樹木利用部径	66
		第17図 桁目材樹木利用部径	66

表目次

第1表 調査体制	6	第4表 上層出土石器組成表	39
第2表 KF区下層出土石器組成表	14	第5表 出土木製品の分類	42
第3表 KC区下層出土石器組成表	19	第6表 構築部材の分類	47

図版目次

[図面図版]	図版16 弥生時代以降 遺構個別図 (7)
図版1 調査範囲と周辺地形	図版17 弥生時代以降 遺構個別図 (8)
図版2 縄文時代 遺構全体図	図版18 縄文時代の土器 (1)
図版3 縄文時代 遺物分布図	図版19 縄文時代の土器 (2)
図版4 弥生時代以降 遺構全体図	図版20 縄文時代の土器 (3)
図版5 弥生時代以降 遺構分割図 (1)	図版21 縄文時代の土器 (4)
図版6 弥生時代以降 遺構分割図 (2)	図版22 縄文時代の土器 (5)・土製品
図版7 弥生時代以降 遺構分割図 (3)	図版23 縄文時代の石器 (1)
図版8 弥生時代以降 遺構分割図 (4)	図版24 縄文時代の石器 (2)
図版9 弥生時代以降 遺構分割図 (5)	図版25 縄文時代の石器 (3)
図版10 弥生時代以降 遺構個別図 (1)	図版26 KF区上層の土器／KD区上層の土器 (1)
図版11 弥生時代以降 遺構個別図 (2)	図版27 KD区上層の土器 (2)
図版12 弥生時代以降 遺構個別図 (3)	図版28 KD区上層の土器 (3)
図版13 弥生時代以降 遺構個別図 (4)	図版29 KD区上層の土器 (4)／KC区上層の土器 (1)
図版14 弥生時代以降 遺構個別図 (5)	図版30 KC区上層の土器 (2)
図版15 弥生時代以降 遺構個別図 (6)	図版31 KC区上層の土器 (3)

- 図版32 KC 区上層の土器 (4)
 図版33 KC 区上層の土器 (5)
 図版34 KC 区上層の土器 (6) / 陶磁器 / 土製品
 図版35 古墳時代の石器・石製品 (1)
 図版36 古墳時代の石器・石製品 (2)
 図版37 古墳時代以降の木製品 (1)
 図版38 古墳時代以降の木製品 (2)
 図版39 古墳時代以降の木製品 (3)
 図版40 古墳時代以降の木製品 (4)
 図版41 古墳時代以降の木製品 (5)
 図版42 古墳時代以降の木製品 (6)
 図版43 古墳時代以降の木製品 (7)
 図版44 古墳時代以降の木製品 (8)
 図版45 古墳時代以降の木製品 (9)
 図版46 古墳時代以降の木製品 (10)
 図版47 古墳時代以降の木製品 (11)
 図版48 古墳時代以降の木製品 (12)
 図版49 古墳時代以降の木製品 (13)
 図版50 古墳時代以降の木製品 (14)
 図版51 古墳時代以降の木製品 (15)
 図版52 古墳時代以降の木製品 (16)
 図版53 古墳時代以降の木製品 (17)
 図版54 古墳時代以降の木製品 (18)
 図版55 古墳時代以降の木製品 (19)
- 図版76 KD 区上層の土器 (2)
 図版77 KD 区上層の土器 (3)
 図版78 KD 区上層の土器 (4) / KC 区上層の土器 (1)
 図版79 KC 区上層の土器 (2)
 図版80 KC 区上層の土器 (3)
 図版81 KC 区上層の土器 (4)
 図版82 KC 区上層の土器 (5) / 陶磁器 / 土製品 /
 古墳時代の石器・石製品 (1)
 図版83 古墳時代の石器・石製品 (2)
 図版84 古墳時代以降の木製品 (1)
 図版85 古墳時代以降の木製品 (2)
 図版86 古墳時代以降の木製品 (3)
 図版87 古墳時代以降の木製品 (4)
 図版88 古墳時代以降の木製品 (5)
 図版89 古墳時代以降の木製品 (6)
 図版90 古墳時代以降の木製品 (7)
 図版91 古墳時代以降の木製品 (8)
 図版92 古墳時代以降の木製品 (9)
 図版93 古墳時代以降の木製品 (10)
 図版94 古墳時代以降の木製品 (11)
 図版95 古墳時代以降の木製品 (12)

[写真図版]

- 図版56 遺跡近景・基本層序・流路1土層断面・遺物
 出土状況
 図版57 流路1J 遺物出土状況・SK575 出土土器と勾
 玉
 図版58 KC 区・KD 区上層完掘・SB5 完掘
 図版59 KF 区下層
 図版60 KF 区上層
 図版61 KD 区上層 (1)
 図版62 KD 区上層 (2)
 図版63 KD 区上層 (3)
 図版64 KD 区上層 (4)・KC 区上層 (1)
 図版65 KC 区上層 (2)
 図版66 KC 区上層 (3)
 図版67 KC 区上層 (4)
 図版68 KC 区上層 (5)
 図版69 縄文時代の土器 (1)
 図版70 縄文時代の土器 (2)
 図版71 縄文時代の土器 (3)
 図版72 縄文時代の土器 (4) / 土製品
 図版73 縄文時代の石器 (1)
 図版74 縄文時代の石器 (2)
 図版75 KF 区上層の土器 / KD 区上層の土器 (1)

第 I 章 序 説

1 調査に至る経緯

一般国道 8 号は北陸自動車道とともに、新潟県域と北陸地方及び京阪神地方を結ぶ主要幹線道路である。また地元においては、山間部と海岸部を南北に結ぶ道路を東西に連結・連絡する重要な生活道路としての役割を担ってきた。しかし、近年の交通量の増大は、通勤・通学時間帯を中心に糸魚川市域で慢性的な渋滞・騒音、交通事故などを引き起こしてきた。このような交通環境の悪化は深刻な問題となり、地元から交通渋滞の解消、交通安全の確保などを含めた改善が求められていた。これに対し国交省は、糸魚川東地区の交通混雑の解消、沿道の交通環境の改善、市街地へのアクセス性の向上を目的に一般国道 8 号糸魚川東バイパス（糸魚川市間脇～同市押上間の 6.9km）の建設を計画し、昭和 58（1983）～ 62 年度の計画調査、昭和 63 年度の実施調査を経て、平成元（1189）年に事業化した。さらに平成 4 年度に用地取得、平成 10 年度から工事に着手した。これを受けて県教委は、バイパス計画用地内の埋蔵文化財の取り扱いを国交省と協議を重ねた。

平成 11 年 9 月、国交省から分布調査の依頼を受けた県教委は、埋文事業団にバイパス計画地区の分布調査を依頼した。埋文事業団は早川左岸の梶屋敷地区（STA37 杭地点）から海川左岸の押上地区（STA67 杭+69m 地点）までを対象として、平成 11 年 10 月 13～14 日に調査を実施した。調査範囲の約半分が山林・宅地・盛土であったことから、採集できた遺物はわずかであった。しかし、遺跡の存在が予想される地形的特徴を加味しながら、4 地点の遺跡推定地が存在することを県教委に報告した。六反田南遺跡が存在する大和川地区では、字六反田地区で土師器 8 点、剥片 1 点が採集され、周辺には前波遺跡、六反田遺跡、



第 1 図 一般国道 8 号糸魚川東バイパス遺跡の位置

(国土地理院発行「糸魚川」1 : 50,000 原図 平成 8 年発行)

2 調査の方法と経過

古屋敷A遺跡が存在することから、遺跡推定地2として報告した。これを受けて県教委は、埋蔵文化財の具体的な規模・内容等は不明であるものの、今後、試掘確認調査を実施して取り扱いを判断する必要があると国交省に回答した。

平成17年4月、国交省から遺跡推定地の試掘確認調査の依頼を受けた県教委は、埋文事業団に調査を委託した。調査は隣接して並行する北陸新幹線の建設工事、用地取得や工事工程などから、平成17～19年度の3か年に渡って行った。調査により、上層23,910㎡、下層19,250㎡の延べ43,160㎡もの広範囲の本発掘調査が必要と判明した。六反田南遺跡と命名し、合わせて本発掘調査実施の協議も進め、平成18年3月、国交省から六反田南遺跡の本発掘調査を依頼を受けた県教委は、埋文事業団に調査を委託した。同年4月、バイパス工事の急がれる市道六反田線東端(STA No.57+8m)から東側部分について、本発掘調査に着手した。

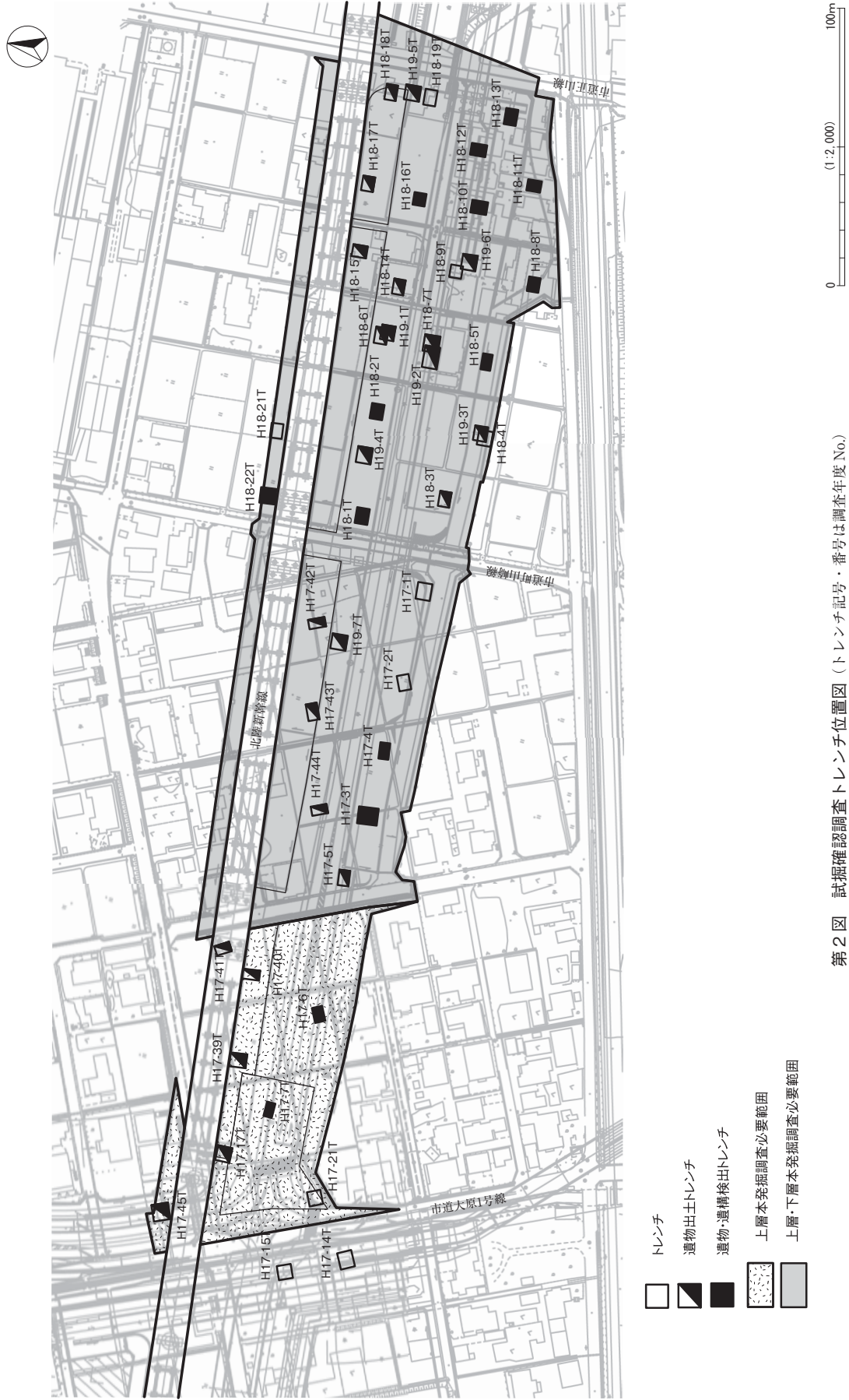
2 調査の方法と経過

A 試掘・確認調査(第2図)

前述のように試掘・確認調査は隣接する北陸新幹線の建設工事の絡み、用地取得状況や工事工程などから平成17～19年度の3か年に及んだ。平成17年度は試掘・確認調査対象地の東側に当たる市道東山線(STA No.51+13m)から市道町山崎線(STA No.58+43m)までを対象として、平成17年9月15日～11月10日に行った。第2図のように任意に45か所のトレンチ(試掘坑)を設定し、バックホー及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。調査によって、古墳時代～中世に相当する遺物包含層が認められ、23か所のトレンチから縄文土器、古墳時代土師器、土師器、須恵器、中世陶器、砥石・ヒスイを含んだ石製品などが出土した。また、4か所のトレンチから土坑、ピット、炭化物集中か所、溝などの遺構が検出された。このような結果から、STA No.54+40m付近～No.55+30m付近は前波南遺跡、市道大原1号線西端(STA No.55+92m)～市道町山崎線東端(STA No.58+41m)の間を新発見の六反田南遺跡として報告した。六反田南遺跡の本発掘調査必要面積は、バイパス本線部分と側道部分を合わせて12,840㎡である。

平成18年度は試掘・確認調査対象地の西側に当たる市道町山崎線(STA No.58+43m)～市道正山線(STA No.60+37m)を対象に、平成18年7月3～6日に行った。第2図のように任意に22か所のトレンチを設定し、バックホー及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。調査によって、古墳時代～中世に相当する遺物包含層が認められ、ほぼ全面から古墳時代土師器、土師器、中世陶器、中世土師器、石核・石錘を含んだ石器、土製品などが出土した。また、11か所のトレンチから土坑、ピット、溝などの遺構を検出した。さらに遺跡の西限は北陸新幹線の試掘・確認調査や、現地地形観察からSTA No.60+24m付近に遺跡と海川氾濫原の境に崖線が認められることが判明し、確定した。したがって、六反田南遺跡の本発掘調査必要面積はバイパス本線部分と側道部分を合わせて11,070㎡追加された。

一方、平成19年度に本発掘調査を実施した北陸新幹線及び国交省管轄の側道部分では、古墳時代～古代の遺構検出面の下約1.0～1.4mで新たに縄文時代の遺構・遺物(下層)を検出した。遺跡範囲の拡大も予想されることから、バイパス用地内の調査可能な部分について、確認調査を実施することになった。調査対象地は、平成18年度に本発掘調査を終了し、国交省に引き渡した市道大原1号線西端(STA No.55+92m)～市道六反田線東端(STA No.57+8m)を除く、市道六反田線東端(STA No.57+8m)～市道正山線の西側の崖線(STA No.60+24m付近)であり、9月10～13日に行った。調査は北陸新幹線関連の発掘調



第2図 試掘確認調査トレンチ位置図 (トレンチ記号・番号は調査年度No.)

2 調査の方法と経過

査事務所、駐車場などを避け、さらに平成 18 年度に検出した上層遺構を破壊から防ぐため、これまでのトレンチを再掘削した。掘削か所は第 2 図のとおり 7 か所である。調査によって、遺構や遺物の粗密が予想されるものの、H19-5T を除き 6 か所で縄文時代の遺物包含層を検出し、5 か所から縄文土器、石器が出土した。時期は中期中葉を主体として、中期後葉も含まれていた。このような結果から、下層の本発掘調査必要範囲は、市道六反田線東端 (STA No.57+8m) ～市道正山線の西側の崖線 (STA No.60+24m 付近) の本線部分、側道部分の 19,250 m² となった。

したがって、バイパス用地内の六反田南遺跡全体の調査必要範囲は、上層 23,910 m²、下層 19,250 m² で延べ 43,160 m² として確定した。

B 本発掘調査

六反田南遺跡に係り平成 17 年度までに行った試掘確認調査は、『六反田南遺跡・前波南遺跡』[春日ほか 2008]、平成 18 年度と平成 19 年度に行った試掘・確認調査と平成 19 年度と 20 年度に行った北陸新幹線建設に伴う本発掘調査については、『六反田南遺跡Ⅱ』[細井ほか 2010] で述べている。したがって、ここでは、平成 20 年度の一般国道 8 号糸魚川東バイパスに伴う本発掘調査について述べる。

1) 調査の方法

平成 20 年度は、一般国道 8 号糸魚川東バイパス建設用地の東西 150m、南北 30～60m の範囲内で 3 か所の調査を行った。各調査区の名称は、平成 19 年度の調査において呼称した工区 A～G に近接する位置に国交省側の調査区を表す K を頭につけて、KF 区、KD 区、KC 区とした。工区的位置 (グリッド)、隣接調査区と境となるものは以下のとおりである。なお、各調査区は、平成 19 年度調査の F 区、D 区、C 区に対すると一部分の調査に見え、さらに今後も調査が続いていくことから、調査中は KF1 区、KD2 区、KC1 区などと細分したが、本書では細分工区は使用しない。

KF 区 25・26C～F の範囲。北側が平成 18 年度調査区に、南側が平成 19 年度調査 F 区に接する。東側には市道六反田線が走る。

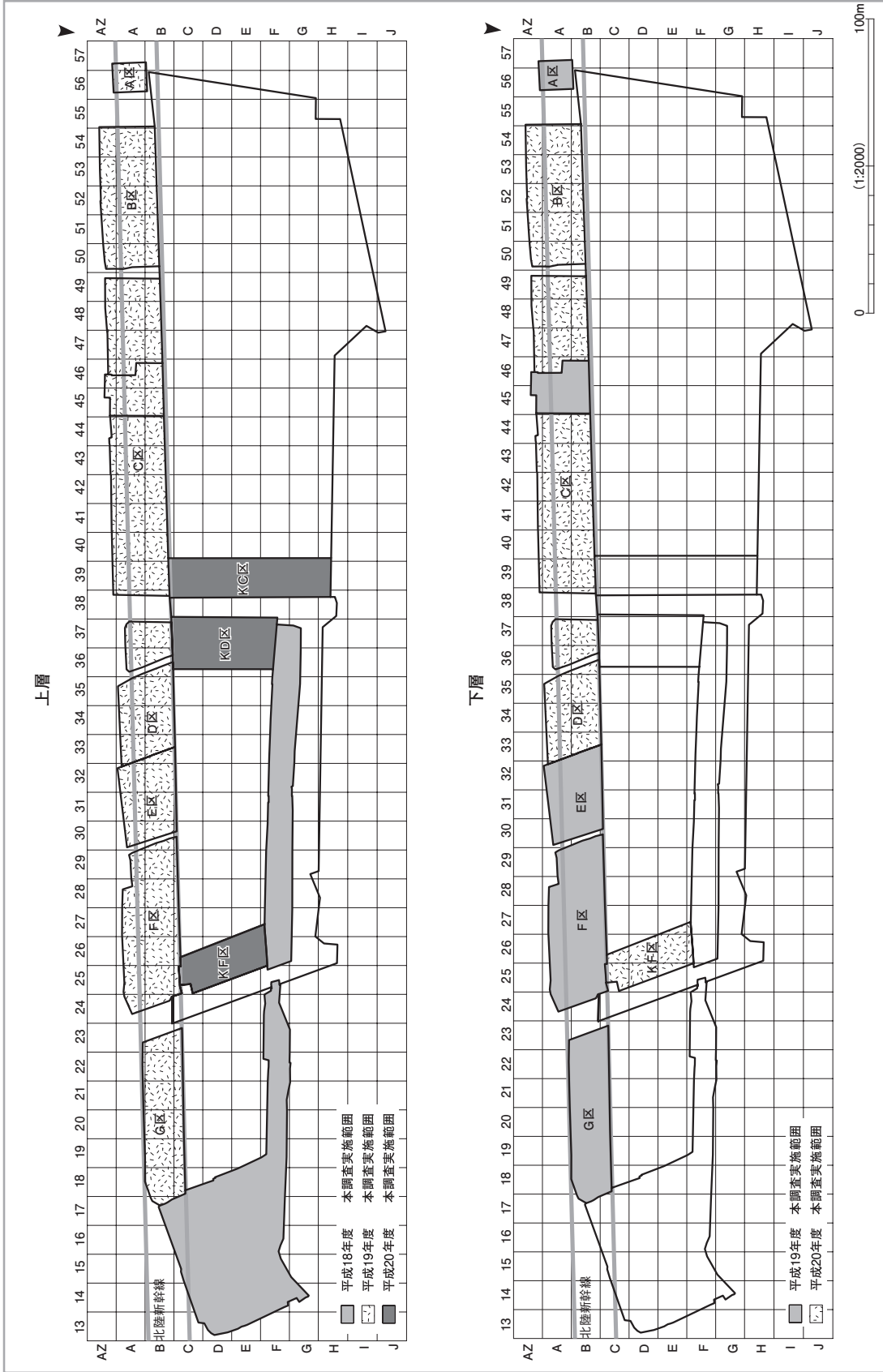
KD 区 36・37C～F の範囲。北側が平成 18 年度調査区の西端部に、南側が平成 19 年度上層・平成 20 年度下層調査 D 区に接する。西側には市道町山崎線が走る。

KC 区 38・39B～H の範囲。南側が平成 19 年度上層・平成 20 年度下層調査 C 区に接する。調査区のすぐ東側に用水路が流れている。

本調査に先立ち、調査区内の排水を目的とする暗渠排水を各調査区の片側の法尻部に設置した。また、調査区内から出る泥水が現在使われている用水路等に直接入らないよう、ノッチタンクと沈殿池による簡易の浄化槽を各調査区に設置し、排水をそこへ通過させてから現用水路等に流した。盛土、表土、包含層の一部、間層 (無遺物層) などは重機を用いて掘削した。人力による調査は、開渠掘削、流路掘削、ベルト除去等にはホソを、包含層掘削には竹ベラを、遺構検出には大ジョレン、小ジョレン、両刃ガマを、遺構掘削には竹ベラ、移植ゴテを主に使用した。遺物の取り上げは 2m ごとの小グリッドを基本とし、遺構出土の遺物はこれに遺構名・層序を付した。

2) 調査の経過

KF 区 本調査区のみ上層と下層の調査を行った。重機による表土掘削は 4 月 10 日から開始した。また、



第3図 六反田南遺跡調査区分図

2 調査の方法と経過

平成 19 年度調査 D 区の調査に基づき、包含層も遺物の出土に注意しながら重機で掘り下げた。4 月 16 日から遺構検出、4 月 18 日から遺構掘削を行う。SD551 以南は、全体に不整な溝が認められた。それらにトレンチを設け、規模、土層堆積状況、遺物出土状況を確認したところ、遺構と認められなかったので掘削調査は行わないこととした、しかし、遺物の出土が見られるものは SX の名称をつけて掘削した。5 月 9 日にタワーから全体写真撮影を行い、5 月 10 日に測量が終わり、上層の調査を終了した。引き続き、5 月 13 日から重機による間層除去を開始。また、遺物の有無を注意深く確認しながら、遺構検出面まで重機を用いて掘り進めた。5 月 19 日から遺構検出、5 月 20 日から層序確認トレンチ掘削、5 月 21 日から調査区中央部を東西に流れる自然流路の掘削調査を開始した。5 月 30 日、完掘写真の撮影を行い、調査を終了した。

KD 区 4 月 23 日から重機による表土掘削を開始する。4 月 30 日から人力による開渠掘削、5 月 1 日から層位確認、トレンチ掘削を始める。5 月 7 日から包含層掘削、5 月 22 日から遺構検出、5 月 30 日から遺構掘削を行う。掘立柱建物 1 棟をはじめ、土坑、溝、ピット、杭多数を検出した。7 月 3 日に空撮、7 月 5 日にタワーから全体写真撮影を行い 7 月 7 日に測量が終わり、上層の調査を終了した。

KC 区 4 月 16 日から重機による表土掘削を開始する。前年度調査で検出したものと同一の自然流路と平地部分からなる調査区と分かる。4 月 21 日から平地部分の包含層掘削と遺構検出、4 月 24 日から遺構掘削を併行して行う。5 月 1 日から自然流路の規模や範囲を確認するためのトレンチ掘削、5 月 9 日から自然流路の本格的な掘削を行う。2 本のベルトを境とする 3 つの区画を層位ごとに掘り下げ、記録を取りながら調査を進めた。6 月 10 日に平地部分の調査がほぼ終了した。7 月 18 日に空撮、7 月 25 日、完掘写真の撮影を行い、調査を終了した。この間、7 月 12 日に現地説明会を行い、251 人の来場者があった。

C 整理作業の経過

平成 20 年度は、出土遺物の洗浄・注記を主に調査現場で行い、遺構図面の校正・整理、出土遺物の接合復元・実測・拓本作業を調査現場と吉田建設埋蔵文化財調査部巻整理室（以下、巻整理室とする）において 12 月まで併行して行った。

平成 21 年度は巻整理室において、出土遺物の復元・実測・写真撮影、図版作成、原稿執筆、編集作業、収納作業、台帳作成を行った。

D 調査・整理体制

平成 20 年度の調査は北陸新幹線建設用地内と併行して行っており、調査体制も共通である。また、整理は平成 19 年度、平成 20 年度に行った北陸新幹線建設に伴う調査と併行して行った。それぞれの体制は『六反田南遺跡Ⅱ』[前掲]で記載済みであるが、平成 20 年度調査・整理体制と平成 21 年度整理体制について再録する。

平成 20 年度 本発掘調査及び整理作業

調査期間	平成 20 年 4 月 1 日～11 月 13 日
整理期間	平成 20 年 11 月 14 日～平成 21 年 3 月 31 日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村 正昭（事務局長）
管理	斎藤 栄（総務課長）
庶務	長谷川 靖（総務課班長）
調査総括	藤巻 正信（調査課長）
指導	寺崎 裕助（調査課担当課長代理）
調査組織	㈱吉田建設
現場代理人	藤田 系五
調査担当	細井 佳浩
調査員	継 実（4～7 月）
	雨宮 瑞生（6～9 月）
	山本 友紀
	瀧口 泰孝
	水落 雅明（4～8 月、10～11 月）
調査補助員	松井 智（4～11 月）

平成 21 年度 整理作業

調査期間	平成 21 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村 正昭（事務局長）
管理	斎藤 栄（総務課長）
庶務	松原 健二（総務課班長）
調査総括	藤巻 正信（調査課長）
指導	高橋 保雄（調査課担当課長代理）
調査組織	㈱吉田建設
調査担当	細井 佳浩
調査員	水落 雅明（4～9 月）

第 1 表 調査体制

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

糸魚川市は新潟県の南西端に位置する。北に日本海があり、三方を山々に囲まれている。西は境川を境として富山県との県境とし、南は姫川を境として長野県との県境としている。姫川沿いには「糸魚川－静岡構造線」がほぼ南北方向に存在する。東側のフォッサマグナ地域は、新生代（6500万年前）にかけて堆積した砂岩・泥岩・火山岩の比較的新しい層からなる。西側は中・古生代（1～5億年前）の石灰岩や頁岩・砂岩及び変成岩の古い地層からなる。これが姫川の左岸と右岸で見られる地質・地形の相違を生み〔鈴木2000・小林2000〕、古来から行われてきた石器・石製品の製作に大きな影響を及ぼしている。またこのようになざまな環境を持つことから、当地域は2009年に「世界ジオパーク」に指定され、国際的にも注目されている。

遺跡は海川の河口近くの右岸に所在している。海川は糸魚川市内を流域とし、河川の全長は21kmである。六反田南遺跡が所在する糸魚川市大和川地区は海川下流の右岸に形成された扇状地に位置する。しかし、糸魚川市域を流れる川はいずれも急流であり河岸段丘の形成は急、かつ段が高い。河川の流れ出る日本海も極端に海底が深くなるために、扇状地が形成されにくい。また海岸線沿いは大きな砂丘列が形成されており、さらに平坦部を狭めている。六反田南遺跡はその狭い平坦部に位置し、丘陵の張り出し部分に形成された扇状地に立地する。海川右岸の糸魚川段丘・西川原段丘・西中段丘〔青木1976〕を背後に持つ。「段丘が沖積面と接するか所で途切れるのではなく、沖積面下に潜り込んでいる可能性を示唆している」〔寺崎・水落2009〕という指摘もあるように、本遺跡の立地する面も一連の段丘に所属する可能性がある。

また遺跡から200m北には海岸線が広がり、浜は各河川から押し流された礫で覆い尽くされている。なかには姫川から流出したヒスイも多く見られ、現在でも糸魚川の観光的象徴となっており、休日にはヒスイを拾う人々の姿が多く見られる。

2 歴史的環境

A 周辺の縄文時代中期遺跡

ヒスイ産出地として知られる糸魚川市域は、縄文時代からヒスイ製玉類の製作が盛んに行われていた。また、玉類とともに蛇紋岩製磨製石斧の製作にも特化しており、この様相は、県境を越えた富山県北東部でも認めることができる。特に姫川下流域は、それらの製作拠点と目される遺跡が多く存在する。中期には、国指定史跡である長者ヶ原遺跡（10）や寺地遺跡（2）が一大生産遺跡として栄えた。六反田南遺跡もこれらと同時期に集落が営まれ、同じように玉類製作や磨製石斧製作などが行われている。

なかでも国史跡の長者ヶ原遺跡は縄文時代中期におけるヒスイ製玉類・蛇紋岩製磨製石斧が大量に製作された大規模な集落跡として知られる〔藤田ほか1964、青木1976、糸魚川市史編纂委員会1986〕。同遺跡の立地は姫川右岸の最高位段丘（長者ヶ原面）であり、本遺跡との比高は100m以上に及ぶ。早期末から

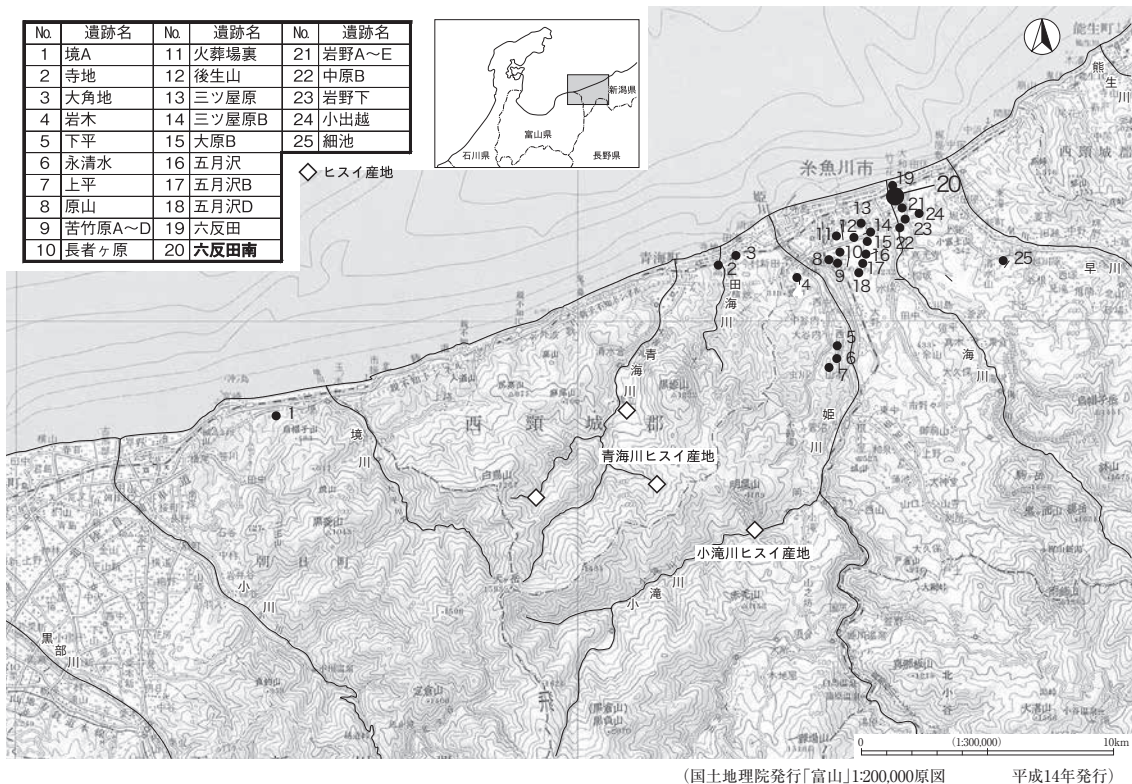
2 歴史的環境

後期中葉頃まで連綿と続く集落遺跡であるが、特に中期には当地域における拠点集落として盛期を迎えている。この長者ヶ原面には、五月沢 (16)・五月沢 B (17)・五月沢 D (18)・大原 B (15)・三屋原 (13)・三屋原 B (14)・後生山 (12)・火葬場裏 (11) 遺跡と、多くの縄文時代の遺跡が群在する。また西に隣接する河岸段丘上には原山 (8)・苦竹原 A～D (9) 遺跡が存在する。これらは、小規模集落 (五月沢 B・三屋原 B) やキャンプサイトのような短期的な遺跡と考えられるが、拠点集落である長者ヶ原遺跡を取り巻く遺跡群として重要である。

本遺跡が所在するのは、長者ヶ原遺跡から直線距離で約 3 km 北東方へ下った海川右岸の沖積低地である。本遺跡周辺にも縄文時代の遺跡が群在しており、糸魚川・西川原・西中段丘の中位段丘の平坦面上に岩野 A～E (21)・小出越 (24)・中原 B (22)・岩野下 (23)・細池 (25) 遺跡などが分布する。本遺跡の海側に近接する六反田遺跡 (19) は未調査の遺跡である。

姫川左岸の沖積面から山地にかけては、寺地 (2)・大角地 (3)・下平 (5)・永清水 (6)・上平 (7)・岩木 (4) 遺跡が分布する。寺地遺跡は中期から後・晩期にかけての集落遺跡で、中期には玉作関係資料が多量出土し、それに関連した攻玉工房址と目される後葉の竪穴住居が検出されている [寺村ほか 1987]。寺地遺跡から田海川を挟んで約 900 m 地点に立地する大角地遺跡は早期末～前期前葉の集落遺跡で、蛇紋岩製磨製石斧や滑石製装身具の製作に特化した遺跡と評価されている [加藤ほか 2006]。下平・永清水・上平遺跡は前期から中期にかけての、また岩木遺跡は中期後葉の中核的集落と目される遺跡であり、前者 3 遺跡は標高 90 m 以上の河岸段丘平坦面に、岩木遺跡は標高 25 m の低位段丘に立地している。

富山県北東部、新潟・富山県境から 1 km 付近の宮崎海岸を見下ろす海岸段丘上には、境 A 遺跡 (1) が立地する。中期から晩期にかけての拠点集落で、特に中期を中心とした玉作関係資料が多く出土している。また上山田・天神山式が多量に出土したことで知られ、これらは国の重要文化財に指定されている。



第 4 図 縄文時代中期の遺跡分布とヒスイの原産地

B 周辺の古代遺跡

古代頸城郡は、おおよそ現在の新潟県上越地域に相当する。具体的には糸魚川市、上越市、妙高市、柏崎市の西部の一部、十日町市の西部である。越国分割後、初めは越中国に含まれていたが、古志郡・魚沼郡・蒲原郡とともに越後国に編入された。越後国への編入後、頸城郡には国府が置かれたと考えられている。また、『和名抄』によると越後国は7郡33郷から成っている。郷は房戸50戸を単位とするものであるが、『和名抄』には頸城郡内の郷名が10郷記されており、越後国33郷の内三分の一を頸城郡が占めている。すなわち、越後国の人口の約三分の一が頸城郡に集中していたことを示しており、古くから開発が進んでいた地域であったことが分かる。さらに難所「親不知子不知」を控えており、北陸道各駅の中でも滄海駅には越中国佐味駅とともに駅馬8頭が常置されていたことから看取できるように、北陸道の要所であった。

当遺跡は沼川郷に含まれる。沼川郷は現在の糸魚川市域に想定されており、越後において古くから開発が進んでいたことを示すかのように、この地域には古代の遺跡と目される包蔵地が多数存在する。

青海地区（旧青海町地域）の古代の遺跡は、須沢角地遺跡（1）、西角地古窯跡（2）天神山経塚（3）が知られている。須沢角地遺跡は7世紀末～9世紀前半の集落遺跡で、『延喜式』に見られる「滄海駅」の候補地の一つにも比定されている。「角地」とは、この地域が周囲よりも高い台地状のような地形であったことに由来する呼び名〔辻2006〕で、古代の官衙関連施設の占地条件にも見合うが、いまだ明確に駅の存在を示す遺物・遺構は検出されていない。しかし、これまでの調査で、奈良～平安時代の竪穴住居31軒が検出され、竪穴住居からは須恵器坏蓋に「工」と記された9世紀前半の墨書土器や風字硯、鉄製鋤先などが出土しており、大規模な集落であったと考えられている〔土田ほか1988・辻2006〕。西角地古窯跡は、〔青木1966〕によって今村遺跡として紹介された窯跡であるが、用水路建設のために完全に消滅しており窯形態や窯数などは不明である。表採資料には杯身・杯蓋・長頸壺・鍋・甕等があり、加賀三浦遺跡中層出土遺物とほぼ同時期に考えられているが、それより新しいものも含まれているため、8世紀末～9世紀初頭の須恵器窯であると考えられている〔千家・山本1979〕。天神山経塚は、1919年に社宅建設のための整地作業の際、偶然発見された。仁安2（1167）年の紀年銘を持つ珠洲焼の経筒と、その中に納められていた和鏡が3面出土しており〔青木1966〕、平安末期に全国的に流行した末法思想の信仰形態をうかがえる資料である。

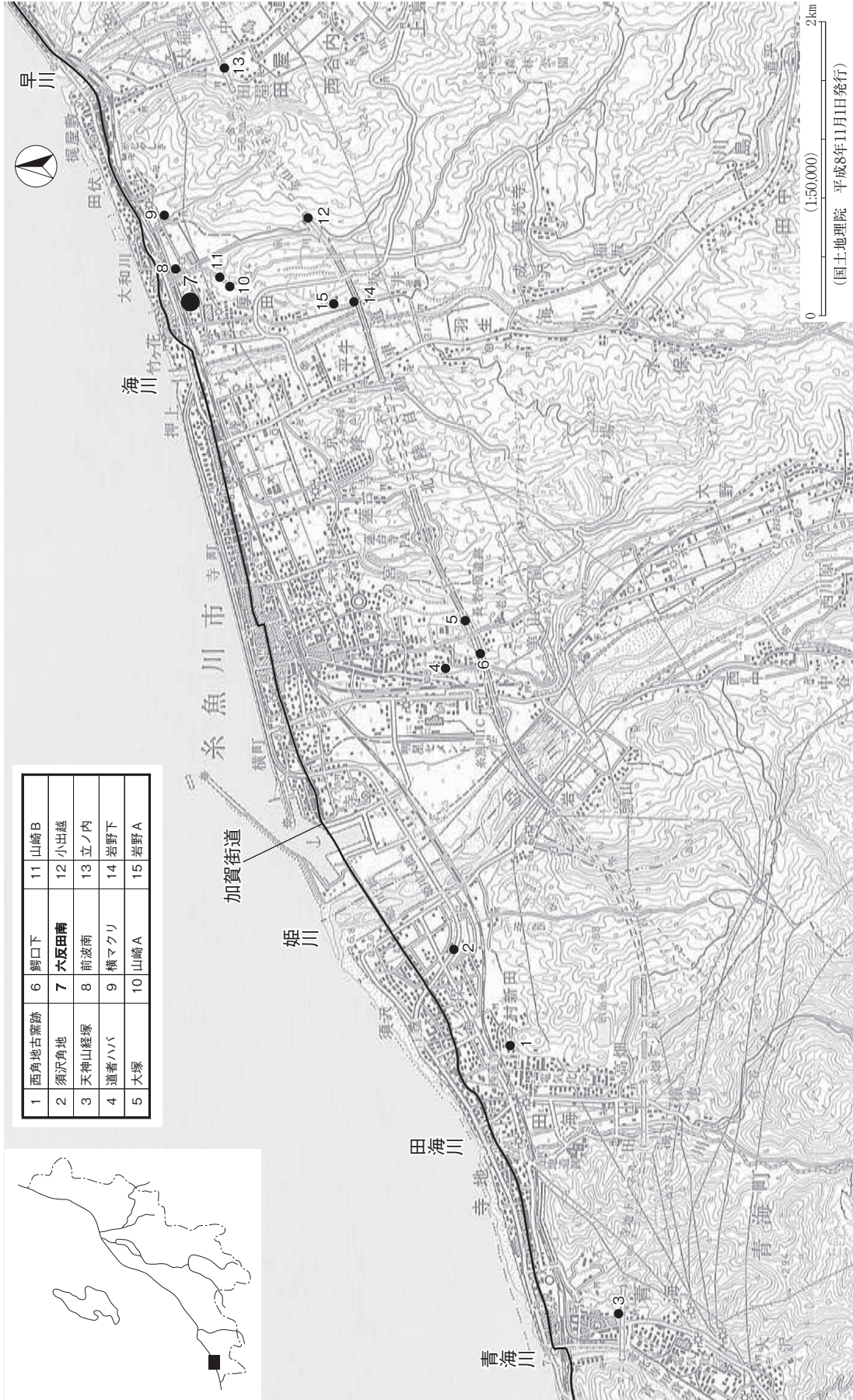
糸魚川地域（旧糸魚川市域）では、道者ハバ遺跡（4）、大塚遺跡（5）、鰐口下遺跡（6）、六反田南遺跡（7）、前波南遺跡（8）、横マクリ遺跡（9）、山崎A遺跡（10）、山崎B遺跡（11）、小出越遺跡（12）、立ノ内遺跡（13）、岩野下遺跡（14）、岩野A遺跡（15）といった集落遺跡が知られている。これらは主に海川右岸と姫川右岸の河岸段丘上の平坦面に立地し、海川・姫川下流域を見渡せる位置にあることが特徴である。

まず姫川右岸の遺跡を見ると、道者ハバ遺跡は、1984年の調査で掘立柱建物5棟、井戸1基が検出され、井戸の中から土師器や須恵器とともに灰釉陶器や近江系の緑釉陶器が出土した。また墨書土器や転用硯も出土しており、一般集落ではなく奈良・平安期に当地方の中心的な役割をなしていた集落であろうと推測されている〔土田1986〕。9世紀中葉～10世紀の遺跡である大塚遺跡は、掘立柱建物1棟、10世紀前半の墨書土器「个」が出土しており〔寺崎ほか1988〕、鰐口下遺跡では土坑から土師器椀に「山」、溝から土師器椀に「力」を記した墨書土器が出土している。いずれも9世紀後半～10世紀の所産のものが出土している〔鈴木・高橋1989〕。海川右岸の岩野下遺跡では掘立柱建物が7棟検出されており、うち1棟は床面積96㎡と大型の掘立柱建物であり、流路からは「木」、「卅」、「多」の墨書土器、「×」の刻書土器、転

2 歴史的環境

用硯が出土している [遠藤^{ほか}1987]。岩野 A 遺跡では、9 世紀前半の土師器杯、長胴甕、須恵器甕が出土している [高橋・小池 1986]。小出越遺跡からは、土師器焼成に関連すると思われる遺構が集中して検出されていることから 8 世紀末～9 世紀後半の生産遺跡と考えられており、土師器の胎土分析の結果から周辺遺跡へ流通した可能性がある。竪穴住居から「VV」、炉から「山」の墨書土器が出土している。いずれも須恵器杯の底部への墨書である [鈴木^{ほか}1988]。山崎 A 遺跡では 2006 年から産業団地造成、市道・県道改良に伴う調査が行われており、これまで古代の遺構は、9 世紀中～10 世紀末葉の掘立柱建物が 29 棟、竪穴住居が 26 軒検出されている。集落中央には床面積 150m²を超える大型掘立柱建物が存在し、その周辺には 600 点を超える土師器杯、須恵器壺と墨書のある土師器・須恵器の杯などを一括埋納した土坑が伴うことから、海川下流地域の中心的存在として、官衙的側面が想定されている [木島 2008]。

沖積平野の遺跡では、当遺跡や前波南遺跡で、新幹線建設・バイパス工事に先立つ調査がなされている [春日^{ほか}2008]。六反田南遺跡では平成 19 年度調査に引き続き、川跡から墨書土器や斎串・形代などの祭祀遺物、多くの建築材が出土している。また当報告にある墨書土器「継人」は人名と考えられる。横マクリ遺跡からは、9 世紀後半から 10 世紀前葉の土師器・須恵器が出土しており、その中には「久」「六」「甲」等の墨書土器も含まれ、その墨書部位、筆跡、器形は山崎遺跡出土のそれと同じくする。また、農具であるエブリが出土しており、出土地点からプラントオパールが検出されていることから、集落である山崎 A・B 遺跡に対する生産地であった可能性が推定されている [渡邊^{ほか}2008]。立ノ内遺跡は早川左岸に位置しており、焼土遺構とともに大型平底の製塩土器などが出土している [木島 1989]。



第5図 古代の主な周辺遺跡（加賀街道の位置は〔土田1991〕による。）

第Ⅲ章 調査の概要

1 グリッドの設定 (第6図)

六反田南遺跡Ⅲのグリッドは、平成18年度の本調査及び現前川を挟んだ東方に隣接する前波南遺跡の調査の際に用いたものを踏襲している。糸魚川東バイパスセンター杭 No.58 を基準とし、調査区全域が網羅できるよう10m単位の方眼を設定した。グリッドの基準線の方位は真北から7°16'30"西偏している。

グリッドの呼称については、東西方向は算用数字を用い調査区東端から西に向かって「1・2・3・4…」、南北基準線はアルファベットを用い南から北に向かって「A・B・C・D…」、基準線の交点を「1A・2B・3C」とし、南東隅の交点の名称を用いた。10m単位のグリッドはさらに2m単位の25個に分割し、南東隅が1、南西隅が5、北東隅が21、北西隅が25となるように番号を付し、「1B15」のように連名で呼称した。

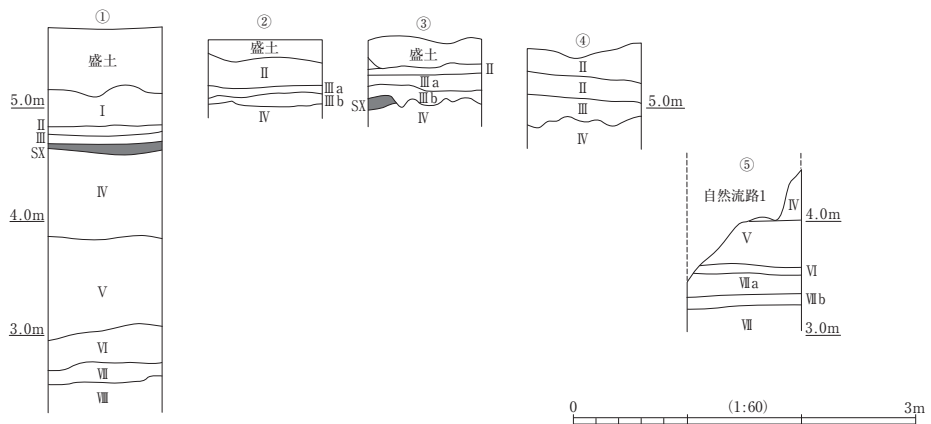
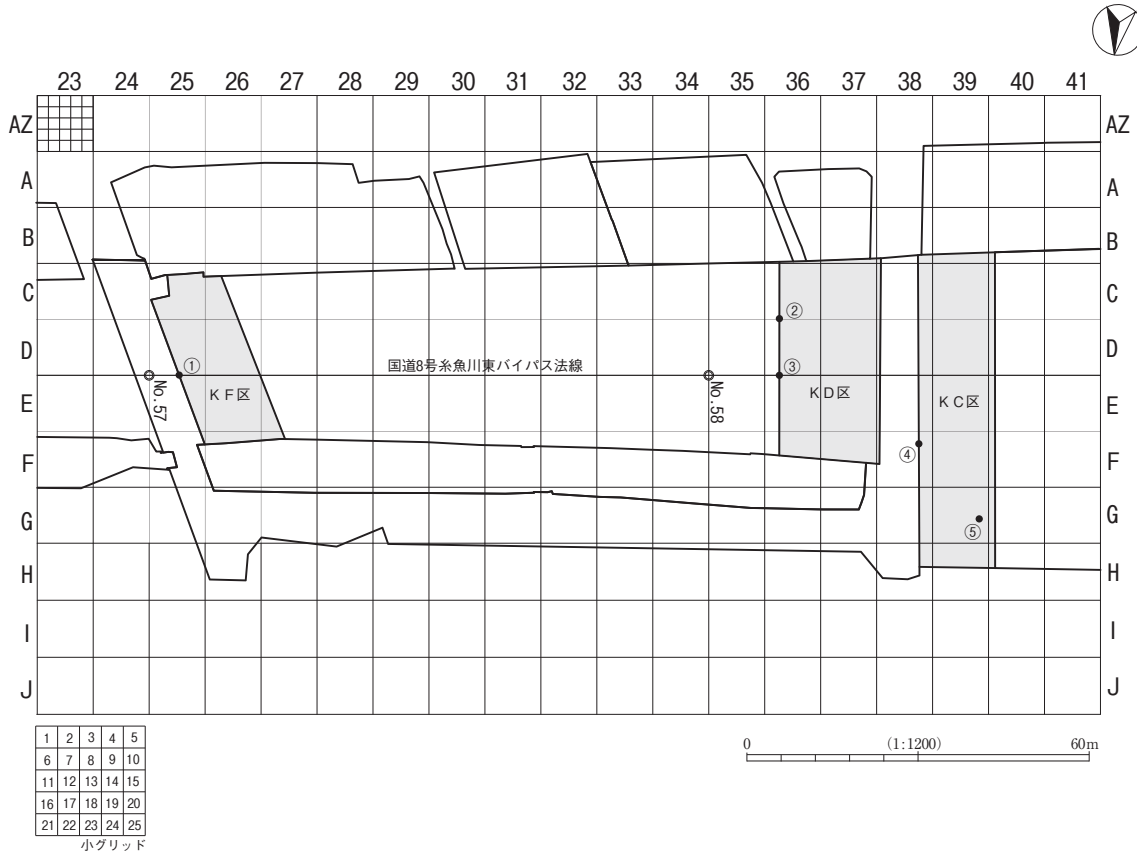
2 基本層序 (第6図)

六反田南遺跡ⅢはKF区(25～27)、KD区(36～37)、KC区(38～40グリッド)の3か所にまたがる調査区である。標高は上層が4.7～5.0m、下層が2.5～3.3mであり、西から東に向かって緩く標高を下げる。

遺物包含層は2面あり、Ⅲb層が古墳時代～古代、Ⅶ層が縄文時代中期初頭～中葉の包含層である。遺構検出面はⅣ層(古墳時代～古代の遺構検出面)とⅧ層(縄文時代中期初頭～中葉の遺構検出面)である。各調査区間には、KF区～KD区間に約90m、KD区～KC区間に約10mの未調査範囲があるが、いずれの調査区でも基本層序は一致している。

各層位ごとの特徴は、以下のとおりである。なお、各層位の認識は平成19・20年度調査(六反田南遺跡Ⅱ)と一致する。

- I 層：灰色弱粘性土(5Y4/1) 水田耕作土。
- II 層：黒褐色土(2.5Y3/1) 水田床土。マンガン粒・酸化鉄斑が混在。中～近世の遺物が出土する。
- Ⅲ a 層：灰色粘土(5Y4/1) 小礫・細砂を含む。縄文時代から中世の遺物が出土する。
- Ⅲ b 層：暗灰色粘土(N3/0) 古墳時代～古代の遺物包含層。
- Ⅳ 層：灰色粘土(7.5Y6/1) 古墳時代～古代の遺構検出面。地点により全層または下部に、暗灰黄色砂(2.5Y4/2)や灰色シルト(7.5Y5/1)が堆積するか所もある。
- V 層：灰色シルト質粘性土(N6/0) 38グリッド以東は腐植土を非常に多く含む。黒色粘土(10YR2/1)主体のガツボ層。
- VI 層：灰色シルト質粘性土(N6/0)。
- Ⅶ 層：灰色シルト質粘性土(N5/0) 縄文時代中期初頭～中葉の遺物包含層。腐植土をまばらに含む。
- Ⅷ 層：灰色シルト(N6/0) 縄文時代中期初頭～中葉の遺構検出面。



第6図 グリッドの設定と土層柱状図

第Ⅳ章 縄文時代の調査

1 K F 区

A 調査の概要 (図版2・3・57・59)

KF区では、上層の調査終了後、重機を用いて間層除去、さらに遺物の有無を注意深く確認しながら遺構検出面(Ⅷ層上面)まで重機により掘り下げたところ、遺構は見つからなかったが、調査区中央付近を南西から北東方向へやや蛇行して走る自然流路(流路1J)を検出した。検出面からの規模は幅3.3m、深さ0.5mほどで、断面形は弧状である。覆土は3層に分層され、レンズ状に堆積する。

遺物は包含層中や自然流路内及びその縁辺から中期前葉の土器と石器が少量出土した。

B 遺物

1) 土器 (図版18-1~13、図版69)

土器は少なく、中期前葉のものが出土した。1~12が深鉢、13が浅鉢である。

1はほぼ直線的に外側へ開くバケツ状を呈する器形である。口縁部に彫刻蓮華文、横位の半隆起線文、隆帯による「し」字状文を施し、胴部に半隆起線による縦位、「U」字状、逆「U」字状、円形区画内に格子目文を充填する。新崎式系Ⅰ段階[寺崎2009]に位置付けられる。2・5は口縁部がキャリパー状を呈し、端部に台形状の突起が付く。口縁部には端部に爪形文、爪形文を施す隆帯による「h」状の縦位区画、区画内に楔形刻目文、半隆起線による入組文区画内に格子目文を充填し、頸部に半隆起線と爪形文を施す。新崎式系Ⅲ段階と考えられる。4は球形に張る胴部で、文様は楔形刻目文と半隆起線による入組文区画内に格子目文を充填する。3は円筒状の突起で、端部に刻目文を施す。6は口縁部が外側へ開く器形で、口唇部内面が肥厚する。口縁部は無文で、頸部に爪形文を施す。7は6と同一個体と考えられる胴部片である。横位の半隆起線以下は縄文を施す。8~11は直線的に外側へ開く、口縁部片である。口縁部無文で、口縁部と胴部の間に側面圧痕、以下縄文である。12は底部片で、胴部外面に縄文を施す。

13は浅鉢の胴部下半~底部で、残存部分は無文である。

2) 石器 (図版23-151~162、図版73)

a 石器組成と石材組成

調査区の中央に自然流路があり、その周辺に遺物がまとまって見られる。石器は30点出土し(第2表)、うち12点を図示した。出土数はそれほど多くないが、蛇紋岩を使用した磨製石斧やその未成品が目立つ。また打製石斧やスクレイパーなど、貝殻状剥片を素材とする石器も同量で見られる。

なお、石材の分類については六反田南遺跡Ⅱ[水落2010]と同じである。

器種 \ 石材	黒色細粒砂岩	白色細粒砂岩	砂岩	安山岩	閃緑岩	蛇紋岩	合計
打製石斧	1		1				2
磨製石斧						2	2
磨製石斧未成品		1				5	6
敲石				1	2		3
スクレイパー	4		1				5
石核	1						1
貝殻状剥片	3	1	5	1	1		11
合計	9	2	7	2	3	7	30

第2表 KF区下層出土石器組成表

b 各 説

打製石斧（151・152） 151・152は貝殻状剥片を素材とした打製石斧である。151は黒色細粒砂岩、152は砂岩製である。いずれも両面加工により形状を撥形にしている。特に側縁中央部分は敲打によって整えられている。基部のラインは、151が刃部と基部の間に括れを持ち内湾状なのに対し、152は括れを持たず直線的である。刃部付近には微細な剥離痕を持つが、これには光沢痕・縦方向の線条痕が伴うことから、使用痕と考えられる。刃部は表面からの衝撃で一部折損している。

磨製石斧（153・154） 153・154は、蛇紋岩を素材とした短冊形の定角式磨製石斧である。いずれも表裏面に礫面が認められることから、扁平礫を素材にしたと考えられる。153は円刃を呈し、刃部にはわずかに刃こぼれ状の細かい剥離痕が見られる。基部には部分的に製作時の調整剥離痕が認められるが、刃部付近は入念に研磨されている。基部と刃部は、50cm程離れて出土した。154は磨製石斧の基部である。刃部は折損しており、形状は不明である。厚さ約1cmの比較的薄型の小型扁平礫を素材としている。

磨製石斧未成品（155～160） すべて調査区の中央にある自然流路の周辺から出土した。155が白色細粒砂岩であるほかは、すべて蛇紋岩製である。いずれも縦長の扁平礫を素材とする。155は、既に素材礫の表裏面が平坦で、断面は長方形を呈する。基部付近を敲打した後、研磨を開始している。156は、下端部の形状が比較的鋭角に近い厚手の礫を選択している。調整剥離時に折損している。157は、左側面を調整剥離し、敲打を加えている。156と同様に、礫の下端部は比較的鋭角に近い。右側縁は未加工だが、左側面と形状が近似している。表面と刃部付近には研磨が認められ、調整剥離が既に完了しているとも考えられる。158は調整剥離により短冊状に形成している。上端部は調整剥離中に折損している。刃部は円刃状に成形されている。わずかに研磨痕を持つが、剥離よりも前に施されたものである。159は小型扁平礫を素材とする。礫側縁から大きな剥離を行っている。また下端部からの剥離による刃部の作出も認められる。160は軟質の蛇紋岩扁平円礫で、端部に敲打痕を持つ。155～157は側縁が平坦な礫を素材としていたり、敲打により平坦面を形成していることから、定角式磨製石斧の未成品と考えられる。またすべて最大幅が刃部よりも基部側に認められることから、短冊形の未成品と考えられる。

敲石（161） 161は磨製石斧未成品がまとまって見られた、26D17で出土した。安山岩製の円礫を用いて、下端部を敲打作業に使用している。敲打の衝撃で部分的に剥離している。

スクレイパー（162） 砂岩製の貝殻状剥片を素材として、下端部に微細な剥離痕を持つ。下側縁には剥離面を持つが、これは素材剥片剥離後に形成されたことが観察できる。この剥離面自体には使用痕は見られない。図示していない4点はいずれも黒色細粒砂岩製である。大きさは長さ6.0～8.0cm、幅6.7～9.8cmである。明瞭ではないが、光沢や縦方向の線状痕を持つ。

貝殻状剥片 11点出土した。大きさは長さ3.9～9.3cm、幅5.3～14.8cmとばらつきがある。

2 K C 区

A 調査の概要 (図版4・58)

KC区は38・39B～Hグリッドである。平成20年度における調査は、縄文時代を対象とした面的な調査は行っていない。上層の古墳時代から古代の土器や木製品が多く出土した流路1の河床付近からそれらの遺物と混在して出土したものを中心に、また層序確認トレンチを掘削した際などに縄文時代の包含層から出土したものについても報告する。

B 遺物

1) 土器 (図版18～22 - 14～149、図版69～72)

土器の時期は中期前葉～中葉のものである。分類等については『六反田南遺跡Ⅱ』[山本2010]に基本的に準じた。六反田南遺跡Ⅱの土器は概して破片が小さいが、平成21年度の『六反田南遺跡Ⅳ』の調査では中期前葉の土器が完形や完形に近い形で多く出土している。本稿での分類は以下のとおりである。

第Ⅰ群 中期初頭の土器 (図版18 - 14～16)

第Ⅱ群 中期前葉の深鉢 (図版18・19 - 17～54)

第Ⅲ群 中期中葉の深鉢 (図版19～21 - 55～90)

第Ⅳ群 中期の粗製深鉢 (図版21・22 - 114～135)

第Ⅴ群 中期の鉢・有孔鏝付土器・台付土器 (図版22 - 136～138)

第Ⅵ群 中期の浅鉢 (図版22 - 139～149)

第Ⅶ群 細分時期や系統が不明な中期の土器 (図版21 - 91～113)

第Ⅰ群 中期初頭の土器 (図版18 - 14～16、図版69)

14・15は口縁部から胴部上半で、口縁部は波状を呈する。口縁部は半截竹管文の上下横位区画内に斜位の半截竹管文を充填する。頸部に半隆起線を巡らせ、胴部に斜縄文を施す。16は口縁部がキャリパー状を呈するもので、口縁部は半截竹管文の上下横位区画内に細沈線による斜格子文を充填する。

第Ⅱ群 中期前葉の深鉢 (図版18・19 - 17～54、図版69・70)

17～49は『六反田南遺跡Ⅱ』の第Ⅰ群A1b類に相当する。17は口縁部片で、半截竹管で爪形文、横位線文を施す。18は口縁部に爪形刻目隆帯と半隆起線文が巡る。19は口縁部に爪形刻目隆帯2条と半隆起線による横位線文と渦巻文を施す。20は胴部に爪形文、半隆起線による横位線文、その下に縦位の平行沈線を充填する。21は胴部に半截竹管で爪形文、横位線文を施す。

22～31は蓮華文を施すものである。22は口縁端部に爪形文、同下半に長花卉蓮華文を施す。23～27は刻印蓮華文、28は口縁端部に爪形文、その下に蓮華文を施す。29・30は口縁部に長花卉蓮華文を施す。31は口縁部の突起の下に、「h」状隆帯で縦位区画する。半隆起線による区画内は横縄文で刻まれた蓮華文が充填される。22～30は新崎式系Ⅲ段階と考えられる。

32は口縁部で、「h」字状隆帯上に爪形文を施す。新崎式系Ⅲ段階と考えられる。33は口縁部片。口縁端部から垂下する隆帯上に爪形文を施す。新崎式系Ⅰ～Ⅱ段階と考えられる。

34～40は沈線区画内に格子目文や横線文を充填するものである。34は入組文、35は「U」字状の沈線区画内に格子目文を充填する。新崎式系Ⅱ段階である。36は入組文の沈線区画内に細い横線文を充填する。

37は半隆起線上に綾杉状刻目と沈線区画内に横線文を充填する。38は「U」字状の沈線区画内に細い横線文を充填する。39は垂下する沈線区画内に横線文を充填する。40は胴部下半から底部で、底部まで垂下する沈線区画内の横線文を充填する。底部には圧痕文が認められる。36～40は新崎式系Ⅲ段階と考えられる。

41・42は横位無文帯の上下縁に刻目文を施すもので、41は新崎式系Ⅲ段階と考えられる。

43～46は半隆起線を横位、縦位、斜位に施すものである。44は横位線文による幅狭の区画内に半隆起線による縦位沈線を充填する。43・45・46は無文部分に刻目文を施す。

47は山形大波状口縁の深鉢である。口縁部は端部に平行して波状に、頸部は横位に半隆起線文が巡り、横位の半隆起線文の上に刻目文が巡る。48は口縁部がキャリパー状のもので、半隆起線文が波状を呈する口縁端部に平行して波状に、頸部は横位に巡り、波頂部の下は半円状に施す。49は胴部に半隆起線を横位、縦位に施す。

50～54は『六反田南遺跡Ⅱ』の第Ⅰ群A1類に相当する。50～52は同一個体である。波状口縁の頂部には瘤状の突起が付く。縄文地文に口縁部に波状の半隆起線文と蓮華文、頸部に横位の半隆起線が巡る。53は半隆起線を横位・縦位・半円状・入組状に、54は横位・縦位に施す。

第Ⅲ群 中期中葉の深鉢（図版19～21・55～90、図版70・71）

55～69は『六反田南遺跡Ⅱ』の第Ⅱ群A1a類に相当する。55～61は半隆起線による縦位・斜位・楕円形・「U」字状の無文部に刻目文を施すものである。55は口縁部に爪形文を施す横位の隆帯を施す。56は口縁端部に綾杉状刻目文、その下の楕円形区画内に刻目文である。57・60は「U」字状区画内に刻目文を施す。58・61は三叉文・三角形陰刻・縦位の無文部に刻目文を施す。59は縦位・斜位の無文部に刻目文を施す。

62・63は綾杉状刻目文施文隆帯を横位・斜位に施すもので、半隆起線による横位・斜位・楕円形等の区画内に刻目文・玉抱き三叉文を施す。64は半隆起線による曲線的な区画内に刻目文を施す。65は口縁部片で、端部に爪形文、その下に隆帯と半隆起線による半円形状区画で、区画内は三叉文を施す。66は胴部片で、半隆起線文・三叉文・玉抱三叉文・刻目文を施す。67は波状口縁で爪形文施文隆帯による渦巻文を施す。68は口縁部がキャリパー状を呈するもので、爪形文施文隆帯による渦巻文区画内に半隆起線を縦位に充填する。69は綾杉状刻目文施文隆帯と半隆起線による渦巻文が見られる。

70～74は『六反田南遺跡Ⅱ』第Ⅱ群A1b類に相当する。70～73は同一個体で、大型の台付の深鉢である。胴部上半がやや張り、口縁部が内湾気味に外側へ開く器形である。口縁部は無文で、胴部は縄文地文で、半隆起線により、横位線文・渦巻文・横位区画文・垂下文を施す。脚台部との境にも半隆起線が巡る。74は胴部に爪形文・半隆起線による横位・縦位線文を施す。

75～89は在地系の隆帯系列で、『六反田南遺跡Ⅱ』の第Ⅱ群A1c類に当たる。75～78は口縁部片で、隆帯・半隆起線により渦巻文等を施し、75・76・78は空白部分に三叉文を施す。79は胴部片で、半隆起線で横位・縦位・渦巻文等を施す。80～83は半隆起線で渦巻文などを施し、空白部に三叉文を施す。

84は口縁端部に玉抱三叉状の突起が付き、その下に眼鏡状把手が付き、その周囲に半隆起線文・隆帯が半円状に巡る。85も玉抱三叉状の突起が、その下は横位の半隆起線文が施される。86は胴部片で、玉抱三叉文が見られる。87は口縁部無文で、頸部に半隆起線が巡る。88は頸部に横位の半隆起線文と円形浮文、胴部に斜位の半隆起線文を施す。89は蛇行する太い隆帯とその側縁などに施される半隆起線文、空白部への三叉文などで文様が構成される。90は胴部下部～底部で、半隆起線による垂下文、弧状文が見られる。

第Ⅳ群 中期前葉～中葉の粗製深鉢（図版21・22 - 114～135、図版71・72）

114は口縁部から胴部上半で、バケツ状の胴部に内湾気味に開く口縁部の付く。口縁部は縄文、頸部は撚糸側面圧痕、胴部は無文である。115は波状口縁の深鉢。波頂部に瘤状の突起が貼付され、その周囲に縦位の撚糸側面圧痕、頸部に横位の側面圧痕、胴部は縄文である。116も波状口縁で、口縁部に縦位の側面圧痕を施す。117の口縁部は波状を呈し、波頂部上端は表裏に肥厚する。頸部に横位の撚糸圧痕、以下縄文である。118の口縁部は波状を呈する。波頂部の下に瘤状の貼付文。その周囲に縦位の撚糸圧痕を施す。119～121は縄文地文に平行沈線を横位、縦位、斜位に施す。119は口縁部片、120・121は胴部片である。122は縄文地文で、口縁部と頸部に半隆起線による横位線文が巡る。123は膨れた胴部にわずかに外反する口縁部が付く。口縁上端部は刺突文、以下縄文である。124～127は口唇部内面が肥厚するもの。126は肥厚する口唇部内面にも縄文を施す。128は平口縁に小突起が付く。129は口縁部が直線的に外側へ開くもの。130は口縁部外面が肥厚するもので、口縁部は無文、以下縄文である。131は胴部片で、木目状撚糸文を施文か。132～135は胴部下半から底部である。

第Ⅴ群 中期前葉～中葉の鉢・有孔鏝付土器・台付土器（図版22 - 136～138、図版72）

136は口縁部から胴部上半の鉢である。口縁部内面は肥厚し、沈線が巡る。外面は縄文を施す。137は有孔鏝付土器の口縁部～胴部上半である。138は台付土器の脚台部上半である。胴部との境に半隆起線文が巡る。

第Ⅵ群 中期前葉～中葉の浅鉢（図版22 - 139～149、図版72）

139～142は口縁部が内傾する。139は隆帯による渦巻文、半隆起線による楕円形区画・刻目文を施す。140は半隆起線による長方形区画内に縦位沈線を充填、半円状区画内に刻目文区画を施す。141は長楕円形区画内に刻目文を施す。142は半隆起線による楕円形区画内に刻目文を施し、区画間に縦位沈線を充填する。143は半隆起線による横位線文の下に、三叉状の陰刻を施す。144は半隆起線による横位線文を2段巡らす。145は断面三角形の隆帯を外側端部と口縁部に円形状に施し、それらの外側を半隆起線で縁取る。146は無文のもの。147は椀状の器形で、口縁部が内湾する。口縁部に平行する半隆起線が3条巡る。148は「く」の字状に屈曲するもので、縄文施文される。149は口縁部が直線的に外側へ開くもので、口縁部が無文で、胴部に縄文を施す。

第Ⅶ群 細分時期や系統が不明な土器（図版21 - 91～113、図版71）

91～98は口縁部に突起・円形貼付文・円孔などを施す口縁部小片である。99～101は同一個体である。縄文を地文とし、粘土紐の貼付により文様を構成するもので、『六反田南遺跡Ⅱ』の第Ⅱ群 B2a類に相当すると思われる。102は胴部片で、縄文地文の頸部に爪形文施文隆帯が巡る。103・104は縄文地文に断面台形状の隆帯で渦巻文等を施す。105・106は内湾する口縁部が波状を呈するもので、キャタピラ文を施す。関東地方の勝坂式に類似する。107は口縁部に半截竹管文による横位平行線文と蛇行線文を施す。胴部は縄文である。108は角押文を施すもの。109は口縁部外面に貼り付けた縄文施文の粘土紐を上下から交互に彫り込み、横位の蛇行文としたもの。110には横位と逆「U」字状の隆帯と長花卉蓮華文のような文様が見える。111は横位、縦位の半隆起線で長方形区画し、内部を横位沈線で充填する。112は半截竹管具を用い、縦位の肋骨状の文様とする。113は口縁部が内湾し、端部付近が横位の連続刺突文、その下は半截竹管による斜位の平行沈線文である。

2) 土器片円板 (図版 22 - 150、図版 72)

150は土器の胴部片を再利用したもので、半円形を呈する。

3) 石器 (図版 23 ~ 25 - 163 ~ 187、図版 73・74)

a 石器組成と石材組成

石器は27点出土し(第3表)、うち25点を図示した。KC区下層の石器は形態から明らかに縄文時代のものと考えられる石器を扱った。167を除き、すべて流路1河床からの

器種 \ 石材	黒色細粒砂岩	砂岩	安山岩	蛇紋岩	合計
打製石斧	1	3	6	1	11
磨製石斧				3	3
磨製石斧未成品				10	10
砥石		3			3
合計	1	6	6	14	27

第3表 KC区下層出土石器組成表

出土であり、包含層や遺構から面的に出土したものではない。貝殻状剥片は縄文時代以外のものも出土していると考えられ、それに形態的な差が見られないことから、すべて上層の遺物として扱った。

b 各 説

打製石斧 (163 ~ 168) 164・167・168が安山岩、166が黒色細粒砂岩、163・165が砂岩製である。すべて貝殻状剥片を素材としている。163・164は、両面加工で調整されている。基部は入念に敲打され、撥形を呈する。基部のラインは直線的で、器体は二等辺三角形に近い形状を呈する。164は上端部に折断状の剥離面が見られる。これは調整剥離の際に折損したものと考えられ、裏面右上の剥離面は折損後の調整剥離と認められる。いずれも刃部には小さな剥離痕と共に光沢も持つ。165・166は、両面加工で調整され、短冊形を呈する。基部は微細な調整剥離で仕上げているが、敲打はされていない。いずれも基部上端を折損している。167は明瞭な打瘤除去と、敲打による側面部の形成が認められる。使用痕は刃部に剥離痕が見られるが、そのほかの部位では風化によってほとんど認められない。川辺の攪乱部分からの出土であり、時期などは判然としないが、流路出土の打製石斧と形状が近似している。168は右側縁は表面から、左側縁は裏面からの片面加工である。器体中央に最大幅を持ち、刃部にかけてすぼまる形状を呈する。両面加工の打製石斧としては加工が不十分な印象であるが、断面形は両側縁均等であり、製品と考えられる。刃部に認められる剥離痕は使用痕と考えられるが、明瞭な線状痕や光沢等は認められない。

打製石斧未成品 (169 ~ 171) 169が流紋岩、170・171が安山岩製である。169は大型の貝殻状剥片を素材とし、両面加工により大ぶりの打製石斧の形状を呈する。170は大型の扁平礫を素材とする。素材厚も4.8cmと比較的厚いものを選択している。片面加工を外周させて縁辺に表裏面と平行する稜を作出している。裏面にも調整剥離痕が認められることから、両面加工に移行すると考えられる。刃部側に最大幅を持つことから、撥形の未成品と考えられる。171は礫面の湾曲が強いこと、主要剥離面が認められないことから、礫素材のものと考えられる。大きな剥離や節理面を活かして素材を薄く形成した後、微細な調整剥離で整えている。特に刃部付近は下端の稜線が水平になるよう入念に調整されている。刃部にかけてすぼまる形状であり、168のような器体中央部に最大幅を持つ短冊形の未成品と考えられる。これら礫を素材とする打製石斧の刃部は調整剥離で形成されている。本遺跡の打製石斧は剥片の鋭い縁辺を残して製作されるものが多く、刃部の在り方に違いが認められる。

磨製石斧 (172 ~ 174) いずれも蛇紋岩製のものである。172・173は磨製石斧の先端部で、刃部の形

状は円刃を呈する。174は基部である。いずれも厚さが1cm前後である。研磨により明瞭な側面が作出されていることから、定角式磨製石斧と考えられる。172は、器体の長軸に対して平行な側面を持つことから短冊形と考えられる。折損後に裏面方向から調整剥離を加えている。173は風化により判然としないが、172と同様の形状のものと考えられる。174は表裏面に礫面を持つことから、1.0cm程度の薄手の礫を選択して、製作したと考えられる。

磨製石斧未成品（175～184） いずれも蛇紋岩を用いたものである。最大幅を器体中心付近に持つものが多いことから、すべて短冊形の未成品と考えられる。175～179は敲打されているものである。175は縦長の楕円形で、断面が丸い礫を素材としている。側面の調整剥離は少なく、敲打により、平坦面を形成している。礫面に研磨痕が認められる。下端部は敲打の衝撃で破損している。上端部は、調整が簡素なことから基部側と考えられる。176は扁平礫を素材としている。両面加工で調整し、側縁は敲打で平坦面を作出している。裏面は特に調整剥離が入念で、礫面を除去している。刃部も微細な調整剥離で円刃様に仕上げている。177は弱く波状に湾曲した扁平礫を素材としている。表裏面の研磨痕は調整剥離より前に施している。右側縁は、礫の湾曲を調整するために大小の剥離調整と敲打により、長軸に平行した側面を作出する。左側面は、既に長軸方向に平行していることから調整剥離の必要がなく、敲打で側面を成形している。178は表面を研磨した後、製作を開始している。左側面は両面加工と敲打により成形している。右側縁は調整剥離をせず敲打のみで仕上げているが、敲打の衝撃で破損している。179は楕円扁平礫を素材として、調整剥離と敲打により成形している。幅が広い短冊形の磨製石斧に仕上がると考えられる。

180は調整剥離されたものである。厚手の楕円礫を素材とする。右側縁は、剥離により器体に対して水平な稜を形成する。裏面には大きな剥離面があり、打点付近にはネガティブな打瘤が複数認められる。表面下方の剥離面にも同じことがいえる。これは、貝殻状剥片の石核に見られる打点付近の様子と近似している。

181～183は擦り切りされたものである。181は全面に敲打し、さらに表面を研磨した後、擦り切りを施している。右側面は擦り切り溝にしたがい、表裏面に垂直な側面を剥離している。擦り切り後の剥離面は敲打により、平坦化されている。左側面は剥離が器体内部に及んでしまい、破損している。182は表面に擦り切り痕を持つ。しかし擦り切り溝を断ち切るように、裏面から剥離をしている。擦り切りによる形成を放棄して、通常の調整剥離による形成に切り替えたものと考えられる。下端部は両面加工で鋭角に調整されている。183は裏面に擦り切りを持つ。これは、大型の剥片の主要剥離面に擦り切り溝を施したものである。約4cm幅の素材を獲得しようとするが、剥離は溝にしたがわず、器体に直行している。表面に調整剥離痕を持つことから、これを素材として製作を再開したと考えられる。

184は荒割されたものである。縦長の扁平礫を素材とする。左側縁に剥離で水平な稜を形成している。短冊形の未成品と考えられる。

砥石（185～187） いずれも砂岩製である。185は三辺を砥作業に使用し、平面形は方形を呈する。186は下端と左側縁を砥作業に使用している。下端は、2方向からの砥作業で砥面が屈折している。187は三角形の剥片の三辺をそのまま砥作業に用いている。これらの砥面は、剥片の鋭利な端部形状を利用し、ほぼ未調整で砥面を形成していることがうかがえる。断面形は砥面と原礫面・剥離面との間にテラス状に段を持ち、その段で面を区画する。研磨痕は必ず長軸に対して直線的に平行する。

第 V 章 弥生時代以降の調査

1 遺 構

A 概 要

弥生時代以降は、上層の調査として、IV層を遺構検出面として行った。東西 150m、南北 30～55m の範囲の 3 か所の調査区から掘立柱建物 4 棟、土坑 16 基、溝 40 条、性格不明遺構 4 基、自然流路 2 条等を検出した。時代別では、KF 区の北側、KD 区、KC 区の土坑や溝の多くが古墳時代前期、KD 区や KC 区の掘立柱建物、ピットの多くが古代と考えられる。

遺構の名称は、溝、土坑、ピットの一部、性格不明遺構については、平成 19 年度調査に続く番号を連番として使用した。掘立柱建物を構成する個々の柱穴については、上記のように連番とし、建物の名称 SB は平成 19 年度調査に続く番号を使用した。KD 区の小ピットは数が多かったため、大グリッド毎に 1 から連番とし、36EP1、37F2 などと表記した。また、KD 区の杭については 1 から連番とし、杭 1 から杭 68 までとした。なお、遺構の平面形、及び断面形については [加藤 1999]、土層の堆積状況については [荒川 2004] に準じている。

B 各 説

1) K F 区 (図版 4・5・60)

KF 区は 25～27 C～F に位置し、北側は平成 18 年度調査区に接し、南側が平成 19 年度調査の F 区に近接する。調査は IV 層を遺構検出面 (標高 4.6～4.7m) として、溝 3 条、土坑 1 基、性格不明遺構 1 条を検出したが、そのうち北側の SD201 は平成 18 年度に、南側の SX501 は平成 19 年度にそれぞれ調査したものの続きを調査した。SD551 以南は、平成 20 年度調査の F 区、G 区と同様に全体に不整な溝や土坑状の落ち込みが認められたため、それらにトレンチを設定して規模、土層堆積状況、遺物出土状況を確認した。その結果、遺構と認められなかったため掘削調査は行わないこととしたが、遺物の出土が見られた SX501 については掘削調査した。

I - SD201 (図版 5・60)

平成 18 年度に調査した溝の続きを調査した。26D～26F に位置する南北に長い溝で、北側は平成 18 年度発掘調査部分へと続き、南側は調査区外へ延びる。本調査区内での規模は、長さ 13.8m・幅 3.3～5.1m である。溝の底部は高低差がやや著しく、深さが 32～59cm となる。断面形は弧状を呈し、覆土は深いところで 7 層に分層され、レンズ状に堆積する。遺物は土器が溝の北側でやや多く出土している。主な土器は甕 (図版 26 - 188～191)、壺 (図版 26 - 193・194・199)、鉢 (図版 26 - 195)、高杯 (図版 26 - 196・197)、器台 (図版 26 - 198) が出土している。古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

SD551 (図版 5・60)

26D・E に位置し、I - SD201 の南側に平行する細い溝で、a、b に分けた。SD551a は長さ 1m・幅 0.2

1 遺 構

～0.3m、深さ3cm、SD551bは長さ8.2m、幅0.3～0.6m、深さ4～6cmである。断面形は弧状を呈し、覆土は褐灰色シルト質粘土の単層である。遺物は土師器片が少量出土している。

SD552 (図版5・60)

25・26Eに位置し、SD201の北側右岸から東へ延びる溝で、東側は調査区外へ延びる。長さ1.8m・幅0.6～2.0m、深さ10cmである。断面形は弧状を呈し、覆土は灰黄色シルト質粘土の単層である。遺物は土師器片が少量出土している。

SK553 (図版5・60)

26E25に位置する。平面形は不成形で、長径169cm・短径96cm・深さ11cm、断面形は階段状である。覆土は2層に分層され、レンズ状に堆積する。遺物は土師器小片が少量出土している。

II - SX501 (図版5・60)

26Cに位置するもので、平成19年度において調査したものと同一である。残存する規模は、長さ4.2m・幅2.1m・深さ6～15cmで、断面形は階段状である。覆土は2層に分層され、レンズ状に堆積する。遺物は土師器小片がまばらに少量出土している。

2) K D 区 (図版4・6・7・10～17・56・58・60～64)

KD区は36・37B～Dに位置し、北側は平成18年度調査区に、南側は平成20年度調査D区に接する。調査はIV層上面を遺構検出面(標高4.8～5.1m)として、掘立柱建物1棟、溝33条、土坑10基、ピット327基、杭68基、性格不明遺構1基を検出した。遺構の時期は、溝や土坑が古墳時代前期、掘立柱建物とピットが古代、杭が中世頃のものが多い。なお、調査区北西部は、現代の攪乱によって遺構の多くが削られていた。

a 掘立柱建物

SB5 (図版6・10・11・58・61・62)

37CDに位置する建物である。桁行3間・梁行2間の建物で、面積は36.2㎡を測り、長軸方向はN-4°-Eを向く。柱間寸法は2.2～2.9mに収まる。建物を構成する柱穴には柱根は残っていなかった。柱穴の平面形は円形ないし楕円形を呈し、断面形はU字状あるいは片側に段のある階段状である。柱穴の規模は東西の8基が長径50～118cm・短径40～92cm・深さ39～76cmで、梁行中央の2基が長径38cm・短径36～38cm・深さ36～46cmで、覆土は5～14層に分層される。37DP18、37DP20は古墳時代前期のSD576aを切っている。遺物は、各柱穴から土器の小片が少量出土しているが、時期の特定できるものはなかった。

b 土 坑

SK554 (図版6・12・58)

36C18～20・23～25に位置する。平面形は長方形で、長径418cm・短径146cm・深さ24cm、断面形は弧状である。覆土は3層に分層され、レンズ状に堆積する。遺物は土器片が少量出土した。

SK555 (図版6・12)

36C13・14・18・19に位置する。平面形は不成形で、長径210cm・短径76cm・深さ28cm、断面形は階段状である。覆土は3層に分層され、レンズ状に堆積する。遺物は土器片が少量出土した。

SK559 (図版6・12・58)

37C1・2・6・8に位置する。平面形は不整形で、長径230cm・短径172cm・深さ12cm、断面形は台形状である。覆土は褐灰色シルト質粘土の単層である。遺物は土器片がごく少量出土した。

SK566 (図版6・13・63)

37C7・8・10～12に位置する。平面形は不整形で、長径300cm・短径240cm・深さ40cm、断面形は階段状である。覆土は3層に分層され、レンズ状に堆積する。遺物は甕(図版27-214)など土器片が少量出土している。

SK569 (図版7・13・58)

37E16・21・22、37F1・2に位置するもので、西側は攪乱を受けている。平面形は不整形で、残存する長径480cm・短径152cm・深さ40cm、断面形は階段状である。覆土は8層に分層され、ブロック状に堆積する。遺物は土器片が少量出土している。

SK570 (図版7・13・63)

36E23・24、37F3・4に位置する。平面形は楕円形で、長径326cm・短径162cm・深さ35cm、断面形は階段状である。覆土は6層に分層され、レンズ状に堆積する。遺物は土器片が少量出土している。

SK573 (図版7・13・63)

37E7・8・12・13に位置するもので、中央から東寄りの大部分が攪乱を受けていた。平面形は不整形で、長径196cm・短径178cm・深さ32cm、断面形は台形状である。覆土は3層に分層され、レンズ状に堆積する。遺物は、甕(図版27-215・216)、壺(図版27-218)、鉢(図版27-217・219)、小型器台(図版27-220)などの土器片が少量、まばらに出土した。また、緑色凝灰岩の細かい碎片が少量点在していた。

SK575 (図版6・14・56・58・62)

36D20・25・37D16・21・22に位置する。平面形は楕円形で、長径274cm・短径128cm・深さ25cm、断面形は台形状である。覆土は3層に分層され、1層は褐灰色粘土、2層は褐灰色シルト質粘土、3層は灰色粘土である。遺物は1～2層にかけて多く出土した。土器は甕(図版26・27-200～206)、壺(図版27-207・208)、鉢(図版27-209)、高杯(図版27-210)、器台(図版27-211・212)が潰れたような状態で出土した。石製品は蛇紋岩製の勾玉(図版35-415)、緑色凝灰岩製の管玉未成品(図版35-426)、内磨砥石(図版35-437)が出土した。出土土器から古墳時代前期中葉の所産と考える。

SK581 (図版7・14・64)

36D25・37E5に位置する。平面形は円形で、長径102cm・短径72cm・深さ21cm、断面形は弧状である。覆土は2層に分層され、レンズ状に堆積する。遺物は甕(図版27-221)、高杯(図版27-222)、小型器台(図版27-223)などの土器片が少量出土した。

SK582 (図版6・14・58)

36C23・37D3に位置する。平面形は長方形、長径256cm・短径106cm・深さ15cm、断面形は弧状である。覆土は2層に分層され、水平状に堆積する。遺物は出土していない。

c 溝

SD576 (図版6・7・58・64)

調査区の西端、37D・Eに位置する平面形が不整な長い溝で、2か所で途切れるためa、b、cに分けられた。SD576aは長さ9.7m・幅1.1～3.9m・深さ16～34cmで、南西部は調査区外へ延びている。SD576b

1 遺 構

は長さ2.2m・幅0.7m・深さ14cmである。SD576cは残存する長さ7.4m、幅1.1～2.2m、深さ16～25cmで、西側は調査区外へ延び、北東部は攪乱を受け失われている。断面形は弧状、台形状、階段状である。覆土は1～5層に分層され、レンズ状、あるいはブロック状に堆積する。遺物は土器や石製品が比較的多く出土した。土器は甕（図版28 - 228～233・242・246～248）、壺（図版28 - 234～238・243・249～252）、鉢（図版28 - 241・254）、高杯（図版28 - 255）、小型器台（図版28 - 244・245・256・257）などが細かく砕けた状態で出土した。石製品は緑色凝灰岩製の管玉未成品（図版35 - 418・422）、甗玉未成品（図版35 - 429）、砥石（図版36 - 443）が出土した。建物の周溝となる可能性も考えられるが、調査区外へ延びる部分が多いため、詳細は不明である。出土土器から古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

SD579（図版7・58）

調査区の北西端、37F7・8・12・13に位置する溝で、西側は攪乱を受け失われている。長さ3m以上、幅2.3m以上、深さ40cmである。覆土は5層に分層され、レンズ状、あるいはブロック状に堆積する。遺物は甕（図版29 - 258）、壺（図版29 - 259）などの土器片が少量出土している。

SD556～558・560～562・564・565・567・568・571・572・578～580・583～596（図版6・7・58）

KD区ではSD576のほかに30条の溝を検出した。形態から大きく3類に分けることが可能である。1類は平面形が直線的で、幅12～26cm・長さ0.7～2.3mほど・深さ4～9cmで、断面形が弧状である。覆土は単層、あるいは2層に分層され、褐灰色粘土などが堆積する。SD556・560・561・587・590・595が該当する。遺物はSD556・560・561・595から土器片がごく少量出土した。2類は平面形が直線的で、幅30～70cmほど・長さが0.7～3.5mほど・深さ5～20cm前後で、断面形は弧状である。覆土は単層、あるいは2～3層に分層され、褐灰色粘土や灰色粘土などが堆積する。長さが2m以上のSD572と2m未満のSD568・571・583～586・588・589・591・593・594・596が該当する。遺物はSD568・571から土器片が少量出土した。3類は平面形が不成形のものが多く、幅50～200cmほど・長さが2～4mほど・深さ6～17cmで、断面形は弧状、あるいは台形状である。覆土は単層、あるいは2～5層に分層され、褐灰色粘土などが堆積する。SD557・562・564・565・567～580が該当する。遺物はSD557・562・564・565・567・580から出土している。これらの溝の多くは古墳時代前期の所産と考えられる。

d ピ ッ ト（図版6・7・58）

KD区では大小のピットを327基検出した。以下ではまず、主要なものを説明し、次にピットの大半を占める小ピットについて概要を示す。

P574（図版7・15・63）

36F17に位置する。平面形は楕円形で、長径70cm以上・短径60cm・深さ20cmで、断面形は弧状である。覆土は2層に分層され、レンズ状に堆積する。遺物は甕（図版29 - 261）、器台（図版29 - 262）などの土器片がやや多く出土している。

37CP3（図版6・15・63）

37C23に位置する。平面形は楕円形で、長径94cm・短径58cm・深さ59cmで、断面形は台形状である。覆土は6層に分層され、レンズ状、ブロック状に堆積する。遺物は壺（図版29 - 263）などの土器片が少量出土している。

37DP22 (図版10・11・58)

37D13・17・18に位置するもので、平面形は長方形で、長径158cm・短径120cm・深さ28cmで、断面形は台形状である。覆土は4層に分層され、レンズ状に堆積する。遺物は甕(図版29-267)、壺(図版29-266)、鉢(図版29-265)などの土器片がやや多く出土している。

KD区では304基の小ピット(ここでの小ピットは長径40cm以下・短径30cm以下とする)を検出した。これらは建物や柵などの構造物を構成していたと思われるが、調査中や図面上においても構造等を明らかにできなかった。平面形は円形、ないし楕円形を呈するものが大半である。これらを青灰色、または暗青灰粘土を主体的に含む1類、灰色、または暗灰色(粘)土を主体的に含む2類に大別し、1類はさらに深さ10cm以下の1a類、11~20cmの1b類、21cm以上の1c類に細分した。

36Cは23基あり、長径14~40cm・短径11~25cm・深さ11~28cmで、1a類が1基、1b類が11基、1c類が2基、2類が9基認められた。36Dは51基あり、長径14~36cm・短径12~29cm・深さ8~23cmで、1a類が4基、1b類が29基、1c類が11基、2類が7基認められた。36Eは75基あり、長径12~38cm・短径12~29cm・深さ7~29cmで、1a類が14基、1b類が45基、1c類が6基、2類が10基認められた。36Fは23基あり、長径13~36cm・短径11~28cm・深さ8~36cmで、1a類が4基、1b類が14基、1c類が1基、2類が4基認められた。37Cは47基あり、長径12~33cm・短径12~27cm・深さ5~30cmで、1a類が7基、1b類が34基、1c類が3基、2類が3基認められた。37Dは48基あり、長径12~40cm・短径8~27cm・深さ5~23cmで、1a類が11基、1b類が31基、1c類が3基、2類が3基認められた。37Eは25基あり、長径12~30cm・短径8~24cm・深さ8~26cmで、1a類が1基、1b類が9基、1c類が3基、2類が12基認められた。37Fは12基あり、長径14~39cm、短径13~30cm・深さ9~25cmで、1a類が1基、1b類が5基、1c類が1基、2類が5基認められた。

遺物は、土器片がまれに出土する程度で、時期を特定するに至らないが、遺構の覆土から1c類は古墳~古代の柱穴となる可能性がある。

e 性格不明遺構

SX577 (図版7・58)

36E12・13・17・18に位置する。平面形は不整形で、長径186cm・短径96cm・深さ36cmで、断面形は階段状である。覆土は5層に分層され、レンズ状、ブロック状に堆積する。遺物は壺(図版29-260)などの土器片が少量出土している。

f 杭 (図版16・17・63)

68基検出された杭は、調査区全体にほぼ認められるが、北西端から南東端に連なるようにも見える。杭はすべて打ち込み式で、杭1は掘形を持つように見えるが、ピット埋没後に杭が打ち込まれている。杭の形状はさまざまで、芯持丸木材の杭で、周縁数方向から数度にわたり先端を削り出したもの(杭7・杭28・杭34・杭41・杭51・杭57・杭62・杭64・杭69等)、先端の削り出しが認められないもの(杭30・杭66)。割材や板目材を周縁数方向から数度にわたり先端を削り出したもの(杭31・杭44・杭63等)、先端の削り出しが認められないもの(杭13・杭17・杭22・杭43等)がある。杭の形状などから、すべて中世以降に打ち込まれたと考えられる。

18に位置するもので、平面形は楕円形を呈し、長径105cm・短径72cm・深さ26cmで、断面形は半

3) K C 区 (図版 4・8～12・14・15・56・58・64～68)

KC 区は 36・37B～D に位置し、北側は平成 19 年度調査区に、南側は平成 20 年度調査 D 区に接する。調査はⅣ層上面を遺構検出面 (標高 4.5～5.0m) として、掘立柱建物 1 棟、溝 3 条、土坑 3 基、ピット 36 基、杭 8 基、自然流路 2 条を検出した。

a 掘立柱建物

SB1 (図版 8・12・64)

流路 1 の東側縁辺、38・39B に位置する側柱建物である。平成 19 年度の調査では桁行 2 間以上、梁行 2 間の建物であること以外は詳細不明であったが、今回の調査で柱穴が 3 基検出されたことにより桁行 3 間・梁行 2 間の建物であることが分かった。面積は 39.8㎡を測り、長軸方向は N-6°-W を向く。柱間寸法は 2.5m 前後に収まる。建物を構成する柱穴の平面形は隅丸方形、ないし楕円形を呈し、断面形は台形状である。規模は東西の 8 基が長径 74～90cm・短径 55～79cm・深さ 33～52cm で、梁行中央の 2 基が長径 40～65cm・短径 34～35cm・深さ 20～39cm である。覆土は 2～4 層に分層され、灰黄褐色土や褐灰色土が堆積する。遺物は P166・168～171・429・437 で土師器の小片が出土しているが、時期の特定できるものはなかった。

SB3 (図版 8・10・64・65)

調査区の南側、38・39C に位置する。桁行 4 間・梁行 1 間の建物と考えられるが、南西隅の柱穴 1 基と北東部の 2 基は、前者が流路 1 に、後者は流路 2 に壊されたためか、検出できなかった。面積 43.5㎡を測り、長軸方向は N-62°-W を向く。柱間寸法は桁行 2m・梁行 5.4m 前後に収まる。検出された柱穴 7 基のうち 3 基に柱根が残っていた。柱穴の平面形は円形、ないし楕円形を呈し、断面形は台形状、あるいは階段状である。規模は長径 53～70cm・短径 38～56cm・深さ 11～42cm である。覆土は 4～7 層に分層され、黒褐色粘質シルトや褐灰色シルトが堆積する。遺物は P419・420・430・426 で土師器の小片が出土しているが、時期の特定できるものはなかった。本建物は SB1 や SB5 と主軸方向や構造が異なること、一部であるが柱穴に柱根を残していること、古墳時代前期の溝と考えられる SD441 を切り、上層に 9～10 世紀頃の土師器を含む流路 1 と、下層にやはり 9～10 世紀の土師器を主体的に含む流路 1 に柱穴の一部が壊されていること、流路 1 から 8～9 世紀代の須恵器がややまとまって出土していることから、8～9 世紀代に比較的短期間に営まれた建物と考えられる。

SB4 (図版 8・11・65)

39D に位置する。桁行 3 間・梁行 1 間以上の建物で、東側が流路 2 に壊されている。長軸方向は N-38°-E を向き、柱間寸法は 1.3～1.7m である。建物を構成する柱穴には柱根は残っていなかった。柱穴の平面形は円形、ないし楕円形を呈する。規模は長径 24～48cm・短径 21～38cm・深さ 5～19cm である。柱穴を構成する P402 は、平面形が楕円形を呈し、長径 48cm・短径 38cm・深さ 5cm で、断面形は台形状を呈する。覆土は 2 層に分層され、黒褐色粘質シルトと褐灰色シルトが堆積する。遺物は P405、P402 で土師器の小片が出土しているが、時期の特定できるものはなかった。

b 土 坑

SK433 (図版8・14・66)

39C23・39D3に位置する。平面形は不整形で、長径204cm・短径168cm・深さ82cmで、断面形は台形状を呈する。覆土は5層に分層され、レンズ状に堆積する。遺物は高杯(図版29-270)などの土器片が少量出土している。

SK443 (図版8・14・66)

38C15・20・39C11・16に位置する。平面形は楕円形で、長径170cm・短径104cm・深さ45cmで、断面形は凹凸のある半円状を呈する。覆土は2層に分層され、レンズ状に堆積する。遺物は甕(図版29-271)、壺(図版29-272)などの土器片が少量出土している。

SK472 (図版8・14・66)

39G21に位置する。平面形は楕円形で、長径120cm・短径86cm・深さ67cmで、断面形は台形状を呈する。覆土は11層に分層され、レンズ状に堆積する。

c 溝

SD441 (図版8・66)

調査区の南側、39B～39Cに位置する南北に長い溝で、南東側をSD445に、東側をP419に、北側をP420・451に切られている。長さ4.4m・幅0.7～1.1m・深さ49～56cmで、断面形は台形状である。覆土は1～3層に分層される。遺物は甕(図版29-274・275)、壺(図版29-273)などの土器片が少量出土している。

SD445 (図版8・66)

39B～39Cに位置する南北に長い溝で、南側でSD441を、中央やや北寄りでもSD452の東側を切る。長さ6.9m・幅0.5～1.4m・深さ13～20cmで、断面形は台形状である。覆土は2～3層に分層される。遺物は甕(図版29-276～278)、壺(図版29-279)、小型器台(図版29-280)などの土器片がやや多く出土している。

SD449 (図版8・58)

39D1・2に位置し、南側にSX447が接する。長さ1.7m、幅0.4cm、深さ7cmで、断面形は凹凸のある半円状である。覆土は褐灰色粘土の単層である。遺物は土器片がごく少量出土している。

SD452 (図版8・66)

39C6～8・11～13に位置する東西に長い溝で、東側をSD445に切られている。長さ2.7m、幅0.9～1.1m、深さ24cm、断面形は台形状である。覆土は2層に分層され、レンズ状に堆積する。遺物は壺(図版29-281～283)などの土器片が少量出土している。

d ピット (図版8・15・58・66・67)

KC区では、建物を構成する柱穴を除くと大小36基のピットを検出した。平面形は円形、ないし楕円形で、断面形は弧状や台形状を呈するものが多い。規模は長径が40cm未満で深さ5～32cmの小規模のものが20基、長径が40cm以上100cm未満で深さ13～62cmの中規模のものが14基、長径が100cm以上で深さ13～26cmの大規模なものが2基認められる。そのうち、P428(図版8・15・65)は39C17・

1 遺 構

18 に位置するもので、平面形は楕円形を呈し、長径 105cm・短径 72cm・深さ 26cm で、断面形は半円状を呈する。覆土は 2 層に分層され、レンズ状に堆積する。遺物は甕（図版 29 - 284 ~ 286）、壺（図版 29 - 287）などの土器片が少量出土している。その他のピットからは土器片がまれに出土する程度で、時期の特定には至らないが、覆土や周辺の遺物出土状況から古墳～古代のものが多いと考えられる。

e 性格不明遺構

SX446（図版 8・14・58）

38C5・39C1 に位置する。平面形は半円状の不成形で、長径 350cm、短径 74cm、深さ 9cm である。遺構内には小ピットがあり、長径 22cm、深さ 16cm である。遺物は土器片が少量出土している。

SX447（図版 8・58）

39C ~ 39D に位置する南北に長いもの。平面形は不成形で、長径 390cm、短径 58 ~ 112cm、深さ 4 ~ 8cm、断面形は凹凸状である。覆土は褐灰色粘土の単層である。遺物は土器片が少量出土している。

f 杭（図版 9・52・93）

流路 1 の北東部からは杭 463（38G19）（図版 52 - 551）、杭 464（38H4）（図版 52 - 549）、杭 462（38H5）（図版 52 - 550）の 3 基を検出した。これらは、本流路が埋まってから打ち込まれた可能性が高い。

g 流 路

流路 1（図版 9・58・67・68）

調査区の南西隅から北東側へと流れるもので、南側は平成 19 年度調査 C 区へ続き、北側は調査区外へ延びている。この流路の東側には古墳時代前期以降の掘立柱建物、土坑、溝が分布する。長さ 40m 以上、幅 18m、深さ 1.7m ほどである。河床からの立ち上がりは兩岸とも急である。覆土は大きく 5 層に分層できる。1 層はオリブ褐色粘土、腐植土を含む黄灰色シルトや灰色砂などからなる。2 層は灰色砂・シルト、オリブ黒色粘土などからなる。3 層はオリブ黒色シルトなどからなる。4 層は腐植土を多量に含むオリブ黒色砂などからなる。5 層は基本土層Ⅳ～Ⅶ層の崩落土が主体となる。

遺物は 1 層から河床にかけて弥生時代（図版 29・30）、古墳時代（図版 30・31）、古代（図版 31 ~ 33）の土器が多く出土したほか、多量の木製品（図版 37 ~ 53）や古墳時代の石器・石製品（図版 35・36）が出土した。また、5 層から河床にかけて縄文時代中期の土器（図版 18 ~ 22）、石器（図版 23 ~ 25）も混在して出土した。本流路は遅くとも古墳時代には流れがあり、各時期の遺物とともに土壌が堆積し、中世にはほぼ埋まったと考えられる。

流路 2（図版 9・58・67）

調査区の南東端を南北に流れるもので、東側は調査区外のため全体の様相は不明である。長さ 22m 以上、幅 2.7m 以上、深さ 0.6m ほどである。河床からは西岸へは緩やかに立ち上がる。覆土は 4 層に分層できる。1 ~ 3 層は褐灰色粘質砂で、基本土層Ⅲa 層に近い。4 層は灰色砂である。3 層から 9 ~ 10 世紀の土師器無台碗などがやや多く出土した（図版 33・34）。この時期の土師器は流路 1 では 1 ~ 2 層から少量出土のみで、平成 19 年度調査範囲を含めても、周辺の調査区ではまとまった出土はない。本流路は、9 ~ 10 世紀頃の本遺跡内では、比較的短い期間のみ流れがあったと考えられる。

2 遺 物

A 土 器

1) 概要と記述の方法

土器は弥生土器、古墳時代の土師器、古代の土師器、須恵器、中世の陶磁器が出土した。その中で、古墳時代前期と古代のものがやや多く出土した。調査区では、KF区で調査区北側の溝(SD201)から古墳時代前期の土器が、KD区で不整の土坑(SK575等)や溝(SD576等)から古墳時代前期の土器が、KC区で流路1や流路2から古代の須恵器、土師器がやや多く出土した。以下では時代別に説明する。なお、各土器の出土地点、法量、胎土、調整・文様、付着物等は土器観察表に示した(77～83p)。

2) 弥生～古墳時代の土器(図版26～31 - 188～339、図版75～79)

a 概 要

弥生～古墳時代の土器は、古墳時代前期のものが多く、弥生中・後期、古墳中・後期のものが少量出土した。古墳前期の土器は、KF区では調査区北側のSD201から、KD区ではSK575とSD576から、KC区では流路1と周辺の土坑や溝から出土した。以下では、弥生後期～古墳前期の土器を中心に各器種の概要を示す。なお、器種や器形、部位等の名称については主に[滝沢2005b]を参考にした。

甕 有段口縁のもの(292・291)、口縁部が「く」の字状あるいは「コ」の字状で、端部に面を持つやや小型もの(301)、端部が丸い小型のもの(228)、口縁端部に面を持ち、球胴、平底のもの(200)、端部に面を持ち、長胴、平底のもの(267)、口縁端部に面を持ち、長胴、丸底のもの(205)がある。

壺 口縁部が内湾するもので、脚付きの片口壺となる可能性のあるもの(194・283)、扁平な体部に脚部が付くもので、体部内外面に明瞭な段を持つもの(252)、いわゆる細頸壺(260)、小型の丸底壺(314)、口縁部に擬凹線文を施す有段口縁のもの(249)、細口有段で口縁部下段の短いもの(259)、口縁部が比較的短い広口壺(234)、口縁部が比較的長い広口壺(235)、二重口縁壺で口縁部内面の段が不明瞭なもの(313・243)、球形の体部にわずかに外傾、あるいは内湾する短い口縁部が付くもの(193・287・318)、有段口縁の広口壺(299・319)、短頸直口壺(250・294・295)、長頸広口壺(296・297)がある。

鉢 有段口縁のもの(217)、椀形で大型のもの(209)、椀形で小型のもの(195)、短頸で身の深いもの(265・254)、浅い丸底の体部に内湾して開く口縁部が付くもの(326)がある。

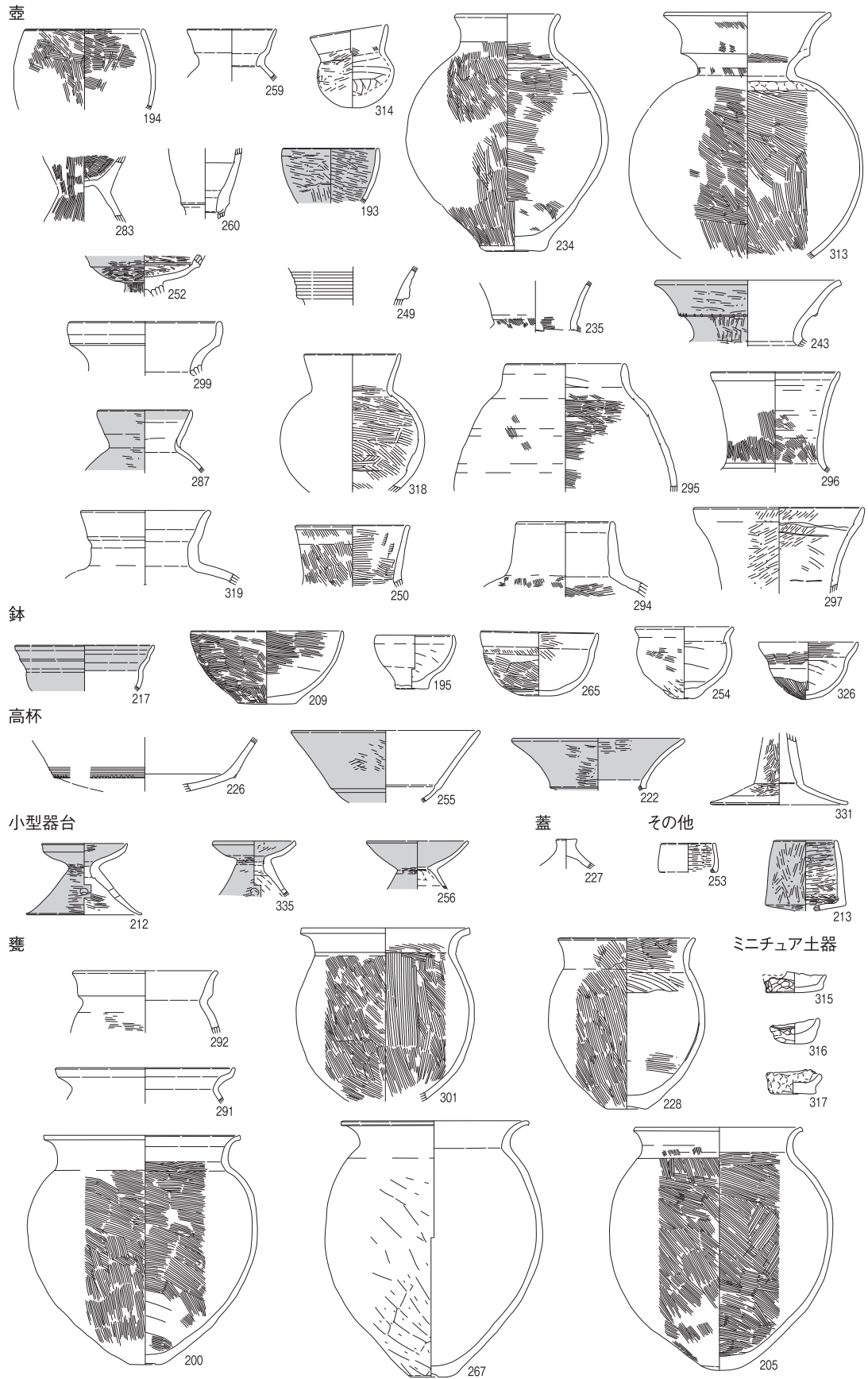
高 杯 口縁部が有段で、外傾して開くもの(226)、杯部が有段鉢形のもの(255・222)、脚部が棒状、中実のもの(図版31 - 329)、脚部の柱状部分が中空で、裾部が屈曲して外側へ開くもの(331)がある。

小型器台 内湾気味に外へ開き、上端でわずかに摘み上げられるもの(212)、内湾気味に外へ開く浅い受部で、端部に面を持つもの(335)、受部が内湾して開くもの(256)がある。

蓋 摘みの中実なもの(227)がある。

ミニチュア土器 浅い鉢形のもの(315～317)がある。

その他 異形の小型精製土器で、口縁部が内傾する小型のもの(253)、口縁部が内傾し、底部が低い円錐状を呈するもの(213)がある。



第7図 弥生後期～古墳前期土器分類図 (S = 1 : 6)

b 各 説

KF 区出土土器

I - SD201 (図版 26 - 188 ~ 199、図版 75)

平成 18 年度に調査された遺構と同一のものから出土した土器である。

188 ~ 192 は甕である。188 は付加状口縁、189・191 は口縁部が「く」の字状で、端部に面を持つ。190 は有段口縁が崩れたような形状で、口縁部の厚さが比較的厚い。192 は体部下半から底部である。

193・194 は壺である。193 は内湾気味に立ち上がる口縁部片で、内外面に赤彩を施す。194 は口縁部が内湾するもので、上部と内側の端部に面を持つ。内外面とも、ていねいなハケ調整である。脚付きの片口壺となる可能性が高い。195 は碗形の比較的小型の鉢である。内外面ともナデ調整である。196・197 は高杯である。196 は杯部底部から脚部上半で、外面に赤彩を施す。197 は脚部上半で、円形透かしが 2 か所残る。198 は器台の脚部上半で、3 単位の円形透かしが不等間隔で穿たれる。また、外面に赤彩を施す。

119 は器形が判然としない小型の土器の底部である。外面の底部付近には棒状具による刺突を施す。

KD 区出土土器

SK575 (図版 26・27 - 200 ~ 212、図版 75・76)

200 ~ 206 は甕で、200 ~ 205 は口縁部が「コ」の字状である。200 は口縁端部に面を持ち、底部は平底である。口径 19.5cm、体部最大径 23.0cm、底径 3.2cm、器高 23.0cm である。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はハケ調整で、体部外面にコゲ・ススが付着する。201 は口縁端部が面を持つ部分と先細りとなる部分がある。底部は狭い平底である。口径 18.5cm、体部最大径 22.6cm、底径 2.6cm、器高は推定 23.0cm である。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はハケ調整で、体部外面中位にコゲ・ススが付着する。202 は口縁端部に面を持ち、底部は平底である。口径 20.2cm、体部最大径 23.3cm、底径 3.2cm、器高 24.0cm である。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケ後ヨコナデ、体部内外面はハケ調整で、外面に部分的にコゲ・ススが付着する。203 は口縁端部が丸い。口径 17.3cm、体部最大径 22.9cm である。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はハケ調整で、体部外面中位にコゲ・ススが付着する。204 は口縁端部に面を持ち、底部は平底である。口径 17.3cm、体部最大径 22.0cm、底径 3.2cm、器高 25.6cm である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ、内面はハケ・ナデ調整で、体部外面にコゲ・ススが付着する。205 は口縁端部に面を持ち、底部は丸底である。口径 16.4cm、体部最大径 22.3cm、底径 4.2cm、器高 24.4cm である。口縁部外面はハケ後ヨコナデ、内面はヨコナデ、体部内外面はハケ調整で、体部外面中位にコゲ・ススが付着する。206 は体部下部から底部で、底径は 2.6cm である。

207・208 は壺で、207 は有段口縁の広口壺、208 は体部下部から底部である。209 は碗形の鉢である。口縁部~体部外面はハケ、内面はハケとナデ調整で、器厚は比較的薄い。210 は高杯の脚部で、円形透かしが 3 単位、あるいは 4 単位穿たれる。211 は器台の脚部で、円形透かしはない。212 は小型器台で、内湾気味に外へ開き、上端でわずかに摘み上げられる受部に、「ハ」の字状に開く脚部が付くものである。脚部には 4 単位の円形透かしが等間隔に穿たれ、外面と受部内面に赤彩を施す。

SK555 (図版 27 - 213、図版 76)

213 は口縁部が内傾し、底部が低い円錐状のグラス形を呈する異形の小型精製土器である。外面はミガキ、内面はハケ後ミガキ調整で、外面と口縁部内面に赤彩を施す。残存する底部の端部は下方へわずかに

突出するように見えるため、細い頸部や脚部が付くか、円孔となる可能性がある。

SK566 (図版 27 - 214、図版 76)

214 は甕の口縁部片で、口縁部が「く」の字状で、端部に面を持つ。内外面とも器面が摩耗しており、調整等不明である。胎土には 1 ~ 3 mm の小礫を多量に含む。

SK573 (図版 27 - 215 ~ 220、図版 76)

215・216 は広口壺と考えられる、口縁部片である。218 は壺の底部片である。217 は有段口縁の鉢である。口縁部~体部内外面はミガキ調整で、外面と口縁部内面に赤彩を施す。219 は鉢と考えられる底部で、底径は 1.6 cm である。220 は小型器台の脚部で、4 単位の円形透かしが穿たれる。

SK581 (図版 27 - 221 ~ 223、図版 76)

221 は甕で、口縁部は「く」の字状で、端部に面を持つ。口縁部内外面はヨコナデ調整である。222 は杯部が有段鉢形の高杯である。杯部の口縁部内外面はミガキ調整で、赤彩を施す。223 は小型器台の脚部で、円形透かしがない。

SD557 (図版 27 - 224・225、図版 76)

224 はやや小型の長胴甕である。口径は推定 15.0 cm・体部最大径 16.4 cm・底径 3.7 cm・器高 19.8 cm (口縁部高 2.3 cm) である。口縁部は指ナデ、指オサエにより小波状を呈する。口縁部外面はヘラ状工具による調整、体部外面はケズリ、口縁部内面はナデ、体部内面はケズリ、ハケ、ナデ調整である。225 は壺の体部から底部である。

SD568 (図版 27 - 226・227、図版 76)

226 は杯部が有段で、口縁部が外傾する高杯で、段部に沈線 3 条と連続刺突文を施す。227 は摘みが中実な蓋である。

SD576 (図版 28 - 228 ~ 257、図版 77)

SD576a (図版 28 - 228 ~ 241、図版 77)

228 ~ 233 は甕である。228 はやや小型の長胴甕である。口径推定 13.2 cm、体部最大径 15.6 cm、底径 3.8 cm、器高 17.1 cm (口縁部高 3.2 cm) である。口縁部~体部外面はハケ、口縁部内面はハケ、体部内面はハケ、ナデ調整である。229・230・233 は口縁部が「く」の字状で、端部に面を持つ。231・232 は有段口縁である。

234 ~ 238 は壺である。234 は口縁部が比較的短い広口壺である。口径 10.0 cm・底径 5.9 cm・器高 23.7 cm である。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はハケ調整である。235 は口縁部が比較的長い広口壺の口頸部片である。236 ~ 238 は壺の底部である。237 は底部が丸底風で厚く、体部外面はミガキ、内面はハケ調整である。238 は底部が平底で厚く、体部内外面はハケ調整である。239・240 は高杯で、239 は杯部が有段鉢形のもので、内外面の稜は明瞭でない。240 は脚部である。241 は有段口縁の鉢と考えられる口縁部~体部片である。口縁部~体部外面と口縁部内面はミガキ調整で、同位置に赤彩を施す。

SD576b (図版 28 - 242 ~ 245、図版 77)

242 は甕で、口縁部は「く」の字状で、端部に面を持つ。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はハケ、口縁部内面はハケ、ヨコナデ、体部内面はナデ調整である。

243 は口頸部が二重に外反する二重口縁壺で、口頸部内面の段は不明瞭である。口頸部外面はミガキ調整、段部に連続刺突で、口頸部外面に赤彩を施す。244・245 は小型器台の脚部である。245 は脚部外面と受部内面がミガキ調整で、赤彩を施す。

SD576c (図版 28 - 246 ~ 257、図版 77)

246 ~ 248 は甕で、246・248 は口縁部が「く」の字状、247 は「コ」の字状である。246 は口縁端部が丸く、底部は平底である。口径 19.9cm・体部最大径 23.0cm・底径 4.3cm である。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はハケ調整で、外面にはスス・コゲが付着する。247 は口縁端部に面を持つ。口縁部内外面はナデ、体部外面はハケ、内面はナデ調整である。248 は口縁端部に面を持ち、口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデ調整である。

249 ~ 252 は壺である。249 は口縁部に擬凹線文を施す有段口縁のもので、口頸部内面の段は不明瞭である。250 は短頸直口壺で、口縁部内外面はハケ調整である。251 は体部下部～底部で、体部外面はハケ、内面はハケ後ナデ調整である。252 は扁平な体部に脚部が付くもので、体部内外面に明瞭な段を持つ。体部～脚部外面と体部内面はハケ後ミガキ調整で、外面に赤彩を施す。253 は口縁部が内傾する異形の小型精製土器である。下方の形状は平らな底部になるのか、細い頸部が付くのかは不明である。口縁部内面はミガキ調整で、赤彩はない。254 は短頸で身の深い鉢で、底部は狭い。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はハケ、ケズリ、体部内面はナデ調整である。255 は杯部が有段鉢形の高杯である。杯部外面はミガキ調整で、赤彩を施す。256・257 は小型器台で、作りがよく似る。受部が内湾して開くもので、受部～脚部外面と受部内面に赤彩を施す。脚部の円形透かしの有無は不明である。

SD579 (図版 29 - 258・259、図版 77)

258 は甕で、口縁部は「く」の字状で、端部に面を持つ。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はハケ調整である。259 は細口有段で、口縁部下段の短い壺である。

SX577 (図版 29 - 260、図版 77)

260 は口頸部に段を持つ細頸壺である。内外面とも器面が摩耗しており、調整不明である。

P563 (図版 29 - 264、図版 78)

264 は短頸広口壺と考えられる口縁部片である。口縁部内外面はヨコナデ調整である。

P574 (図版 29 - 261・262、図版 78)

261 は比較的大型の甕で、口縁部は「コ」の字状で、端部に面を持つ。262 は器台の受部下部～脚部上部で、受部と脚部の境がやや不明瞭である。261・262 は弥生後期の土器と考えられる。

37CP3 (図版 29 - 263、図版 78)

263 は比較的短い口縁部が外反する広口壺である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ、内面はナデ調整である。

37DP22 (図版 29 - 265 ~ 267、図版 78)

267 は甕で、口縁部は「く」の字状で、端部に面を持ち、底部は平底である。口径 18.3cm、体部最大径 21.8cm、底径 4.5cm、器高 25.6cm (口縁部高 2.8cm) である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ、ケズリ、内面はナデ調整である。

266 は短頸直口壺で、口縁部内外面はヨコナデ調整である。265 は小型で短頸の鉢で、口径に比べ身が深いものである。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はハケ、口縁部内面はハケ後ナデ、体部内面はナデ調整である。非精製品である。

遺構外 (図版 29 - 268・269、図版 78)

268 は二重口縁部壺の口縁部片である。口縁部外面にヘラ描き沈線により三角形や斜線が描かれているように見える。269 は有段口縁の甕の口縁部片で、内外面はヨコナデ調整である。

KC 区出土土器

SK433 (図版 29 - 270、図版 78)

270 は高杯の脚部上部で、外面に赤彩を施す。

SK443 (図版 29 - 271・272、図版 78)

271 は甕で、口縁部が「く」の字状で、端部に面を持つ。口縁部内外面はヨコナデ調整である。272 は比較的短い口縁部が内湾気味に開く広口壺である。口縁部外面はヨコナデ、内面はナデ調整である。

SD441 (図版 29 - 273~275、図版 78)

273 ~ 275 は甕である。274 は口縁部が「コ」の字状、275 が「く」の字状で、端部に面を持つ。273 は底部片で、体部内外面はナデ、底部外面はケズリ、ナデ調整である。

SD445 (図版 29 - 276~280、図版 78)

276 ~ 278 は甕で、277・278 は口縁部が「く」の字状で、端部に面を持つ。277 は口縁部内外面がヨコナデ、体部外面がハケ、内面がナデ調整である。278 は口縁部外面がハケ後ヨコナデ、内面がヨコナデ、体部内面はハケ調整である。276 は底部で、体部~底部外面はケズリ、体部内面はナデ調整である。

279 は短い口縁部が内湾気味に開く広口壺の口縁部片で、内外面ともヨコナデ調整である。280 は小型器台の脚部である。外面はミガキ調整で、赤彩を施す。円形透かしは 1 か所のみ残存する。

SD452 (図版 29 - 281~283、図版 78)

281 ~ 283 は壺と考えられる。281 は短頸直口壺の口縁部片である。282 は底部で、体部内外面はハケ調整である。283 は体部下部~脚部上部で、外面と体部内面はハケ、脚部内面はナデ調整である。脚付きの片口壺となる可能性が高い。

P427 (図版 29 - 284、図版 78)

284 は甕の底部である。体部外面はハケ、底部内外面はナデ調整である。

P428 (図版 29 - 285~287、図版 78)

285・286 は甕である。285 は口縁部が「く」の字状で、端部は丸い。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はハケ、口縁部内面はハケ後ヨコナデ調整である。286 は体部下部~底部で、体部外面はハケ、ケズリ、丸底の底部外面はケズリ状のナデ、体部内面はハケ調整である。

287 は短い口縁部が内湾気味に開く壺で、外面と口縁部内面の上部に赤彩を施す。

流路 1 (図版 29 ~ 31 - 288~339、図版 78・79)

288 ~ 300 は弥生土器と考えられる。288・289 は甕の口縁部片である。288 は口縁部が外傾するもので、内側端部にヘラ状工具によるキザミを連続させる。外面はタテ方向のハケ、内面はヨコ方向のハケ調整である。289 は短い頸部から弱く外反する口縁部へ至る器形である。外側端部に斜行沈線が 3 条見られる。口縁部内外面はナデ、体部内外面はハケ調整である。弥生中期の土器と考えられる。

290 ~ 292 は有段口縁の甕の口縁部~体部上部である。293 ~ 299 は壺である。293 は頸部が外反し、短い口縁端部に擬凹線文が巡る。294・295 は短頸直口壺で、口縁部内外面はナデ、体部内外面はハケ調整である。296 は広口長頸壺で、短い口縁部端部は内外面ヨコナデ、口頸部は内外面ハケ調整である。297 は大型の広口長頸壺で、口頸部内外面はミガキ調整である。298 はコップ形をした体部~底部である。299 は有段口縁の広口壺である。300 は高杯の円筒形の脚部である。290 ~ 300 は弥生後期の土器と考えられる。

301 ~ 339 は古墳時代の土器で、多くが前~中期のものである。301 ~ 311 は甕である。301 は口縁部

が「く」の字状で、端部に面を持つ。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はハケ後ヨコナデ、体部内外面はタテ、ないしナナメ方向のハケ調整である。302は小型の長胴甕である。口縁部と体部の境外面と体部下内外面に輪積痕を残し、明瞭な段を持つ。口径16.4cm、体部最大径12.9cm、底径5.6cm、器高12.2cmである。口縁部～体部外面と口縁部内面はハケ、体部内面はナデ、底部内面は指ナデ調整である。303は大型甕で、口縁部は「く」の字状で、端部は丸い。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ、内面はハケ、ナデ調整である。304～308は口縁部～体部上部片で、口縁部が「く」の字状で、端部に面を持つものである。309・310は口縁部が「く」の字状で、309は端部が先細りとなり、310は丸くなる。311は口縁部片で、端部近くで大きく外反するもので、内外面ともヨコナデ調整である。

312～314・318～323は壺である。312は二重口縁壺の口頸部片で、内外面ミガキ調整で、赤彩を施す。313は二重口縁壺で、口縁部内面の段が不明瞭である。口頸部外面はハケ後ヨコナデ、体部外面はハケ、口縁部内面はヨコナデ、ハケ、頸部はヨコナデ、体部上部は指ナデ、以下ハケ調整で、全体に丁寧に作られている。胎土は精良で、焼成も良い。314は小型の丸底壺である。口径7.6cm、底径1.4cm、高さ8.3cmである。口縁部内外面はヨコナデ、頸部～体部上半部外面はミガキ、下半～底部外面は指オサエ、頸部内面はハケ、体部～底部内面は粗いナデ調整である。318は球形の体部からわずかに外傾する短い口縁部が付くもので、体部内面に輪積痕を明瞭に残す。口縁部～体部外面は器面が摩耗しており調整不明、口縁部内面はヨコナデ、体部内面はハケ調整である。319は有段口縁で、頸部が長い広口壺である。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ調整である。320～322は体部下～底部である。320は比較的大型のもので、体部外面はハケ後ミガキ、底部付近～底部外面はミガキ、体部～底部内面はハケ調整である。321は体部内外面がハケ調整である。322は底部中央に焼成前に穿孔されたもので、体部外面はハケ、内面はハケ後ミガキ調整である。323は体部上部に最大径があり、底部が広いものである。頸部～体部上半外面はハケ、下半はハケ後ミガキ、頸部内面はミガキ、ケズリ、体部内面はナデ調整で、体部上部外面と体部下内面にコゲ・ススが帯状に付着する。

324～326は鉢である。324は底部から外傾して開くもので、口縁部～体部外面はハケ、底部付近外面と口縁部～体部内面はミガキ調整である。カリカリした胎土で、褐色を呈する。325は底部から内湾して立ち上がり、口縁部は直立するものである。口縁部～体部外面はナデ、内面はハケ、ナデ調整で、内面は黒色処理を施す。326は丸底の体部に内湾して開く口縁部が付く小型のものである。口縁部内外面はハケ状工具によるヨコナデ、体部上部外面はナデ、下部～底部外面はハケ、内面はナデ調整である。

327～334・339は高杯で、330は杯部、327～329・331～334・339は脚部である。327は比較的小型の脚部で、円形透かし3単位が等間隔で穿たれる。328は「ハ」の字状に開くもので、円形透かし2個1組が対面で2単位穿たれる。脚部外面はミガキ、内面はナデ、ハケ、ミガキ調整で、脚部外面と杯部内面に赤彩を施す。329は棒状中実の脚部上部である。330は有稜高杯で、杯部内外面はミガキ調整である。

331～334は柱状、中空の脚部で、裾部から屈曲して外側へ開くものである。333・334は棒状部分の内面に輪積痕を明瞭に残す。339は古墳後期のもので、杯部内面に黒色処理を施す。

335～338は小型器台である。335は内湾気味に外へ開く浅い受部で、端部に面を持つ。受部～脚部外面と受部内面はミガキ調整で、同位置に赤彩を施す。336・337は受部下～脚部で、脚部外面と受部内面はミガキ、脚部内面はハケ調整で、外面と受部内面に赤彩を施す。338は円形透かし3単位は不等間隔で穿たれ、外面に赤彩を施す。高杯脚部327と器形、脚高、脚径がよく似る。

315～317は浅い鉢形の土器で、315は口縁部～体部外面が指ナデ、指オサエ、内面がミガキ、316は

口縁部～体部内外面が指ナデ、指オサエ、317 は口縁部～体部外面が指オサエ、内面がナデである。

流路 2 (図版 34 - 404 ~ 407、図版 82)

404・405 は甕の口縁部片で、内外面ともヨコナデ調整である。406 は口縁部が内湾気味に開く広口壺である。口縁部内外面ともヨコナデ調整である。407 は高杯の杯部下部である。

遺構外 (図版 34 - 408、図版 82)

408 は二重口縁壺の口縁部～体部上部で、口縁部内面の段は不明瞭である。口縁部内外面はハケ後ミガキ、体部外面はミガキ、内面はハケ調整である。作りが頑丈で、重量感がある。

3) 古代の土器

a 概 要

古代の土器は KC 区の流路 1 や流路 2 から多く出土した。そのうち須恵器は流路 1 の中～下層にはほぼ限定される。一方、土師器は流路 1 と流路 2 から出土するが、流路 1 の中～下層出土のものと同層と流路 1 の上層と流路 2 で主体的に出土するものとの時期差が認められる。墨書土器は須恵器 5 点、土師器 3 点で認められた。以下ではまず各器種の概要を示す。

土師器

甕 口縁部が強く外反する長甕 (図版 31 - 340)、短い口縁部が強く外反するもの (図版 31 - 341)、短い口縁部が緩く外反するもの (図版 31 - 342) がある。

壺 肩の張る体部に緩く外反する短い口縁部が付くもの (図版 32 - 344)、口縁部が「コ」の字状のもの (図版 32 - 345)、茄子形の体部に緩く外反する短い口縁部が付くもの (図版 32 - 346) がある。

鉢 深鉢形で、弱く外反する口縁部が付くもの (図版 32 - 348)、深鉢形で、直線的に開く体部から内湾する口縁部へ至るもの (図版 32 - 349)、広い底部から内湾する体部を経て、内傾する短い口縁部へ至るもの (図版 32 - 350)、椀形のもの (図版 32 - 352) がある。

無台椀 口径 13cm、器高 4 cm 未満 (器高指数 28)、底径 6 ~ 7 cm のもの (図版 33 - 390)、口径 15cm、器高 5 cm (器高指数 34)、底径 6 cm の大型もの (図版 33 - 389)、口径 12 ~ 13cm、器高 4 ~ 5 cm (器高指数 32 ~ 39)、底径 5 ~ 7 cm のもの (図版 33 - 392) がある。

須恵器

杯 蓋 口径が 15 ~ 17 cm のもの (図版 32 - 359)、口径 13 cm のもの (図版 32 - 362) がある。

有台杯 口径が 16 ~ 18 cm、器高 4 ~ 5 cm (器高指数 26 ~ 30) の大型のもの (図版 32 - 363)、口径が 14 ~ 15 cm、器高 4 ~ 5 cm (器高指数 27 ~ 36) のもの (図版 33 - 367)、口径 11 ~ 12 cm、器高 4 cm 前後 (器高指数 32 ~ 38) の深身もの (図版 33 - 372) がある。

無台杯 口径が 12 ~ 13 cm、器高 4 cm ほど (器高指数 27 ~ 31) のもの (図版 33 - 375)、口径が 12 ~ 13 cm、器高 3 ~ 4 cm (器高指数 25 ~ 27) のもの (図版 33 - 386) がある。

壺・甕 出土量が少なく、また図示できるものがなかった。甕の口縁部 (図版 32 - 358) がある。

高 杯 上記のものより古いがここで説明する。長脚二段三方透かしのものである (図版 32 - 357)。

b 各 説

流路1 (図版31～33 - 340～387、図版80・81)

土師器甕・壺・鉢・無台椀、須恵器杯蓋・有台杯・無台杯等が出土したが、流路の規模に比して出土量は多くない。層位的には中層から下層に8世紀～9世紀前半、上層に9世紀後半～10世紀代のものが出土する傾向がある。この点は、南側に接する平成19年度調査範囲での出土傾向とほぼ一致するが、本年度調査の方が出土量や器種の豊富さが上回っている。以下、土師器、須恵器に分け、器種ごとに記述する。

土師器 (図版31・32 - 340～356) 340はやや大型の長甕である。体部径が比較的均等で直線的な体部と強く外反する口縁部からなる。口径23.4cm、体部最大径20.4cm、底径9.0cm、器高29.2cmである。口縁部外面はハケ後ヨコナデ、体部外面と口縁部～体部外面はハケ調整で、外面の半分程の範囲に吹きこぼれの痕跡が見られる。底部は意図的に外されており、甑として転用された可能性がある。343は甕の体部下～底部片で、体部内外面はハケ、底部内外面はナデ調整である。341は甕ないしは甑で、短い口縁部が強く外反する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はハケ調整である。342は比較的小型の甕で、短い口縁部が緩く外反する。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はハケ、口縁部～体部内面はハケ調整である。

344～347は壺と考えられる。344は肩の張る体部からすばまり、緩く外反する短い口縁部へ至る器形である。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はハケ調整である。345は口縁部が「コ」の字状のもので、口縁部内外面はヨコナデ後ミガキ、体部内外面はハケ調整である。346・347は茄子形の体部に緩く外反する短い口縁部が付くものである。346は口縁部外面がヨコナデ、体部上部がハケ後ミガキ、体部中～下部がミガキ、口縁部内面がハケ後ヨコナデ、体部がハケ後ミガキ、底部がミガキ調整である。347は口縁部内外面がヨコナデ、体部内外面がハケ調整である。

348～354は鉢と考えられる。348は内湾気味に開く体部に弱く外反する口縁部が付くものである。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はハケ、ミガキ調整である。349は直線的に開く体部から内湾する口縁部へ至るものである。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はミガキ調整である。350は広い底部から内湾する体部を経て、内傾する短い口縁部へ至るものである。口径11.3cm・体部最大径13.9cm・底径8.8cm・器高11.3cmである。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はハケ、底部内外面はナデ調整である。また、器厚0.6～1.3cmで重量感がある。351は直線的に立ち上がる口縁部～体部片である。352～354は椀形の鉢である。352は口縁部～体部内外面はハケ、ナデ調整、353はミガキ調整である。354は甕の体部下部のような器形で、口縁部～体部外面がナデ、内面がハケ調整である。

355・356は無台椀である。355は口径11.9cm・器高3.1cm・底径6.5cm、底部の切り離しは糸切りである。356は身の深いもので、底部付近外面はケズリ、底部の切り離しは糸切りである。

須恵器 (図版32・33 - 357～387) 357は高杯である。39F16の河床で横位の状態で出土した (図版55)。裾部端部が1/4ほど欠けるのみで、ほぼ完形である。口径10.3cm・脚部最小径2.7cm・裾部径9.8cm・器高18.6cm (脚部高14.1cm) である。杯部には2か所に稜を持つ。脚部は長脚で三方透かしが上下2段あり、上下の透かしの間には2本の沈線が巡る。358は甕の口縁部片で、外面に櫛描波状文を施す。

359～362は杯蓋である。359は大型のもので、口径17.0cm、器高3.8cmである。天井部外面がロクロケズリ、体部～口縁部内外面がロクロナデ、天井部内面がロクロナデに直線ナデ調整である。口縁端部は短く外反し、摘みは扁平で、中央が突出する。360・361は天井部～口縁部片で、口縁端部の突出は小さく、三角形を呈する。362は小型のもので、口径13.0cm、器高2.9cmである。天井部外面はロクロ

ケズリ、体部～口縁部内外面はロクロナデ調整である。摘みは扁平で、口縁端部はやや内側へ垂下する。

363～374は有台杯である。363は大型のもので、口径18.4cm、器高4.9cmである。底部の切り離しはヘラ切り、高台は内端接地である。色調は黄灰色を呈する。364は口径推定16.7cm、器高4.4cm、365は口径16.9cm・器高4.4cmで、いずれも高台は内端接地である。366は口径推定15.5cm、器高4.6cmである。底部の切り離しはヘラ切りで、高台は外端接地である。底部外面には判読不能な墨書が認められる。367～371は口径13.8～14.9cm・器高4.0～5.1cm、高台は367が外端接地、368～371は内端接地である。372～374は口径が小さく、深身のもので、口径10.5～11.8cm・器高3.8～4.0cm、高台は372・373が内端接地、374が外端接地である。底部外面に373は渦巻、374は判読不能の墨書が認められる。

375～387は無台杯である。375～380は口径12.2～13.4cm・器高3.5～3.9cmである。381は口縁端部が反るもので、口径11.4cm・器高3.5cmである。382は口径12.0cm・器高3.7cmである。383・384は体部下～底部である。385～387は口径12.0～13.2cm・器高3.0～3.6cmである。386・387の底部外面には比較的太く、大きな字で書かれた「継人」の墨書が認められる。流路1出土の須恵器杯蓋・有台杯・無台杯は春日編年Ⅱ2～Ⅳ1期、Ⅳ2～Ⅴ1期、Ⅵ期に大きく分けることができる。

流路2 (図版33・34 - 388～403、図版82)

388は須恵器杯蓋である。天井部外面はロクロケズリ、体部内外面はロクロナデ、天井部内面は指オサエである。摘みは法量に比して小さく、腰高である。

389～403は土師器無台椀である。389は大型のもので、口径14.9cm、器高5.1cm、底径6.1cmである。口縁部～体部内外面はロクロナデで、底部の切り離しは糸切りである。体部外面には則天文字の「天」と思われる墨書が認められる。390は口径13.0cm・器高3.6cm・底径6.4cm、391は口径13.1cm・器高3.7cm・底径6.8cmである。392は口径12.8cm・器高4.1cm・底径6.9cmで、393は口径11.7cm・器高4.4cm・底径5.5cmである。いずれも底部内面に「久」の墨書が認められる。394・395は口縁部が緩く外反するもので、394の底部付近にロクロナデによるやや幅広のくぼみが巡る。394は口径推定12.8cm・器高4.7cm・底径5.6cm、395は口径12.1cm・器高4.3cm・底径5.4cmである。396～399・403は口径11.6～12.1cm・器高4.0～4.3cm・底径4.8～5.7cmである。403は内湾して立ち上がる、やや浅身のもので、口径11.7cm・器高4.0cm・底径5.6cmである。流路2出土の土師器無台椀は春日編年Ⅴ～Ⅵ期に収まる。

4) 中世の陶磁器 (図版34 - 409～411、図版82)

平成20年度の調査範囲ではこの時期の陶磁器の出土は少なかった。以下、3点について説明する。

409は珠洲焼鉢の口縁部片で、口縁端部に櫛描波状文を施す。15世紀前半の所産である。410は中国産の青磁皿で、14～15世紀の所産である。411は瀬戸美濃焼の皿で、14～15世紀の所産と考えられる。

B 土 製 品 (図版34 - 412～414、図版82)

412・413は管状土錘である。いずれも25EのⅢ層出土で、412は長さ6.2cm、直径3.8cm、孔径1.1cm、413は長さ5.4cm、直径3.7cm、孔径0.9cmである。

414は焼成粘土塊である。37E1のⅢ層出土で、全体には指ナデ、指オサエで、図の上端は溝状に、下端は何かから剥がれたように見える。412～414は出土層位や胎土から古代頃のものと考えられる。

C 石器・石製品 (図版 35～36 - 415～451、図版 82・83)

1) 石器組成と石材組成

上層は古墳時代前期を主体とする層である(第III章2)。調査区は25・26C～F、36・37C～F、38・39B～Hグリッドの3か所に分けられるが、それぞれの調査区から出土した石器の特徴に変化が見られなかったため、ここでは上層から出土した石器・石製品をまとめて記載した。また、遺構の内外でも特徴の違いが認められなかったため、器種ごとに述べる。なお遺物図版(図版35～36)には、出土遺構や層位を実測図余白に示した。

器種	石材	黒色細粒砂岩	白色細粒砂岩	砂岩	粗粒砂岩	安山岩	閃緑岩	流紋岩	滑石	蛇紋岩	緑色凝灰岩	ヒスイ	軽石	メノウ	頁岩	凝灰岩	合計
勾玉										1							1
勾玉未成品									1								1
管玉											1						1
管玉未成品									1		10						11
環玉未成品									1								1
内磨砥石				9													9
砥石		1		5												1	7
敲石			1							2		1					4
軽石製研磨具													1				1
石錘					1												1
スクレイパー	30	15	42		18	5	5										115
石核			1		1												2
貝殻状剥片	25	19	73		48	7	6										178
原石・剥片												22		7	2		31
合計	55	35	126	5	68	12	11	3	3	11	23	1	7	2	1		363

第4表 上層出土石器組成表

流路1出土のスクレイパーと貝殻状剥片については、すべて本項で扱った。同様に流路1出土で縄文時代に位置付けなかった石器は、すべてここに含めた。

石器・石製品は363点出土し(第4表)、うち37点を図示した。主に玉類の未成品や工具など玉作関連の資料が出土した。石材もヒスイや緑色凝灰岩など玉類製作に関わるものも多く見られる。これら石器組成や石材組成は、六反田南遺跡Ⅱ上層[水落2010]の様相に近似している。

2) 各 説

勾玉(415) 415は蛇紋岩製で、SK575から出土した。両面穿孔が施され、器体は入念に研磨されている。上下端はまるく収束せず、先端を尖り気味に仕上げている。腹部は半円形に仕上げるのではなく、緩やかに「コ」の字を呈する。長さ1.80cm、幅1.15cmに対し、器体厚が0.35cm(長厚比5:1)と比較的薄い形態である。出土したSK575は古墳前期の遺構(第V章1-B)であり、当該期の勾玉製作遺跡は周辺地域では南押上遺跡や笛吹田遺跡が挙げられる。

勾玉未成品(416) 416は滑石製で、流路2から出土した。長さ2.20cm、幅1.40cmで、器体厚が0.75cm(長厚比3:1)である。下端や右側面に研磨以前の剝離痕が認められる。このことから小型剥片を素材として調整剝離を行った後、研磨で半月状の未成品を作出する工程が想定できる。背部は長さ0.5～1.00cm程度の平坦面が研磨により6面作出され、やや角張った形状を呈する。腹部は器体長軸に対して横方向に研磨し、平坦にした後、調整剝離をせずに内磨を施している。これらの特徴はいわゆる「オガクチ技法」[寺村1966]に認められることであり、製作方法の類似性が考えられる。

管玉(417) 417は緑色凝灰岩製で、流路1から出土した。両面穿孔が施され、全体が入念に研磨されている。長さが1.00cmに対して直径が0.60cmと比較的太い形態である。

管玉未成品(418～428) 11点出土し、すべて図示した。418を除き、すべて緑色凝灰岩製である。緑色凝灰岩は、糸魚川市域では良質なものを認めることができず、遠隔地から搬入していると考えられる。濃緑色あるいは緑色で光沢のあるもの(420～422)、淡緑色でシルト質が強く風化が著しいもの(424・

426・427)、粒子が粗く組織が脆いもの(419・423・425・428)。の3種が認められる。418・422がSD576、424・427が流路1、420・423が流路2、426がSK575、421が37DP22、419・425が包含層から出土した。418～422は穿孔段階の資料である。418は滑石製だが、長さ1.30cm、直径0.70cmを測り、製品417の大きさと近似している。多角柱状に研磨し、穿孔を開始している。孔径は、ほかの未成品に比べてやや幅広である。また穿孔の断面形状は比較的三角形状を呈している。419は全体が入念に研磨されているが、上面に剝離痕を持つことから未成品とした。長さ1.85cm、幅1.00cmを測り、比較的太い製品になると考えられる。両面穿孔が施され、穿孔中に破損している。420～422はいずれも上方を5mm程度穿孔した段階で作業を停止している。いずれも多角柱状を呈し、長さ2.0cm、幅0.70cmと均一な大きさに研磨されている。

423・424は側面調整の段階であり、四角柱状を呈する。いずれも横長剝片を素材とする。上下端は微細な調整剝離で、平行に仕上げられる。425も側面調整の段階だが、調整剝離が不十分で下端にかけて、ややすぼまる形状を呈する。

426・427は、素材となる横長剝片を剝取した段階である。表裏面と上下端が平行に調整された板状の石核を用いて、表面から連続的に剝取されていると考えられる。428は風化が著しく明らかでないが、調整剝離が認められ、断面がいびつな五角形を呈することから、研磨段階の資料とも考えられる。

棗玉未成品(429) 棗玉は、南押上遺跡で出土した「やや寸胴で身の中心にかけて太くなる形状(樽状)を呈し、穿孔されたもの」[水落2010]である。429は滑石製で、SD576から出土した。茶褐色で軟質な滑石を素材とし、研磨により多角形に仕上げている。研磨時の擦痕は、管玉が長軸に平行することに対して、これは横軸に複数方向認められる。また形態を樽状に仕上げるため、上端にかけて面取状に収束する。上下面は、平行に仕上げられ両面穿孔が施される。

内磨砥石(430～437) 9点出土し、8点を図示した。砂岩製の横長剝片ないし貝殻状剝片[小池1986]を素材とし、素材縁辺部に砥面を形成したものである。横マクリ遺跡の報告書[桑原2008]内で詳細に検討し、分類されている。ここでは、それに準じた分類を行い記載する。ただし、横マクリ遺跡の「I類」(内磨砥石となり得るもので、ほぼ無加工のもの。砂岩製の貝殻状剝片。)は、本遺跡においては流紋岩や安山岩を使用しているものもあり、内磨砥石以外の目的も考えられるため分類から除いた。

A類 素材に砥面が観察できるもの。砥面と二次加工面を共伴するものもすべて含む。

さらに砥面の形成部位によって細分を行う。

- 1類 素材縁辺部とその付近に砥面が形成されるもの(434・435)。
- 2類 素材の表裏面と縁辺部に砥面が形成されるもの(430～433・436)。
- 3類 素材の表裏面の両面に砥面が形成されるもの。
- 4類 素材のほぼ全周に砥面を持つもの。

B類 素材に二次加工のみが施されており、砥面を形成しないもの。縁辺部や素材の打点部付近に多く見られる。打点部除去や、砥面になる平坦面の形成を目的としたものと考えられる(437)。

すべて砂岩製であり、437がSK575から出土したほかは、いずれも流路1から出土した。430は器体表面に溝状砥面を持つ。436も、表面に半弧状を呈した浅い溝状砥面が認められる。433～435は、端部の砥面が半円状に外湾している。それに対し431の砥面は先端部が角張った形状を呈する。A2類(430～433・436)は半円状の外湾した砥面を端部に持ち、表裏面にも砥面を持つ。この砥面はすべて一連のものでなく、必ず途切れる所がある。砥面形成の切り合いは不明瞭であることから、表裏面と端部はほぼ同時に使用されたと考えられる。433は、表裏面や端部砥面に敲打痕が認められる。砥石形成時の製作痕や砥

面再生と考えられる。使用痕は431が器体に対し直行する擦痕を持つものに対して、ほかのすべてが器体に対し平行に擦痕を持つ。437は貝殻状剥片を素材として、下端部に調整剥離で鈍角な刃部を形成している。この後、敲打を加えて平坦面を作出し、内磨砥石に成形することが考えられる。

砥石 (438～444) 443がSD576、441が37D14、444が37C18グリッドであるほかは、すべて流路1から出土した。438～440は大型の砥石である。いずれも粗粒砂岩の礫を素材として、砥面を持つ。砥面は比較的凹状を呈し、溝状砥面のような局所的な使用は認められない。441は溝状砥面を持つ砥石である。442は粗粒砂岩製の薄型砥石であり、全面に砥面を持つ。表裏面は凹状に内湾しているが、端部は四面すべて外湾している。また表裏面と側面の砥面は独立しており、一連のものではない。この特徴は内磨砥石A2類に類似するものである。左端部には剥離痕があり、砥面の更新が行われたと考えられる。443は溝状砥面と凹痕を持つものである。砂岩製の剥片を使用し、調整剥離により成形している。砥痕は、風化により不明瞭で観察できないが、表面に溝状砥面を1条持つ。444は凝灰岩製の砥石である。全面に砥面を持ち、端正な直方体を呈する。擦痕は、金属を対象にした砥石に類似する。

敲石 (445～447) すべて流路1から出土した。445はヒスイ製の小型礫を素材にした敲石である。全周に剥離面を持つが、この剥離面は使用により生じたものと考えられる。縄文時代の多面体敲石〔阿部1979〕に類似した形状である。446は蛇紋岩の小型扁平礫を素材とする。下端部に小さな敲打痕が認められる。447は砂岩の大型の楕円扁平礫を素材とした敲石である。下端部は敲打により平坦になる。

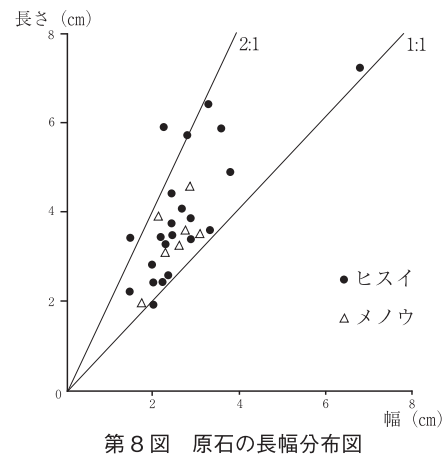
軽石製研磨具 (448) 37DP4から出土した。擦痕などの使用痕は観察できない。軽石を用いた製品はほかに認められず判然としないが、玉作に関連した資料と考えられる。

スクレイパー (449・450) 115点出土し、内2点を図示した。449は流紋岩製で流路1から出土した。貝殻状剥片を素材とし、下端と右側縁を調整剥離で仕上げている。450は砂岩製でSD201から出土した。幅15.3cmを測る大型の貝殻状剥片を素材とする。上面は折損している。端部に剥離痕を持つが、不連続であり、使用痕と考えられる。

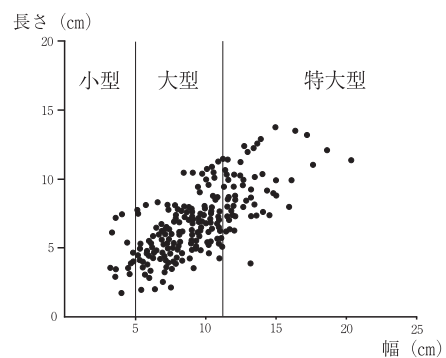
石錘 (451) 安山岩の棒状礫を素材とし、敲打により両端に縄かけ溝を巡らす。下部に大きな剥離面がある。

貝殻状剥片 図示はしていないが178点出土した。7割は砂岩系の石材を使用したもので、石材の偏りは六反田南遺跡Ⅱの下層に見られた特徴に類似する。幅で3つに分類できる(第9図)が、この分類も六反田南遺跡Ⅱの下層で行ったものと近似している。

原石 図示はしていないがヒスイ原石が22点、メノウ原石が7点出土した。いずれも拇指程度のもので(第8図)、敲石などの素材を目的として持ち込まれた可能性は低い。南押上遺跡では、小型礫が勾玉製作工程に直結していることが確認された〔小池・水落2010〕。本遺跡でも勾玉製作の目的で搬入されたと想定されるが、該当する成品・未成品は出土していない。



第8図 原石の長幅分布図



第9図 貝殻状剥片(スクレイパー)の器体幅による分類

D 木 製 品 (図版 37 ~ 45・84 ~ 88)

1) 概 要

今回の調査でも、平成 19 年度調査と同様に流路 1 を中心として、1,000 点を超える多くの木製品が出土した。その大半は破損が著しい上に用途も不明な破片であったが、その中でも器種の明らかなもの、用途は不明であるが特徴的な加工を施されたもの、または幅・厚さといった製材時の手がかりになるとと思われる部分の現存するものが 500 点近く存在した。流路 1 では、古墳時代から奈良時代の土器を多く含む中層から下層 (3 ~ 5 層) で最も多く出土したが、出土層位からは木製品の時期を明確にできなかった。出土した木製品のうち、種類別の出土傾向では、容器の曲物、槽や建築部材が多く出土しており、農具や祭祀具などの出土は少なかった。樹種の 9 割以上をスギが占める。

2) 記述の方法と分類

木製品の報告は種類別に主要な 124 点について行う。まず、小型の木製品から報告し、建築材などの構築部材は項を分け、次項で報告する。各木製品の出土地点、法量、木取り、樹種については観察表を作成しており、ここでは各種類の形態を中心に記載する。なお、分類や部位の名称等については、『六反田南遺跡Ⅱ』同様、主に『木器集成図録 近畿古代篇』[国立奈良文化財研究所 1985] を参考とした。ここで分類項目は、農具、工具、容器、椅子、祭祀具、舟、用途不明品とし、以下で各項目に従って説明する。

3) 各 説

a 農 具 (452・453)

柄、大足がある。452 は直線的な柄で、長さ 53cm・幅 5.3cm・厚さ 3.5cm を測る。柄頭部は角状に加工している。中央部に切れ目を入れており、下端部が剣先状に尖る長さ 10.4cm の楔状の木片 (452b) を打ち込んでいた。

453 は田下駄の一種で大足の縦木と考えられる。2 本の縦木と複数の横木からなる長方形の枠と足をのせる足板からなり、端につけた縄を持ち上下させて使用する。大足は代作りの道具として昭和 30 年ころまで使われたという。平成 19 年度調査においても、流路 1 から出土例がある。残存する長さは 42.7cm・幅 6.5cm、横木を組むための長方形の柄穴が、破損部の痕跡も含めると等間隔に 4 か所認められる。側縁部には端部から 11cm と 21cm の 2 か所に手綱を緊縛していた括れが認められる。

b 工 具 (454)

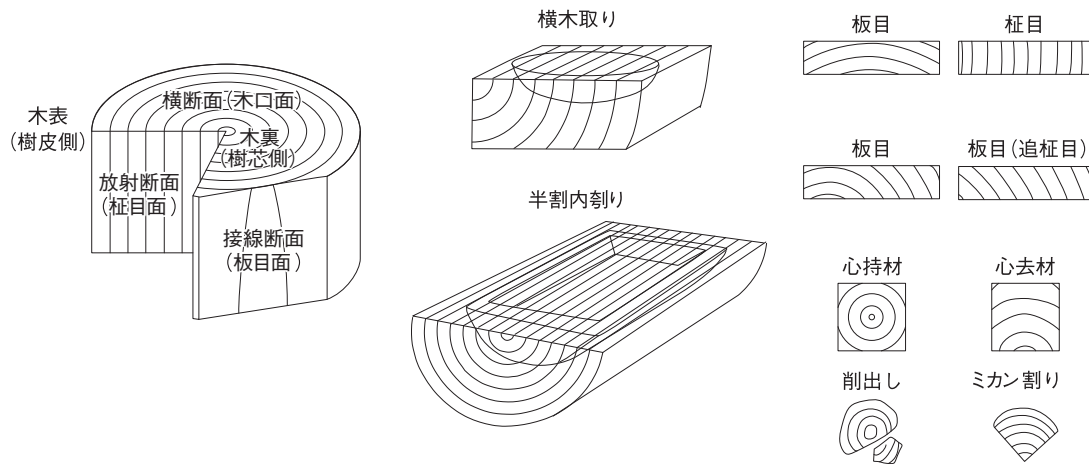
454 は長さ 66cm・幅 6.2cm・厚さ 1.2cm のヘラ状木製品である。先端は片面を 8cm 程徐々に薄く削り、舌状に成形する。仕上げが全体的に粗く、当初からヘラとして製作されたのではなく、製材時の端切れ等を転用して剥ぎ取り等に用いたものと考えられる。

c 容 器 (曲物を除く) (455 ~ 467)

皿 (455) 挽物容器の白木地皿である。流路 2 から出土したもので、木取りは横木取りで復元口径 18.3cm・高さ 1.7cm である。その法量から 9 世紀頃のものと思われる [春日ほか 1996]。

木製品	農具	柄	
		大足	
	工具	ヘラ	
	容器	削り物	皿
			槽
		曲物	円形曲物
			方形曲物蓋
		柄	
	祭祀具	斎串	
		人形	
		舟形木製品	
		刀形	
		竿	
漁撈具	浮子		
舟	舟		
不明材			

第 5 表 出土木製品の分類



第10図 木取りの種類 [茶谷 2005 から一部転載]

槽 (456～467)

本調査では槽が13点と多く出土した。破損したのも多く見受けられたが、それぞれ別個体のものがある。大きさは一律ではなく、大型のものから小型のものまであり、用途に応じて各種製作したものと思われる。

槽の木取りに関して、半割内割りのものと横木取りのものが見受けられた。大型の槽は461を除き、半割内割りによって成形しているが、小型のものは横木取りで製作している。

456は大型で浅い楕円形槽の破片である。現存長102cm・現存幅22cmである。口縁部は短辺側で一部遺存するのみである。外面の底部からの立ち上がりは口縁部近くから急傾斜で立ち上がる。底部は平坦に成形している。457は大型で浅い長方形槽で、長さ164cm・幅44cm・高さ9cmである。浅いもので側縁の加工が粗い。外面の立ち上がりは長辺、短辺ともに底部との境は明瞭ではなく、短辺側断面にいたっては底部の面取りを施していないために緩く弧を描いている。内面にはチョウナの痕跡が確認できた。458は、大型の浅い槽で、平面形は隅丸長方形が想定される。現存長100cm・現存幅13cmである。横断面は底部との境が明瞭で直線的に斜めに立ち上がる。縦断面は平坦な底部から緩やかに弧を描いて立ち上がる。459は欠損が著しく全体像は復元しづらいが、内割りによって成形していることから、大型の楕円形槽が想定される。また、年輪の幅がほかの木製品と較べて粗く、古墳時代のものと想定される。縦断面は、平坦な底部から緩く直線的に立ち上がる。460は、未成品の槽である。現存長37.8cm・幅9.4cm・高さ6cmである。底部、長辺側面、短辺側面に面取りを施している。内面のチョウナ痕が粗いことから、粗削り中に破損し廃棄されたものと考えられる。461も多くの部分が欠損しており、長さ18cm、幅12.2cm、高さ18.5cmが現存するのみである。木取りは、半割後に木表側から削り抜く外削りで成形し、木口の断面観察から直径70～90cm前後の部位を用いて成形したと看取できることから、大型の方形もしくは楕円形の槽であったと想定される。462は多くの部分が欠損しており、現存長24cm・現存幅30cm・高さ12cmである。底部の遺存状況から、平面形は楕円形で長さ60cm前後・幅30cm前後の中型の槽であったと想定される。外面の底部からの立ち上がりは、直線的で斜めに立ち上がる。口縁端部は外側へ水平に突出し、鏝状を呈すと思われる。463は中型の楕円形槽である。欠損が著しく、表面が炭化している。

464～467は小型の刳物容器の槽である。464は長さ60cm・幅26cm・高さ12cmである。縦断面は底部から直線的に斜めに立ち上がる台形状、横断面は底部から直線的にほぼ垂直に近い角度で立ち上がる台形

2 遺 物

状を呈す。465は小型の長円形槽である。現存長43cm・幅15cm・高さ8cmである。縦・横断面ともに底部からの立ち上がりは明瞭で、直線的に斜めに立ち上がる台形状を呈すると想定される。466は長さ32cm・幅20cm・高さ4cmで、縦断面は平坦な底部から緩やかに立ち上がる。横断面は底部から直線的に斜めに立ち上がる。口縁端部は面取りしておらず、内面は皿状に浅く削り抜いている。467は現存長30cm・現存幅11cm・高さ6cmである。縦断面は平坦な底部から直線的に緩やかに立ち上がる台形を呈す。横断面は、緩やかに弧状を呈しており、底部との境は明確でない。

d 曲 物 (468～491)

曲物と考えられるものは側板と底板がセットとなるもの、底板のみものを合わせると19点あり、そのすべてが流路1から出土した。

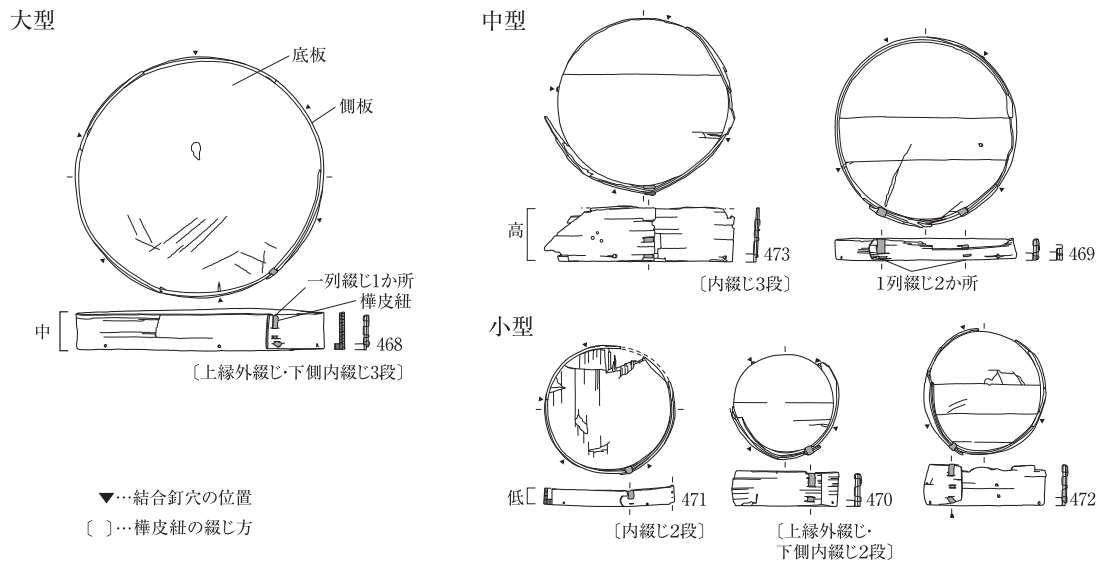
円形曲物のうち、側板と底板がセットとなるものは6点ある。『六反田南遺跡Ⅱ』において、出土曲物について分類されており、本稿もそれにならう(第11図参照)。

側板は樺皮紐で綴り合わせる際、1列綴じが1か所のもの(468)と2か所のもの(469・471)がある。樺皮綴じには、内綴じ2段(469・471)、内綴じ3段(473)上縁外綴じ・下側内綴じ1段(471)、上縁外綴じ・下側内綴じ2段(469・470)、上縁外綴じ・下側内綴じ3段(468・472)などの綴じ方が認められる。側板と底板は、側板の上から木釘を打ち込んで結合したもので占められる。側板を曲げるため、内面にケビキを入れるものがあり、縦平行に施すもの(489)、斜平行に施すもの(470)、縦平行から斜平行になるもの(473)がある。側板の高さは5cm前後のもの(470・471・472)、3cm代のもの(470・472)、2cm以下のもの(469・471)に分類できる。円形曲物の底板に注目すると、直径が30cmを超えるもの(468)、16～18cm前後のもの(469・473)、10～13cm前後のもの(470・471・472)に分類可能である。厚さは0.5～1.0cm前後である。結合釘穴は3～6か所に等間隔にあるもの、結合釘穴のないもの、結合釘穴の数量が判然としないものがある。また、断面形はいずれも長方形の板状を呈す。なお、曲物の蓋は、本遺跡出土例には確実なものなかった。以下では、側板を残すものから順に報告する。

468～473は円形曲物である。468は完形に近く、直径32cm・高さ5.4cmである。側板の綴じ合わせは1か所で、上縁外綴じ・下側内綴じ3段、結合釘穴は等間隔で6か所にある。469は一部欠損しているものの遺存状態は良く、直径18.2cm・高さ2.1cmである。側板の綴じ合わせは2か所で、一方は上縁外綴じ・下側内綴じ2段、もう一方は上部が欠損しているが、内綴じ2段と想定される。結合釘穴は4か所にある。470は直径12.0cm・高さ3.3cmである。側板の綴じ合わせは1か所で、上縁外綴じ・下側内綴じ2段、結合釘穴は4か所で、内面に斜平行のケビキを入れる。471は直径12.5cm・高さ1.5cmである。側板綴じ合わせは2か所で、結合釘穴は等間隔で5か所あったと考えられる。472は直径12.2cm・高さ3.9cmである。側板の綴じ合わせは1か所で、上縁外綴じ・下側内綴じ3段、結合釘穴は等間隔で3か所にある。473は直径16.8cm、高さ5.0cmである。側板の綴じ合わせは1か所で、下側内綴じ3段、結合釘穴は4か所にある。内面に斜平行から縦平行にケビキを入れる。

474～479は円形曲物の底板と考えられる。474は現存長30.0cmと大型で、板の厚さは中心部から縁辺部にかけて次第に薄くなる

475～479は直径15～17cm前後の中型で、475の結合釘穴は等間隔に4か所ある。476は1か所のみの遺存であるが結合釘穴痕と考えられる欠損が2か所あることから、等間隔に5か所あったと想定できる。477の結合釘穴は2か所遺存しており、等間隔に4か所あったと想定できる。478は、ほぼ半分に分れた状態であるが、結合釘穴は5か所認められ、現存で1か所に木釘を打ち込んだ状態が見える。479は現存



第 11 図 円形曲物の部位名称と分類

は 1 か所のみで判然としないが等間隔に 3 か所の可能性も想定される。断面形はいずれも長形状を呈する。

480～486 は直径 9～12cm 前後の小型で、480 は木釘が 1 か所遺存し、結合釘穴は 4 か所にある。481 は現存で 3 か所、等間隔で 4 か所にあったと想定できる。482・483・484 は現存 2 か所、485 には結合釘穴は認められない。486 は現存する結合釘穴は 2 か所ある。

487 は直径 9.4cm で、ほかの小型のものより一回り小さい。現存する結合釘穴は 1 か所のみである。

488 は、現存長 20.6cm・現存幅 8.4cm である。平面形は隅丸方形を呈すると想定される。結合釘穴は認められない。方形曲物の蓋板か。489 は現存長 22.6cm・現存幅 1.8cm・厚さ 1cm のへぎ材である。曲物の側板であると考えられ、縦方向に平行のケビキが認められる。

490 は削り出しの棒状製品である。長さは 70cm・径 1.4cm である。断面形は多面形を呈し、先端部を細く尖らせる。これは曲物の柄杓の柄の長さに対応することから、柄杓の柄として用いられた可能性が高い。491 は長円曲物に用いられた柄の部材である。端部を球頭状、握部の断面を円形状、差込部の断面を方形状に削り出す。柄は底板の両端部を耳状に張り出させ、張り出しにあげた穴に差し込んで使用する。

流路 1 出土の曲物は形態と出土層位から、これまでの当遺跡の調査事例と同様に 8～9 世紀の所産と考える。

e 器 具 (492～494)

腰掛け・器具脚部が出土した。背もたれを有するものを椅子、背もたれの無いものを腰掛という [猪熊・山本 2006]。本遺跡からは腰掛が 2 点出土し、平成 19 年度調査でも 1 点出土している。通常、腰掛には座板と脚部を一本から削り抜いた刳物腰掛と、別材製の脚板の上端に柄を作り出し、それを座板にあけた孔に差し込んで組む指物腰掛があるが、492・493 の 2 点とも刳物腰掛である。双方ともに平面形は長方形を呈し、脚部を長辺側に作り出している。492 は厚さ 14cm の材を緩やかな弧状を呈するように上面を窪め、樹芯側である木裏側 (第 10 図参照) を短軸方向に 3cm 削り抜いた後、長軸方向に 6cm 削り抜いて脚部としている。493 は厚さ 8.3cm の柾目板の上面を浅く窪め、裏面は 3.5cm 削り抜いて低い脚部としている。494 は、机や槽等の脚部と考えられる柾目板である。幅 86.6cm、高さ 16.6cm、厚み 1.5cm である。脚部の

2 遺 物

接地面幅は8cmで、内側に5cm、高さ2cm内湾し、さらに1cmの段を作り出している。

f 祭 祀 具 (495～499)

斎串、人形、舟形、刀形、竿がある。495は斎串の可能性が考えられるもので、両端を三角形状に切り落とす。496は人形の可能性が考えられる。薄板の片側端部を三角形状に切り落としたもので、上端部の両側面に切れ込みを入れ頭部を表現する。497は流路1の最下層から出土した舟形木製品で、形状から準構造舟を模したものと考えられる。498は形代の刀形である。緩く湾曲した柄部分のみが出土した。499は祭祀を行う際に形代に挿した竿と考えられる。断面形は八角形を呈しており、先端部は形代に挿すため、一段細く成形される。

g 漁 撈 具 (500・501)

500・501は浮子と考えられる。500は長さ27.5cm・幅5.1cm・厚さ1.7cmである。501は長さ16.5cm、径3.0cmである。両端部は網を結縛するため、径を一段細く削り出している。

h 舟 (502～504)

502～504は湾曲した部材片で、舟の部材であった可能性がある。502・504は年輪を切るように弧状に削り抜き、503は丸木を半割後、年輪にそって削り抜いている。

i 用 途 不 明 品 (505～515)

加工痕・形状から部材か部材の一部と考えられるが、用途が不明なものを用途不明品とした。505は追柁目の板材である。上端縁辺部に長方形の穴を加工している。506は楔形の木製品で、上端部に垂直方向の加工痕が残る。507～509は薄く加工された板材である。512は芯持ち材の一端を細く加工しており、横槌とも考えられる。510・511・513～515は端部に加工が残る棒状木製品である。514は側面に等間隔に刻み目を施している。515は上端部の両側面からV字型に切り込みを入れ、有頭状に加工している。

E 構築部材 (図版 46～55、図版 89～95)

1) 概要

前述のように、本遺跡からは平成 19 年度調査と同様に、1,000 点を超える多量の木製品が出土した。9 割以上が流路 1 からの出土である。それらの半数以上は、原形をとどめない、破損の著しいものであったが、器種の特定が可能なもの、器種や使用目的等は不明であるものの加工痕が明確なものが、合わせて 500 点近く存在した。

それらのなかには、形状・加工痕から構築部材や施設材であったと考えられるものが多数含まれる。各時期の土器が層位に関係なく混在していたため、時期の特定はできないが、出土した構築部材はおおむね古墳時代から古代までのものとする。

2) 記述の方法と分類

構築部材の報告に関しては、平成 19 年度出土木製品と同様に、『六反田南遺跡Ⅱ』と同様に、山田昌久氏から部材の鑑定と整理作業のご指導をいただいた。そして、主として鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土構築部材データベース [鳥取県埋蔵文化財センター 2008] を参考に、本遺跡から出土した木製品のうち、大型加工材を以下のとおりに分類した (第 6 表)。

まず、何らかの建物、施設を構築していたであろう大型加工材やその関連部材と考えられる部材を、構築部材とする。構築部材は、建築部材、施設材、不明材に大別する。建物を構成したと考えられ、部位を特定できる部材を建築材とし、そのほか建物以外の用途を想定できる部材を施設材、大型加工材ではあるが、用途不明の部材を不明材とした。

建築部材は多くの部位から構成されるが、本調査では柱材・水平構造材・壁材・床材・屋根材・接合部材が出土した。これらはさらに細分し、水平構造材は梁・桁材・開口部材、壁材は破風材・壁板・木舞、床材は床板・梯子、屋根材は垂木、接合部材は栓・差し釘に分類した。施設材は用途を想定できるものに、杭材がある。

これら構築部材について述べる際には専門用語が用いられる。今回の報告資料に関しても、一般的には馴染みのない用語を使用するため、第 12 図に部位名称を示すとともに、各説の文中にて適宜、語句の説明を加える。なお、資料の中には二次加工を受け、転用されたと考えられるものがある。これらは転用後の使用目的が不明であっても、本来の用途が推察できる場合は、転用前の部材に分類した。

3) 各説

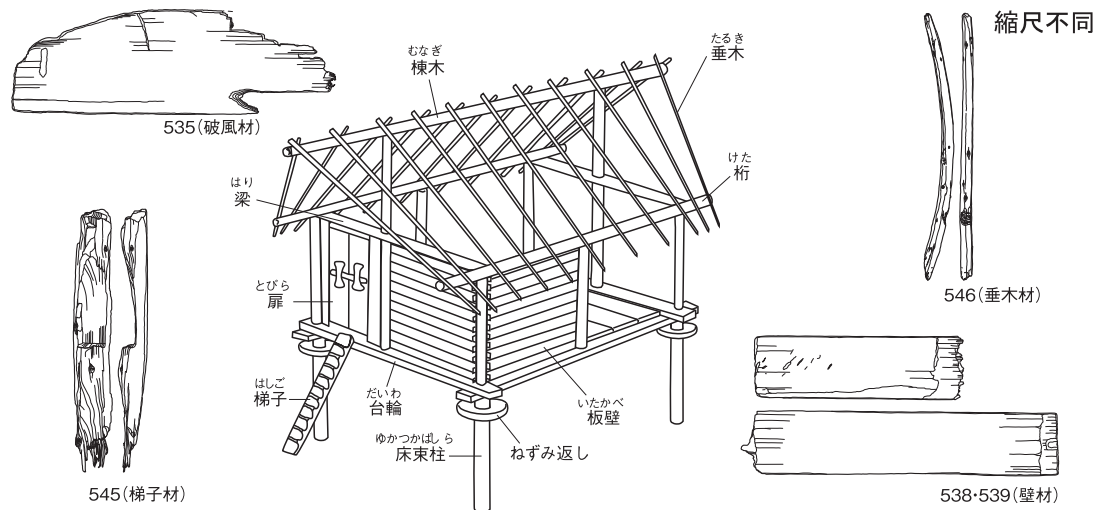
a 建築部材

建築部材として部位特定できたもの、またはその可能性が高いものである。

柱材(516～521) 516はミカン割りの柱材である。517は貫穴部分が欠損している。518は断面方形の柱材である。残存長 204.5cm、幅・厚さ 7cmである。端部には一辺 3cm角の貫穴を穿つ。出土時、この貫穴に角材片

構築部材	建築部材	柱材	柱材
		水平構造材	桁・梁材
			開口部材
		壁材	破風材
			壁板
			木舞
		床材	床板・梯子
	屋根材	垂木	
	接合部材	栓	
		差し釘	
施設材	杭材		
	柵材	柱材	
不明材			

第 6 表 構築部材の分類



第 12 図 建築部材対応模式図 [小矢部市教育委員会 2005 から改変して転載]

が残存していたが、貫穴の大きさと一致していなかった。519～521はSB3のP419・420・423から出土した柱根である。519は断面方形で現存長60cm・幅18cm・厚さ6cmである。木口断面の年輪観察により、直径70cm以上のスギを分割し加工したことが看取できる。下端部には鉄斧による切断痕が認められる。520は現存長49cm・幅12cm・厚さ6cmである。今回出土した3本の柱根のうち、最も風化が著しい。上端部には折損した痕跡が残る。521は現存長53cm・幅19cm・厚さ6cmである。遺存部分は分割したのみで、それ以上の加工は認められなかった。

水平構造材

縦材である柱材に水平に架構し組合せ、軸部を構成する建物の骨格部材である。

梁・桁材 (522～530) 梁・桁材と考えられる部材が9点出土した。522は梁・桁材と考えられる部材である。割り製材後、断面方形に加工している。523・524は板目の五平材である。523は木口断面観察により直径1m以上の杉から製材されたと思われる。524は端部近くに浅い切り欠きを施す。525は端部に柄を作り出す。もう一方の端部は火を受けて炭化している。526は端部に切り欠きを施す。527は3か所に切り欠きを施す。図面下部の下端の切り欠きでさらに一本の材を連結していたと考えられる。下端部近くに材を直交させていた圧痕が認められ、さらにその反対側の切り欠きは、直交した材を受けるための仕口と考えられる。528は現存長66.4cm・幅17.1cm・厚さ4.1cmである。製材後、厚さ調整と端部の両角を落す製材処理を施しており、梁・桁材に用いた材の端切れとも想定される。529は割り製材後、木裏側をはつて厚さを調整し、端部に切り欠きを施す。梁材であろうか。530は壁板材の押えに用いたと考えられる部材である。現存長85cm・幅13cm・厚さ3cmである。断面形は「L」状を呈しており、端部の貫穴に柱材を通し、本部材とて壁板を固定していたと考える。

開口部材 (531～534) 扉を有しない建物の開口部に用いられたと考えられる部材である。531は現存長123.4cm、幅14.9cm、厚2.7cmである。両端部に縦に切り欠きを施している。製材時に樹木の歪みの影響を大きく受けている。上面は滑らかで、長辺部の角が摩滅して丸みを帯びる。建物開口部の下部に組み込まれ、人の出入りによって摩滅したためと考えられる。扉口材の楣や蹴放しと異なる点は、扉を据える軸釣穴がないことである。扉止めの隆起帯については、平成19年度調査出土の楣材にも施されておらず、これを省略したものにとらえることができよう。この部材は仕口を施した両端部が遺存しているため、これ

を用いた建物の柱間が、108cmであったことが看取できる。532も上面が摩滅して角が取れている。開口部材として用いられていたと考えられ、仕口が遺存しない方の端部は転用の際に切断されたものと想定される。533・534は端部に方形の切り欠きを施すものであるが、531・532のように上面の摩滅による滑らかさが認められない。両資料とも一方の端部が欠損しているため、開口部材とは断定できない。仮に開口部に使用されたとなると、上部に組み込まれたと想定される。

壁 材

建物の壁材には、木舞、網代、板材等が用いられる。今回の調査では、切妻部に用いる破風材と思われる板材、壁板、木舞が出土した。

破風材 (535) 建物の妻部に使用された板材である。板を斜めに切断した痕跡が認められるため、床板や壁材とは考えがたく、破風材と考える。現存長136cm・幅29cm・厚さ2.7cmである。板目板であり、小口断面に認められる年輪観察から、直径90cmから1m近くの樹木を用いたことが看取される。

壁板 (536～542) 536は現存長105cm・幅14cm・厚さ1.5cmである。割り製材時に生じた湾曲を裏側からはつり厚さを調整した痕跡が認められる。537は現存長128.5cm・幅12.5cm・厚さ3.1cmの柁目材である。風化が著しく現状では厚さが一定ではないが、下端部から35cmの部位で材を直交させて組み合わせていたため、風化を免れたと思われる痕跡が認められる。538・539は同一の板材で、流路1から折れた状態で出土した。538は長さ133.3cm・幅26.4cm・厚さ4.3cm、539は長さ90.3cm・幅26.5cm・厚さ4.9cmであり、全長は223.6cmとなる。これは、正倉規模の建物で壁材に用いられるものとして遜色ないものである。538は端部を薄くすることで柱材への落とし込み加工を施している。しかし、539の端部には同様の落とし込み加工が施されておらず、製作中に何らかの原因で破損したため廃棄したとも考えられる。また、538の端部中央には柄穴が認められる。540は現存長214cm・幅6cm・厚さ2cmである。木表側は表面を丁寧に仕上げられており、壁板を分割し細くしたものと想定される。541は柁目材で表面は平滑に仕上げられている。端部に孔が摩滅した痕跡が残る。542は長さ90cm・幅30cm・厚さ1cmである。

木舞 (543) 木舞は壁の下地に組みわたす材である。543は削り出しの棒状木製品である。製材時の歪みを残すが、表面は平滑に加工している。

床 板

床板 (544) 幅、厚さとも床板材に相当する板材で、現存長43cm・幅18cm・厚さ6cmである。図面下端部の両角は、製材時の面取り処理を施す。床板材として使用する際、長さ調整のために切り落とした端材とも考えられる。

梯子材 (545) 現存長64cm・幅9.5cm・厚さ6.7cmの梯子である。半割したスギ材の木表側から段を削り出している。欠損が著しいが、2段現存している。木口の断面観察から直径16cm前後のスギを用いて製作したと考えられる。

屋 根 材

垂木 (546) 芯持ちの丸木を用いた垂木材である。端部から23cmで外湾側を浅く欠込んで、横棧の受部としている。

接 合 部 材

柱と水平構造材である梁桁材を組み合わせた際、固定するため貫穴に挿入する材で、栓・釘が出土した。

栓 (547) ミカン割り後、断面三角形に近い台形の頭を残し、断面長方形の栓を作り出す。通常、先端部近くに別の栓を挿すための貫穴を穿つが、本資料にはそれが認められない。

2 遺 物

差し釘 (548) 部材の接合部に用いる部材である。

b 施 設 材

建築部材以外の構築物を構成していたと考えられる部材、建築部材であったが転用されその用途が想定できる部材を施設材とした。

杭 (549～556) 549～551は流路1に打ち込まれていた杭(杭462～464)である。549は柵目材、550・551は板目材で加工痕が明瞭に残る。552・553は流路1出土の杭である。552は上端部に切り欠きを施す。553は割り製材後、年輪界面の湾曲を木裏側からはつり、厚さを調整している。554はKC区の流路2から出土した。ヒノキ科の芯持ち丸木を用いた杭である。

555・556はKD区の杭37・杭35である。555は分割材を断面方形に加工している。556の樹種はマツ属で、細い角材の一端を尖らせたものである。

柱材 (557) 現存長209.3cm・幅14.1cm・厚さ5.4cmの柱材である。中央部の二か所に横架材を組むための欠き込みを施している。大規模な柵などの構築物に用いたと考えられる。

c 不 明 材 (558～575)

大型加工材ではあるが、用途が不明なものや特徴的な加工を施されているもの17点を報告する。558は現存長75cm、幅3.5cmの柵目板である。端部近くに切り欠きを施す。559は断面方形で細かい加工が施されている。下端部は炭化している。560～562はともに割板で、仕上げのための調整はない。563は製材時に生じた湾曲は調整されていない。縦に裂けた部位が炭化しており、施設材または何らかの大型器具の部材と考えられる。564は端部に柄を作り出す。幅20cmの板目材であるが、直径75～80cmほどのスギを用いており、木裏側は厚さ調整を施していない。565は現存長152cm・幅3.7cmの板目の角材である。先端を尖らせる。通常、垂木材に多く見られる材であり、転用されたものである可能性が考えられる。566は簡便な施設に用いたと思われる角材である。節のある部位を用いたため、割り製材時に歪みが生じている。木口断面を見ると、樹芯から12～20cm辺りの部位を用いたことが看取できることから、直径40cm前後のスギを用いたと思われる。567は一端に切り欠きを加えた角材である。568は現存長81.3cm・幅5.3cm・厚さ4.2cmの柵目角材である。569は3か所に切り欠きを施しており、直行する部材を組合せていたと想定される。570・571は古代の竪穴住居の柱材に相当すると考えられる板材であるが、詳細は不明である。572は厚さが非常に不均等で建築材には不適切であり、簡易な施設材として用いたものと思われる。573は割り板製材後、表面の仕上げを施していない。端部に運搬時の縄かけのためと思われる切り欠きが認められる。574は欠損が著しいが、浅く弧を描く切り欠きが看取できる。575はミカン割りした後、側面・木口に面取りを施す角材である。

第Ⅵ章 自然科学分析

1 樹種同定

六反田南遺跡（新潟県糸魚川市大字大和川）は、海川河口域の右岸の沖積地に立地する。[鈴木 1983]によれば、本遺跡周辺の沖積地は海川低地に分類されており、海川河口域には三角州が発達し、海岸沿いには砂丘の形成が認められる。

本遺跡の発掘調査では、縄文時代中期、古墳時代前期、奈良～平安時代の遺構を検出している。特に縄文時代中期の遺構では、竪穴住居や土坑等を検出し、当該期の集落が沖積地から検出された点で貴重な発見である。

本報告では、KC 区から検出された川跡やピットから出土した木製品を対象に樹種同定を実施し、木製品の樹種や木材利用について検討する。

A 試料

試料は、KC 区から検出された古墳～平安時代とされる川跡、ピット等から出土した木製品 112 試料(分析 No.1～112)である。なお、これらの試料のうち、底板と側板の両方が残存する曲物 6 点については、各部位を分析対象としている。また、分析 No.54 は、柄穴内に組合わせた別材が残存したことから、この別材も分析対象としている。したがって、分析試料数は、112 試料 119 点となる。

B 分析方法

木製品の木取りを観察した後、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を木製品表面から直接採取する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴については [島地・伊東 1982]、[Wheeler ほか 1998]、[Richter ほか 2006] を、日本産木材の組織配列については、[林 1991] や [伊東 1995・1996・1997・1998・1999] を参考にする。

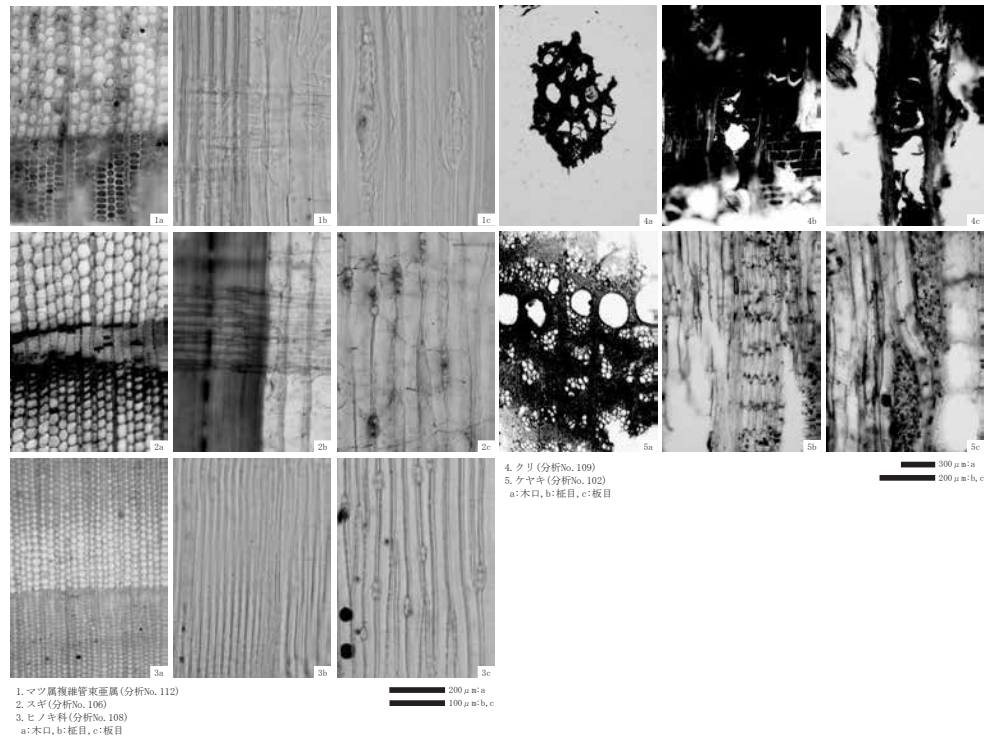
C 結果

木製品は、針葉樹 3 分類群（マツ属複維管束亜属・スギ・ヒノキ科）と広葉樹 2 分類群（クリ・ケヤキ）に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pin* 「U」 s s 「U」 bgen. *Diploxyton*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となり、1 分野に 1 個。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-10 細胞高。

1 樹種同定



第 13 図 出土材切片の顕微鏡写真

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ヒノキ科 (C[「U」] pressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Z[「U」] cc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Th[「U」] nb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

D 考 察

今回分析対象とされた木製品は、構築材、容器、器具、祭祀具、農具等からなり、特に曲物や槽は試料数が多い。曲物では、底板はいずれも柾目板が利用され、側板に板目板が1点認められた。また、槽も長さが1m以上を測る大型のものから比較的小型のものまであったが、明らかに槽と判断される資料で

は底面が板目となる木取りが多く確認された。これらの木製品は、119点のうち115点がスギに同定された。このことから、スギは、器種・用途に限らず、多くの木製品に利用されていたことが指摘される。また、曲物については、六反田南遺跡Ⅱ〔パリノ・サーヴェイ株式会社2010a〕と同様にすべてスギであったことから、木取りや法量と木材利用の相違を言及するに至らない。槽についても、大型槽（分析No.68）にヒノキ科が認められたほかは、すべてスギであったことから、スギ材を主体とする木材利用がうかがわれる。構築材・建築材についても、形状や用途等に限らずスギが多く利用されている点が指摘される。

スギ材が多用されるという傾向は、本遺跡や隣接する前波南遺跡や横マクリ遺跡、海川左岸の沖積地に立地する姫御前遺跡より出土した木製品の調査結果においても確認されており〔パリノ・サーヴェイ株式会社2008a・2008b、野村2008〕、古墳～平安時代の木材利用の特徴と考えられる。

多くの木製品に確認されたスギは、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易という材質的特徴を有する。このことから、スギ材が多用された背景には、このような材質的特徴があると推定される。また、これまでの自然科学分析調査結果から、縄文時代晩期頃には周辺地域にスギ等を含む森林植生の存在が推定されており〔株式会社古環境研究所2008、パリノ・サーヴェイ株式会社2010b〕、スギの入手・利用が可能であった点もその背景として推定される。

一方、食膳具の皿（分析No.101）には、広葉樹のケヤキが確認された。食膳具に広葉樹材が確認された点は、六反田南遺跡Ⅱの椀・皿（漆器を含む）類の木材利用と同様の特徴と言える。ケヤキの材質は、強度・耐朽性が高く、加工はやや困難な部類に入る。また、ブナ属やトチノキとともに椀・皿の本地としてよく利用される樹種である。本遺跡周辺では、前述した横マクリ遺跡から出土した漆器椀にケヤキが確認されている〔野村2008〕。

このほかに、垂木材（分析No.38）にヒノキ科、杭にヒノキ科（分析No.108）とマツ属複雑管束亜属（分析No.112）、木片（分析No.109）にクリが認められた。構築材は、スギ材の利用が多いが、今回の分析結果から、少なくとも針葉樹3分類群が利用されていたことがうかがわれる。木片に確認されたクリは、本遺跡では六反田南遺跡Ⅱの放射性炭素年代測定試料とされた立木とされる自然木（B区46A4Ⅶ層材）に認められており、縄文時代中期頃の植生や木材利用を示す資料と言える。

引用文献（第Ⅵ章）

- 林 昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1995 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究 資料31』京都大学木質科学研究所 p.81-181
- 伊東隆夫 1996 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究 資料32』京都大学木質科学研究所 p.66-176
- 伊東隆夫 1997 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究 資料33』京都大学木質科学研究所 p.83-201
- 伊東隆夫 1998 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究 資料34』京都大学木質科学研究所 p.30-166
- 伊東隆夫 1999 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究 資料35』京都大学木質科学研究所 p.47-216
- 株式会社古環境研究所 2008 「自然科学分析」『北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅷ 姫御前遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.46-60
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』地球社 p.176p
- 鈴木郁夫 1983 「Ⅰ 地形分類図」『新潟上越地域土地分類基本調査 糸魚川』新潟県農地部農村総合整備課 p.9-22
- 野村敏江 2008 「樹種同定」『一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ 横マクリ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第188集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.48-49
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2008a 「自然科学分析」『一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ 六

引用・参考文献

- 反田南遺跡・前波南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.53-56.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2008b 「自然科学分析」『一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ 六反田南遺跡・前波南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.36-38
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2010b 「自然科学分析」『北陸新幹線関係発掘調査報告書 南押上遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第220集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2010a 「自然科学分析」『北陸新幹線関係発掘調査報告書 六反田南遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第211集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006 「針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト」伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修)海青社 p.70
[Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*]
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 「広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト」伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修)海青社 p.122 [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*]

第Ⅶ章 ま と め

1 縄文時代中期

A 六反田南遺跡Ⅲの調査

六反田南遺跡での縄文時代遺跡の発見は、平成19年度の暗渠掘削の際、地表下2mでの土器の出土と包含層の確認に始まった。その後、調査区内外の確認調査によって、遺跡のほぼ全体に縄文時代の包含層と遺物の存在が認められた。この結果を受け、北陸新幹線用地内は平成19・20年度にわたり、調査区全体を調査し、中期前葉～中葉の竪穴住居などからなる集落域とその周辺域の様相を、限られた範囲ではあるが明らかにできた〔山本2010b〕。

平成20年度における国道8号糸魚川東バイパス用地内では、KF区において全面を調査した。調査によって、調査区中央付近を南西から北東へ流れる自然流路を検出した。遺物はこの流路内や北西岸、また周辺から中期前葉の土器や磨製石斧とその未成品などの石器が出土したが、出土量は多くはなかった。本調査区周辺は今後も調査が続くため、集落域から外れた自然流路とその周囲での生活様相がさらに明らかになることが期待される。また、KC区では、流路1の調査の際、確認調査トレンチで包含層に当たり、土器や石器が出土したほか、流路1の河床付近から主に古墳時代～古代の土器や木製品に混在して中期前葉～中葉の土器や石器が出土した。この部分の下層の調査は、平成21年度に行い、中期前葉～中葉の遺物が多量に出土している〔山本2009〕。低地遺跡での遺物の多様性が明らかになることが期待される。

B 出土土器について（図版18～22）

上述のとおり、KF区では中期前葉の土器が、KC区では中期前葉～中葉の土器が出土した。これらは、『六反田南遺跡Ⅱ』で詳しく報告したものと様相が大きく変わるものではない。また、平成21年度の調査においても多量の土器が出土しており、当該期の土器について詳しく報告する予定である。よって、ここでは主要なものについて、編年的位置付けを示すにとどめたい。

中期初頭～前葉の土器としては、14～16が今回出土した中では古く、中期初頭と考える。続く中期前葉については、〔寺崎2009〕は中期初頭後半から中期前葉の新崎式系について、県内資料を第Ⅰ段階、第Ⅱ段階、第Ⅲ段階に分けており、KF区出土の1が第Ⅰ段階、2・5が第Ⅲ段階に位置付けられそうである。KD区出土土器は、蓮華文を施す22～30、沈線区画内に横線文を充填する36～40、横位無文帯の上下縁に刻目文を施す41・42などが新崎式系Ⅲ段階と考えられる。

中期中葉の土器としては、北陸系の深鉢、『六反田南遺跡Ⅱ』第Ⅱ群A1a類の55～69、同第Ⅱ群A1b類の70～74、同第Ⅱ群A1c類の75～89がある。また、東北系や関東系といった、同第Ⅱ群B類や同第Ⅱ群C類と思われるものもわずかに出土した。なお、『六反田南遺跡Ⅱ』で第Ⅲ群（その他の土器）とされたものも定量出土しており、本稿では粗製深鉢としてまとめた。

C 縄文時代の石器について

1) 各調査区出土石器の特徴

今回の調査では、調査区間に未調査範囲があり、石器群の比較が困難である。そこで、調査区が隣接する六反田南遺跡Ⅱと比較しながらまとめていく。ここでは、まず各説にて行った記載をもとに各調査区出土の縄文時代の石器の概要と特徴を記述する。

KF 区

石器は打製石斧、磨製石斧、磨製石斧未成品、敲石、スクレイパー、石核、貝殻状剥片が出土した。石器の出土量としては10m四方に1～5点見られ、約5m南の六反田南遺跡Ⅱ（24A～26Aグリッド）の状況とそれほど違いは見られない。ただし、磨製石斧未成品や敲石があり、石器組成に若干の相違が認められる。特に流路の河岸に磨製石斧未成品と敲石がまとまって見られた。

磨製石斧未成品はいずれも縦長の扁平礫を素材としており、長さ6.8～14.8cm・幅3.7～6.1cmのものが見られる。これらの礫は、刃部に形成されると考えられる礫下端部が比較的鋭角を呈する。敲打段階が4点、調整剥離段階が2点である。これらの磨製石斧未成品は荒割や敲打の際に破損している。敲石は強い衝撃により剥離痕が生じている。これらのことから、この流路河岸で磨製石斧の製作が行われていたことが考えられる。磨製石斧はこのほか調査区内で2点出土したが、この未成品と一連のものかは判然としない。しかし、厚さ1cm前後の扁平礫を素材にした短冊形の定角式磨製石斧という点では共通している。

砥石は出土しておらず、製作は荒割から敲打にとどまると考えられる。しかし、155は研磨面を持つことから、研磨を行っていたとも推測できる。六反田南遺跡Ⅱでは磨製石斧の製作は主に集落域を中心に見られた。しかし、このように小さな水場を磨製石斧の製作場所として使用していることから、水場と磨製石斧の密接な関係がうかがえる。

KC 区

石器は打製石斧、磨製石斧、磨製石斧未成品、砥石が出土した。出土した地点がすべて流路1の河床のため、一時期かは判然としない。しかし、河床からは縄文時代中期初頭～中葉の土器が多く認められることから、これらの所産の可能性もある。また、KC区出土の縄文時代石器は摩滅や風化が少なく、遺存状態が良好なものが多い。このことから流路1に面したⅦ層（縄文時代中期前葉～中葉の遺物包含層）の崩落によるものも含まれていると考えられる。出土した石器すべてが縄文時代の層から崩落したものとはいえないが、六反田南遺跡Ⅱの集落域と石器の様相が類似することや、石器に風化が見られないことを勘案すると大部分は崩落したものと考えられる。打製石斧は、撥形と短冊形が定量見られ、刃部に光沢痕と微細な線状痕を持つことから、集落域で出土したものに近似しているといえる。しかし、扁平礫を素材としたものや、短冊形の中でも刃部にかけて急激にすぼまるものは見られなかった。

磨製石斧未成品は、いずれも縦長の扁平礫を素材としており、長さ9.4～14.6cm、幅5.9～10.5cmのものが見られる。擦り切り段階が1点、敲打段階が5点、調整剥離段階が4点ある。六反田南遺跡Ⅱのものに比べて擦り切りを持つ割合が高いといえる。182や183は素材分割時に擦り切りを用いようとしたことが見て取れる。六反田南遺跡Ⅱでは主に側面形成の際用いられたものであり、ここに相違点が認められる。石鋸状の砥石はいずれも比較的小型だが、集落域で見られたものに類似している。

2) 磨製石斧の製作について

ここでは、各調査区と磨製石斧未成品の製作工程を六反田南遺跡Ⅱの集落域と比較して考える（第14

図)。今回調査では、調整剥離段階（158・160・180・184）、敲打段階（156・157・175～179）、擦り切り段階（181）、研磨段階（155）が出土した。製作の在り方は、集落域とおおむね一致することが認められる。ただし、180に見られるように、調整剥離の際、貝殻状剥片の剥離技術が応用されていることは注目される。これは貝殻状剥片が薄く剥取される性質を利用したものである。剥片が薄く剥げるということは、磨製石斧が極端に薄くなってしまふことを防げる点で合理的である。

製作工具としてKC区出土のものは、上層の遺物として取り扱った砥石 438～440、敲石 445～447 が、磨製石斧の製作に関わるとも考えられる。また砥石 185～187 は、剥片の鋭利な端部を利用し、ほぼ未調整で使用した砥面である。断面形では砥面と原礫面・剥離面との間にテラス状に段を持つ。砥痕は必ず長軸に対して平行する。いずれも周辺に擦り切り痕を持つ磨製石斧未成品が出土していることから、これらの砥石は、いわゆる「石鋸」に用いられたとも考えられる。この特徴は六反田南遺跡Ⅱで「B2類」[水落2010]としたものに特徴が近似する。ただし、KC区出土のものは素材剥片に貝殻状剥片以外を用いており、ほかと様相が異なる。また、形態的には古墳時代のいわゆる「浜山型内磨砥石」にも類似している。しかし、浜山型内磨砥石は表裏面にも砥面を持つことが特徴であり、さらに端部の砥面と表面との間に、テラス状の段を持たない。このことから石鋸と内磨砥石を区別することができると思われる。

なお、磨製石斧製作に伴うとされるヒスイ成品の製作は、ヒスイの原石・剥片が出土しないことから、行っていないと考えられる。今回の調査では水場の周辺に磨製石斧未成品が点在して見られた。このことから、今後の調査においても、集落域や小さな水場を中心にして磨製石斧未成品や工具が出土すると考えられる。

素材獲得段階	調整剥離段階	敲打段階	擦り切り段階	研磨段階	成品
六反田南遺跡Ⅱ(集落域) 《原石》 247	237 239	225 230	223 232	221(S14J) 229	214 215(S15J)
六反田南遺跡Ⅲ(KC区) 《原石》	180 184	176 177	181		172 174
六反田南遺跡Ⅲ(KF区) 《原石》	158 159	156 157		155 ※遺物NOは各報告書の報告NOである。	153 すべて1:8

第 14 図 磨製石斧の製作工程の比較

2 古墳時代～古代

A 遺構の様相と遺跡の存続期間

平成 20 年度に行った六反田南遺跡Ⅲの上層の調査では、掘立柱建物 4 棟、土坑 16 基、溝 40 条、性格不明遺構 4 基、自然流路 2 条を検出した。以下では、時代ごとに遺構の様相を概観する（図版 4）。

弥生時代は土器の出土はあるものの、遺構の様相は不明である。古墳時代に入ると、KF 区の北側、KD 区・KC 区の東側で古墳時代前期の遺構が認められる。KF 区の SD201 は、平成 18 年度に調査されたものの続きである。幅 3.3～5.1m・深さ 32～59cm で、断面形は孤状を呈する。遺物は北東側にややまとまりがあり、甕・壺・鉢・高杯・器台などが出土した（図版 26-188～199）。調査区外へ延びる南西側の行く先は、平成 19 年度調査の D 区で検出した SD510 に向かっていているように見える。そうであれば、かなりの長大な溝となるため、今後の調査に期待される。

KD 区では、土坑と溝を検出した。SK575 は調査区のほぼ中央に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径 2.7m、短径 1.3m、深さ 25cm で、断面形は台形状である。北東隅と遺構上面全体が後世の攪乱によって削平されており、遺存状態はよくない。遺物は土器が甕 7 個体以上、壺、鉢、高杯、小型器台など（図版 26・27-200～212）が潰れた状態で出土したほか、蛇紋岩製勾玉（図版 35-415）など石製品が出土した。その中で、甕 5 個体はほぼ完形に近く復元されたことから、これらは完形のまま廃棄されたと考えられる。土坑の覆土に焼土や炭化物の堆積がないことや、甕が出土遺物の主体であることから、墓や祭祀の場ではなく、廃棄の場であったと考える。

SD576 は調査区の西端にあり、多くの部分が調査区外へ広がっているほか、北側は現代の攪乱で壊され、南側は SB5 の柱穴に切られている。平面形は不成形で、幅 1～4m、深さ 14～34cm ほどで、2か所で途切れているが、遺物の出土状況などから同一の遺構と判断した。遺物は甕・壺・鉢・高杯・小型器台（図版 28-228～257）などの土器や緑色凝灰岩製の管玉未成品（図版 35-418・422）などの石製品が出土した。この溝は平成 18 年度の調査で検出された SD196・200 と同様の平地式住居の周溝の可能性はある。そうであれば、住居部分は調査区外にあり、途切れる部分は陸橋となる可能性がある。KD 区ではほかに SK555・566・573・581、SD557・579、37DP22 などの遺構が古墳時代前期のものとなる。

KC 区では、SK433・443、SD441・445・452、P428 などが古墳時代前期の遺構となる。古墳時代前期に続く、中・後期の土器は流路 1 から出土しているが、遺構は検出されなかった。

古代の遺構は、KD 区と KC 区から検出された SB1・3・4 があげられる。SB1・4 は長軸が南北方向の桁行 3 間・梁間 2 間の建物で、梁間の中央の柱穴がわずかに外側に出ていることから、近接棟持建物〔宮本 1996・2002〕に分類される可能性がある。柱穴内や周辺から時期を特定できる遺物はなかったが、流路 1 や流路 2 から出土した須恵器や土師器の年代から 8～10 世紀頃の所産としたい。SB3 は長軸が東西方向にあり、梁行 4 間・梁間 1 間の建物である。古墳時代前期の溝 SD441 を切り、上層に 9～10 世紀頃の土師器を含む流路 1 と下層に 9～10 世紀の土師器を主体的に含む流路 2 に建物を構成する柱穴が壊されていることから、それ以前まで営まれた建物といえそうである。

六反田南遺跡では今後も発掘調査が続くことから、古墳時代前期から古代の遺構、遺物の検出が期待される。

B 古墳時代～古代の土器

平成 19 年度『六反田南遺跡Ⅱ』に行った上層の調査では、弥生時代後期の土器、古墳時代中・後期の須恵器、古墳時代後期の土師器がややまとまって出土したことから、発掘調査報告書のまとめでは、それらについて少しずつ検討を加えた〔細井^{ほか}2010〕。今回『六反田南遺跡Ⅲ』の平成 20 年度の上層の調査では、各地区で古墳時代前期の土器がやや多く出土し、また、KC 区の流路 1 や流路 2 から古代の須恵器や土師器が比較的良好な状態でややまとまって出土した。

以下では、古墳時代前期と古代の土器について、少しずつ検討を行う。

1) 古墳時代前期の土器

古墳時代前期の土器は、KF 区、KD 区、KC 区から出土したが、一つの遺構から多くの器種、個体が出土した例は多くなかった。そこで、ここでは、比較的複数の器種、個体が出土した KD 区の SK575 と SD576 出土土器を中心に検討する。

SK575 出土土器は甕・壺・鉢・小型器台など 13 点を図示した（図版 26・27 - 200 ~ 212）。甕は 7 点図示した中で、5 点が完形に近いものであった。最大径はいずれも体部上～中位にあり、203 ~ 205 は長胴、200 ~ 202 は胴張りの器形で、口縁部はいずれも「く」の字状、あるいは「コ」の字状に外反して開き、端部を面取りする。底部は 200・201・204 が平底、205 が丸底状である。207 は口縁部が外傾する広口壺、209 は椀形の鉢、212 は浅い受部が内湾して開く小型器台である。東海系や畿内系といった外来系の土器の様相が明らかでないが、甕の形態的特徴などから、〔滝沢 2005b〕編年の 7 ~ 8 期に位置付けたい。本遺跡内では、平成 19 年度調査の SD510 出土土器は 7 ~ 8 期に位置付けている〔細井^{ほか}2010〕。

SD576 は 2 か所で途切れているが、遺構の形態や遺物の出土状況から同じ溝と考えるため、出土土器も同様に扱う。SD576 は甕・壺・鉢・小型器台など 29 点を図示した（図版 28 - 228 ~ 257）。甕は比較的小型の 228、口縁部が「く」の字状に外反して、端部を面取りする 229・230、有段口縁の 231・232 などがある。壺は扁平な体部に段を持ち、脚部が付く 252、口縁部に擬凹線文を施す有段口縁 249、口縁部が短い広口壺の 234、口縁部が長い広口壺の 235、二重口縁壺で口縁部内面の段が不明瞭な 243、短頸直口壺の 250 などがある。鉢は有段口縁の 241、小型短頸で身の深い 254 がある。高杯は杯部が有段鉢形の 239・255 がある。小型器台は受部が内湾して開く 256・257 がある。各器種の特徴から、SK575 出土土器よりは古い、〔滝沢 2005b〕編年の 6 期前後としたい。本遺跡内では、平成 18 年度調査の SD196・200 を 5 ~ 6 期頃に位置付けている〔春日^{ほか}2008〕。また、平成 18 年度と同 20 年度に調査を行った SD201 も同様の時期としたい。

本遺跡では、流路 1 の東側の地帯、25 ~ 39A ~ G の範囲では、古墳時代前期の土器を〔滝沢 2005b〕編年の 5 ~ 6 期頃と 7 ~ 8 期頃に大きく分けることができそうである。ただ、流路 1 では、さらに新しい時期のものも多く出土しているので、本遺跡内にそれらを多く伴う遺構が発見される可能性がある。本遺跡は弥生時代後期から古墳時代後期まで、分布の中心を移しながら、連綿と土器が出土する遺跡であるといえる。

2) 古代の土器

須恵器と土師器の年代 (図版 31～34 - 340～403)

古代の須恵器は、流路1の中～下層にかけて主に出土したが、層位や分布での時期差は確認できなかった。流路1出土の須恵器杯蓋・有台杯・無台杯は〔春日1999〕編年のⅡ2～Ⅳ1期(7世紀末～8世紀後葉)、Ⅳ2～Ⅴ1期(8世紀末～9世紀前葉)、Ⅵ期(9世紀後半～10世紀初頭)に大きく分けられる。Ⅱ2～Ⅳ1期中で、8世紀初頭～前葉頃のものとしては、杯蓋359、有台杯363～365、無台杯375～380などが当たる。これらの産地の多くは頸城丘陵東部と考えられる。有台杯363の口径は18.3cmと大きく、糸魚川市須沢角地遺跡SI119〔土田・小池ほか1988〕出土の口径17.5cmの例や妙高市栗原遺跡SD25出土〔坂井1982〕の口径16.9cmの例、上越市木崎山遺跡3号竪穴住居出土〔北村・高橋1992〕の口径17.6cmの例に匹敵する。8世紀末～9世紀前葉のものとしては、杯蓋362、有台杯372～374、無台杯382などが当たる。9世紀後半～10世紀初頭のものとしては、無台杯385～387がある。口径12.0～13.2cm・器高3.0～3.6cm(器高指数25～27)に収まる。これらの産地は佐渡の小泊産と考えられる。

古代の土師器無台碗は、流路2からやや多く出土している。時期は春日編年Ⅴ～Ⅵ期(9世紀前葉～10世紀初頭)と考えられ、無台碗390・391はその中でも古く、無台碗389・392～403は新しい。土師器の甕や鉢は流路1の中～下層で出土しており、上述の須恵器の年代に近いものとする。

また、所産時期が異なるが流路1の河床から須恵器無蓋高杯のほぼ完形品が出土した。長い脚部には3方の透かしが上下2段に穿たれている。長脚で方形2段透かしの例は、県内では、妙高市万五郎古墳〔新潟県1983〕、塩沢町南山古墳第2号墳〔塩沢町2007〕に類例が見られる。ただ、本遺跡出土例の特徴は、3方2段透かしに加え、器高18.6cm(脚部高14.1cm)と高く、口径10.3cm・裾部径9.8cmとこの高さのものとしては極端に小さい点である。時期としては6世紀後半～7世紀前半頃と幅をもたすが、畿内地方の出土例と比較すると6世紀後半頃に限定できる可能性があるため、今後の検討課題としたい。

墨書土器について

今回の調査では、墨書土器が8点出土した。まず、須恵器無台杯2点に書かれた「継人」について検討する。いずれも底部外面に太字で底面いっぱい書かれている。『新潟県内出土古代文字資料集成』〔小林・戸根・相沢2004〕によれば、上越市寺町遺跡出土の須恵器杯蓋や有台杯など7点に「嶋継」の文字が書かれているという。その他、刈羽村枯木A遺跡出土の須恵器無台杯の底部外面に「継」、見附市大坪I遺跡出土の須恵器無台杯5点の体部外面に「継」、新潟市結七島遺跡出土の須恵器無台杯の底部外面に「継」の文字が見える。このうち、枯木A遺跡、大坪I遺跡、結七島遺跡出土の須恵器無台杯は、本遺跡で「継人」と書かれた須恵器と時期が近い。また、底部内面に「久」と書かれた土師器無台碗が出土した。底部内面に文字が書かれる例は少ないという。周辺では市内横マクリ遺跡からも、「久」が底部内面に書かれた土師器無台碗が出土している〔渡邊ほか2009〕。また、土師器無台碗の体部外面に「天」の字の則天文字(古体漢字)と考えられる文字が書かれていた。〔田中2009〕の集成によれば、県内では、村上市西部遺跡、新潟市牛道遺跡、長岡市岩田遺跡、見附市上田遺跡で見られる。

六反田南遺跡では、今後も墨書土器の出土が予想される。本遺跡の周辺では、現前川を挟んだ東方に隣接する前波南遺跡から「出雲…」などと書かれた木簡も出土しており、将来、「ヌナカワ」に関係した文字資料の発見が期待される。

C 古墳時代前期の石製品について

1) 玉類製作の比較

上層の石器・石製品の組成は玉作に関わるものが多く、ほとんどが古墳時代前期の土器を伴うものである。出土した玉類の成品・未成品は勾玉・管玉・棗玉の三種である。工具として砥石・内磨砥石・敲石・軽石製研磨具が出土している。これらの様相は同じ古墳時代前期の玉作遺跡である南押上遺跡〔小池・水落ほか〕と類似する。製作している玉類も同様なものであることから、ここでは二つの遺跡を比較しながら考えてみたい。

勾玉は蛇紋岩製(415)が一点出土した。南押上遺跡のものは、腹部が一様に半円状を呈するのに対して、本遺跡のものは「コ」字状を呈している。また、比較して薄いことが印象的である。しかし、上下端が丸く収束せず、先端を尖り気味に仕上げている点では共通といえる。勾玉未成品は滑石製(416)が一点出土した。内磨段階のものである。微細な調整剝離と研磨により、半月状の未成品に仕上げることは共通している。しかし、南押上遺跡では背部が必ず半月状に丸く仕上げられるのに対して、416は面が構成される点で異なる。また、出土したヒスイの原石は拇指大程度のもので、これも南押上遺跡に見られたものと同様であるため、勾玉の製作が行われていたことが推測される。

管玉は形割段階(426～428)、側面剝離段階(423～425)、穿孔段階(418～422)、成品(417)が出土している。素材はすべて横長の剝片であり、大きさは南押上遺跡の中型に相当するものが多い。形割～穿孔に至る段階の在り方は共通しているといえる。また、南押上遺跡とともに柏崎市行塚遺跡〔伊藤 1985〕の事例とも近似しているといえる。ただし、南押上遺跡では縦長剝片を用いることもあることから、形割以前の工程は今後の資料の増加とともに検討しなければならない。また、これらの遺跡では418のような滑石を用いた管玉は見られない。

棗玉は穿孔段階(429)のものが一点出土している。茶褐色で軟質な滑石を素材とし、研磨によって多角形に仕上げている。研磨時の擦痕は、管玉が長軸に平行するのに対して、棗玉は横軸に複数方向認められる。上下面は、平行に仕上げられ両面穿孔が施される。この点においてはいずれも南押上遺跡の事例にも認めることができ、製作の在り方は共通しているといえる。棗玉未成品の出土例は非常に希少で、今後の資料の増加とともに検討していかなければならない。

2) 玉類製作の工具について

内磨砥石はすべて流路1からの出土で、古墳時代前期の玉作に伴うものかは判然としていないが、形態は南押上遺跡や横マクリ遺跡出土のものと類似している。また、擦痕は長軸に対し平行したものが多く、この特徴は勾玉の製作したものに認められるものである〔寺村 1969〕。この特徴を持つ内磨砥石は、本調査範囲では6点出土している。しかし、本調査範囲では、勾玉は2点しか出土しておらず、割合は合わない。このことから、近隣に勾玉製作遺跡の存在が示唆される。また、419や429の破損面に見られる穿孔時の回転痕は直線的であり、擦痕も明瞭ではない。このことから、穿孔にはすべて鉄針を用いられたものと考えられる。ただし418の1点のみ孔径が大きく、断面形状が尖頭形なことから、石針による穿孔とも考えられる。

ここまで、玉類と工具を比較しながら概観してきたが、製作の在り方はいずれも南押上遺跡と共通しているといえる。ただし、南押上遺跡では堅穴建物を中心に玉作を行っていたが、本遺跡ではその傾向はう

かがえない。むしろ、本遺跡の玉作関係資料の出土傾向は、溝に伴うことが多い。周辺に大規模な製作跡が存在する、もしくは小規模な製作跡が点在すると考えられる。

D 木 製 品

1) 六反田南遺跡Ⅲの出土木製品の概観と年代

今回の調査では、流路1を中心に、農具の柄・「大足」、工具のへら、容器の皿・槽・曲物、器具の腰掛け・脚部、祭祀具の斎串・人形・舟形・刀形・竿、漁撈具の浮子、舟の部材など多種多様な木製品が出土した。

円形曲物は平成19年度出土のものと合わせると70点を数える。これらは、①出土層位に主体的に伴う土器や周辺遺跡での事例から、その多くが8～9世紀の所産と考えられる。②底板の直径は、9～32cmのものがあるが、多くが10～13cm前後と16～18cm前後に集中する。③19点の側板の高さは15～6cmほどで、2～3cm前後と4～6cm前後に大きく分けられる。④側板を樺皮紐で綴り合わせる方法が多様であるなどの特徴が挙げられる。

槽は平成19年度出土のものと合わせると19点を数える。断片資料が多いが、長さが1m以上の大型のものが7点ほど認められる。また、脚付きのものが1点もないことから、出土層位に主体的に伴う土器や周辺遺跡での事例から、その多くが8～9世紀の所産としたい。

前年度の調査と同様に、今年度の調査でも大型の槽や曲物といった容器類と建築部材が比較的多く出土した一方、農具や祭祀具は少なかった。年代的には古代のものが多く、舟形など一部が古墳時代のものと考えられる。

2) 古代の「大足」について

今回の調査では、流路1から農具の「大足」の縦木が1点出土した。残存する長さは43cm、幅6.5cm、厚さ2.0cmを測る。また、一辺1.8×2.8cmほどの長方形を呈する柄穴が4個以上、9～10cmの間隔で穿たれている。古墳時代から平安時代の「大足」の縦木は、長さ95～65cmほどで、柄穴は17～10個、4～12cmのほぼ等間隔で穿たれている。ただし、柄穴の間隔9～10cm前後に注目すると、8～9世紀頃のものに多く、この時期のものは長さが90cm前後、柄穴は11～10個に収まる。本遺跡出土例も長さ90cm前後、柄穴が10個であったと推測され、所産時期は主体的に出土した須恵器の年代から8～9世紀代のものと考えられる。

8～9世紀頃の主な出土例としては、神奈川県小田原市千代南原遺跡〔小池ほか2000〕、静岡県静岡市池ヶ谷遺跡〔足立ほか1995〕、千葉県君津市三直中郷遺跡〔大谷2002〕、大阪府東大阪市友井東遺跡〔奈良国立文化財研究所1993〕、愛知県豊田市千石遺跡〔豊田市教育委員会2009〕出土例があり、県内では長岡市八幡林遺跡〔高橋ほか1994〕から縦木が出土している。これらの縦木の長さは82～95cmで、縦木の柄穴は10～11個、柄穴間は8～11cmほどに収まる。

糸魚川市域では、用途が同じと考えられる「大足」が昭和時代の前半頃まで使用されていた。現在、市内では能生歴史民俗資料館、木地屋民俗資料館、塩の道資料館で複数収蔵されている。今後の課題としては、民俗資料の中に、より古い形態をつきとめ、それと古代の出土例との形態的比較を行いたい。

E 構 築 部 材

近年、新潟県内でも、沖積地における発掘調査が実施され始めたことで、木製品の出土例が増加し、その内容も多種多様なものとなっている。今回の調査でも、『六反田南遺跡Ⅱ』と同様に多くの木製品が出土した。本稿では主に、本遺跡の特色の1つともいえる構築部材と、その木材利用の傾向について見ることにする。

1) 新潟県内出土建築部材について

建物が破棄されても、それに使用された建築部材は、使用に耐えるものであれば再利用されることが多かったと考えられる。また、再利用の際に二次加工されて、使用目的が異なるものへ転用されたものは、本来の用途を想定することが容易でないこともある。そのため、柱穴内に遺存する柱根や礎盤を除く構築部材の出土例は、全国的に見ても流路跡等からの出土が大半を占めている。

新潟県内における出土建築部材は、[荒川 2005] が集成を行っている。それによると近年、沖積地での調査件数が増加するまで、2005年時点での県内における建築材出土例は、柱穴内出土の柱根が主であり、仕口加工を施した大型部材の出土例はごくわずかで、その種類も限られていた。

まず、縄文時代における主な構築材の出土は、柱根がもっとも多く、仕口を確認できるものは出土していない。糸魚川市寺地遺跡 [寺村ほか1987] では晩期の杉材の柱根が出土し、下端部に溝状加工を施されていた。同様のものは、加治川村青田遺跡 [荒川ほか2004] からも出土している。青田遺跡では掘立柱建物のもと考えられる柱根が458点出土しており、下端部に溝状加工を施すものは7%を占める。また、洪水によって流され、ほぼ原形に近い状態で川岸に埋没したと考えられる掘立柱建物の草壁材が出土しており、当時の上屋構造の一端をうかがい知ることができる。

弥生時代から古墳時代の遺跡は、県内では佐渡島に多く確認されている。千種遺跡からは多量の木製品とともに建築材と思われる貫穴を施した板材や切り欠きを施されたと思われる材が出土しているが、明確ではない [本間ほか1953]。佐渡市蔵王遺跡で検出された掘立柱建物には、木柱と枕木が組まれたものや、枕木と腕木を組んで木柱を設置したのがあり、貫穴を有する腕木は再利用されたものと見られる [小川1998]。佐渡市竹田沖条里遺跡からも貫穴を有する材が出土しており、貫穴には棒材が差し込まれた状態のものが認められた [本間ほか1978]。長岡市大武遺跡からは、貫穴のある材が大型土坑内からまとめて出土した [春日1999]。

古代以降では、新潟県内の沖積地での調査件数が増加するなかで、糸魚川地域の山岸遺跡 [飯坂2009]、本遺跡、竹花遺跡 [加藤2009] から多くの構築材が出土した。山岸遺跡は中世の居館跡から柱根とともに網代が出土しており、報告書の刊行が待たれる。また、前波南遺跡でも平成18年度調査で網代が出土している [春日ほか2008]。仕口が施された構築部材の出土は、本遺跡が最も多く多様である。これらは出土層位に主体的に伴う土器の年代から8世紀～9世紀の所産と思われる。

2) 六反田南遺跡出土の構築部材について

六反田南遺跡出土の構築部材は比較的遺存状態の良いものが多く見られたが、流路からの出土であることから、検出した建物遺構との組合せ関係などは不明である。しかしながら、上述のように出土した部材の中には、平成19年度調査からは扉を用いた開口部を構成する部材の楣、高床建物の床材を支える大引、

屋根を支える部材のサス材などがあり、今回の調査では梯子(545)・壁板(538・539)・破風材(535)などの建物内での特定部位を想定できる部材が出土した。なかでも壁板(538・539)は大きさから正倉級の建物の壁板に用いられたと思われるもので、表面は丁寧に仕上げられており、2点を合わせた長さは240cm以上・幅26.5cm・厚さは4.9cmと厚く、柱の溝に落とし込むために端部は薄く加工している(横はめ板方式)。

板倉は現存の正倉院中倉にも見られる方式で、奈良時代から平安時代に盛行した。主に不動倉・穀倉として用いられ、和泉監正税帳では正倉37例中の12例、越中国交替帳では59例中29例、上野国交替帳では152例中61例が「板倉」であり、「屋」を除外すると正倉のほとんどが「板倉」であった[富山博2004]。

また、(557)のように、建築部材ではないが大型の柵材と想定される部材で、横架材を組むための切り欠きが2段加工されているものも出土している。

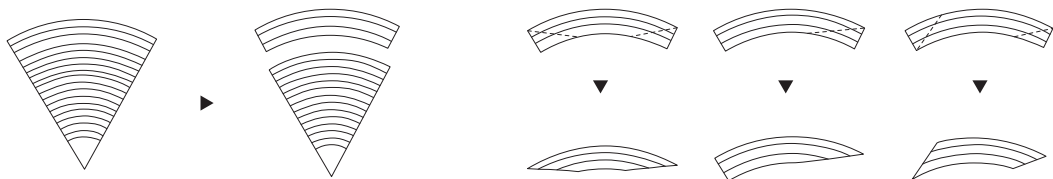
このほかにも各説で述べたように、本遺跡からは、新潟県内ではこれまでにない多様な仕口加工を施された部材が出土している。これらを用いた高床式建物や、大型の柵などの施設が本遺跡内もしくは近辺に存在したことをうかがい知ることができよう。さらにその遺跡の性格を検討する上でも重要であろう。今後の調査が進む中で、本遺跡から正倉級の古代の総柱掘立柱建物等が検出されることも充分あり得る。また(531)のように両端部が残った横架材は、多数の柱穴群から掘立柱建物を復元する際に柱間寸法を考える上で有効であろう。

本遺跡出土の構築部材を見る中で、板目の板材の中に、割り製材後に木裏の両側縁部を削ったもの、片側縁部を削ったもの、木表の側縁部を削ったものが認められた。これは各説の項でも述べたように、丸太材をミカン割りにしたものを、木目に沿って割り剥がし、湾曲した面を平滑にするために側縁部分をチョウナで削ったためであり、板材の作成方法として一般的であるという[望月1996]。本遺跡出土の板材でこの湾曲調整=厚さ調整を施すものは、水平構造材に多く、次に述べるように樹木の径が50～60cmのものを用いたと思われる木材に多く見受けられる。

1.ミカン割材

2.木目に沿って割り剥がす

1.割り剥がしたものを板に加工



第15図 板材の加工過程模式図 [望月1996から転載]

3) 木材利用の傾向

ここでは、今回の調査で出土した木製品だけでなく、『六反田南遺跡Ⅱ』出土の木製品のデータを合わせて、本遺跡における用材について見ることにする。

まず使用木材の9割以上をスギ材が占めている。これは、近隣の遺跡でも同様であり、糸魚川地域一帯はスギ林が優勢で近辺でも調達し易かったためであろう。ほかに一部クリ、カバノキ属、ブナ属、トチノキ、ケヤキといった広葉樹が使用されており、これらは主に漆器椀などに用いられた。

ところで、前述したように、今年度の調査では1,000点以上の木製品が出土した。したがって、これまでの本遺跡出土の木製品の総数は、2,000点以上にのぼることになる。それらのうち、図示した木製品に

加えて、材の幅・厚みが残存している約400点の木材について法量を計測した。これは、平成19年度調査分も同様で、ほぼ同量の木製品を計測し報告した。この法量を計測した木材には、構築部材と思われる大型加工材だけでなく、小型の板材、角材なども含まれている。

六反田南遺跡における、木材の利用傾向を求めるために、木取り別に利用部位の樹木径と成品幅をグラフ化したものが第16・17図のグラフである。各木材の樹木利用部径は、透明なプラスチック板に2.5cm間隔の同心円をひいたものを資料の小口に見える年輪を重ねて計測した。

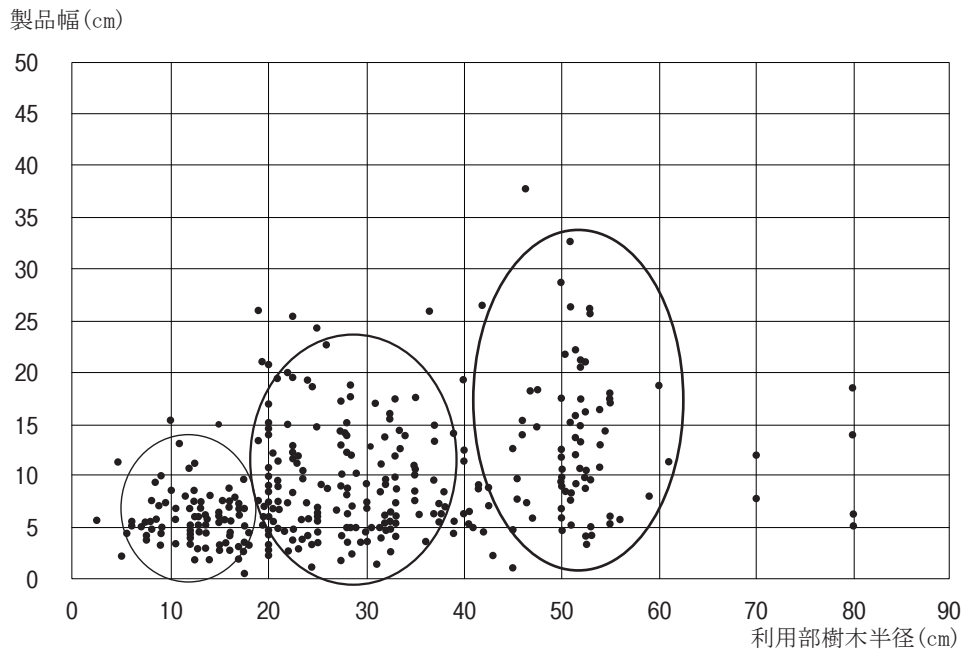
板目材では直径1m前後の部位を用いた一群と、直径40～78cmの部位を用いた一群、直径36cm以下の部位を用いた一群とに大別できる。これは、幅20cm前後の板材が両群に見受けられることから、材の大きさによって利用部位を使い分けしているためではないことを示している。むしろ、割り製材が主であったため、板目材という木取りの性質上、幅が必要な板を得るには樹木の辺部を用いざるを得ず、板目材の推定利用部位は利用木材の推定直径に近いものであったと推測する。特殊な部材を除けば幅20cm以下の材で必要要件を満たすため、大径木が枯渇したとしても必要に迫られれば、直径7cm以下の樹木で代用できる。そのため、割り製材後に年輪界による板材の湾曲に調整を加えたと思われる材も多く見受けられる。法量の差異は調達できた樹木径の差異を意味しているものと考えたい。

柾目材は、歪みを少なく製材できることから用いられてきたが、板目材と比べると出土時に縦割れして本来の形状を損なっていることが多い。そのため、サンプル数は少なくなったが、ここにも先と同様の傾向が認められ、明らかに利用部径を3群に大別できる。

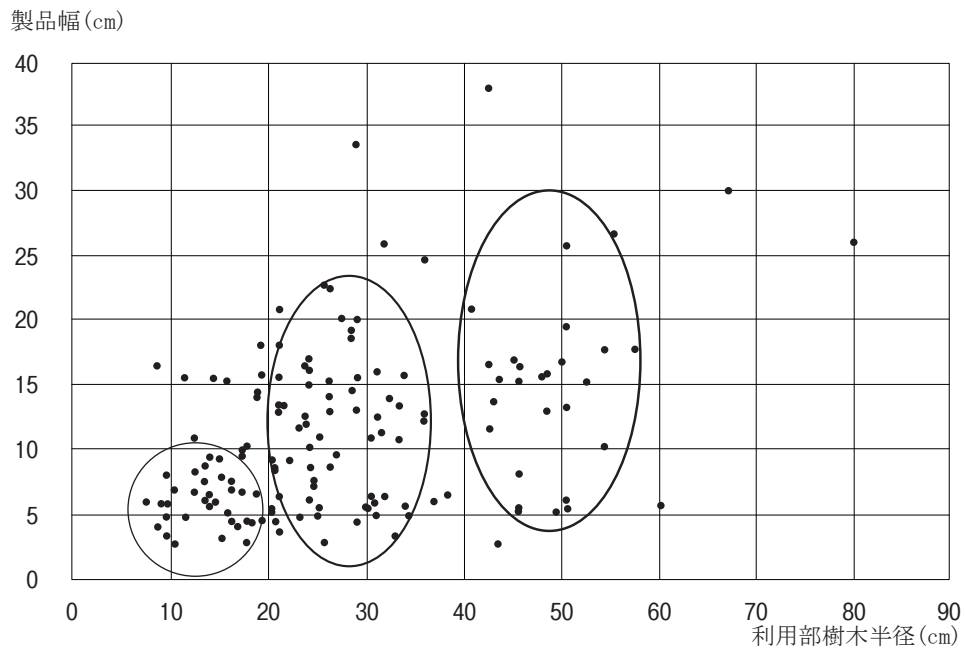
また、使用されたスギは、古墳時代では直径1.5m前後のものが利用され、槽や板材に用いられている。これは当時、縦引き鋸が存在しなかったために製材が割製材のみであったことに起因する。木目に沿って楔を打ち込み割り裂いて板材を得るこの方法は、樹木の歪み・節の有無によって板材の出来上がりが大きく左右される。つまり、幅広で調整の必要がない板材を作るには、直径1.5m以上の樹木の辺部を利用せざるを得なかったと考えられる。

古代の材木を見たところ、推定直径50～60cmのものが多くなり、上述の厚さ調整を加えるものが増加する。このことは、古代には古墳時代に見られたような大木が近辺からの調達が困難になっていたためと推測できる。また、樹木が小さくなるということは、1本の木からの製材量が少なくなり、必要量を製材するために樹木の伐採量が増加したであろうことが推測される。さらに1本当たりの製材量の変化からは、集落内における住居等の建物の立て替えの在り方が浮かび上がってくる。随時、必要に応じて立て替えがなされていた可能性と、数棟を一斉に建て替えた可能性がある [山田2005]。

以上、六反田南遺跡における木材利用の傾向について記した。基本的には『六反田南遺跡Ⅱ』で報告したものと大きな変化はないが、本遺跡内における木材利用の傾向を再確認することができたものと考えられる。今後も資料が増加するにつれ、さらに新たな視点から木製品について検討する必要がある。



第 16 図 板目材樹木利用部径



第 17 図 柱目材樹木利用部径

3 総 括

平成 20 年度は一般国道 8 号糸魚川東バイパス建設用地内で 3 か所の調査を行った。縄文時代の調査では KF 区で自然流路を検出し、流路内やその周辺から中期前葉の土器や磨製石斧やその未成品などが出土した。六反田南遺跡Ⅱで検出した竪穴住居などからなる集落域からは東に 200m 離れたところにあるが、縄文時代中期の低地遺跡の広がりを示す、好資料といえよう。土器は六反田南遺跡Ⅱと同様に、時期は中期前葉～中葉で、北陸系の新保・新崎式や上山田・天神山式が主体をなしている。石器も同様に磨製石斧とその未成品が定量認められる。平成 21 年度には KC 区を含む KD 区において縄文時代の調査が行われ、土器廃棄場と思われる一帯から多量の遺物が出土しているという [山本 2010a]。整理作業の進展による新たな所見が期待される。

上層の調査では、古墳時代前期の溝や土坑、古代の掘立柱建物、古墳時代から古代の土器や木製品を多く出土した自然流路などを検出した。その中で、平成 18～20 年度の調査により、古墳時代前期の集落の様相がおぼろげながら見えてきた。古墳時代前期の土器を出土する遺構のある範囲は、25～39A～G の範囲、西側は流路 1 を、東側は平成 18・20 年度検出の SD201、南側は平成 19 年度検出の SD510 に画された範囲に、周溝付き平地式建物（平成 18 年度調査 SD196・SD200）や土器が多く廃棄された土坑（平成 20 年度調査 SK575）、長短の細長い溝（平成 19 年度 D 区検出の溝）や各調査区で見られる不形成の土坑や溝が古墳時代前期前半から中ごろにかけて作られたようである。古墳時代前期集落の規模は、今回調査対象範囲に限ると、約 6,000 m²となる。一方で、SD201 と SD510 の南側では、古墳時代前期をはじめ、それ以後の遺構、遺物がほとんど見られないため、長く湿地帯や水田地帯であったと考えられる。

糸魚川地域では、ここ数年の間に北陸新幹線建設、一般国道 8 号糸魚川東バイパス建設に伴う調査が沖積地を対象に行われ、多くの遺跡から古墳時代前期の遺物を含む遺構が検出されている。本遺跡の近くでは、東方約 1 km にある横マクリ遺跡から 8～9 期頃の土器が出土する土器集中遺構が検出された [渡邊^{ほか} 2008]。また、海川を挟んだ西方 1.5 km にある南押上遺跡からは、玉作が行われた竪穴住居などが検出された [小池 2009]。さらにその南西 0.7 km には学史上著名な笛吹田遺跡がある。一方、本遺跡から西南西 2 km にある姫御前遺跡からは周溝が不形成で途切れるタイプの平地式建物を検出 [加藤 2009]、同じく西南西 2.3 km にある竹花遺跡からは、畦畔芯材として当時の建築部材や鍬・鋤が用いられていた [加藤 2009]。

古墳時代前期の六反田南遺跡は、笛吹田遺跡や南押上遺跡を拠点集落とするなら、周辺の小規模集落といえるかもしれない。小規模集落として、どのように拠点集落と関係するのか、今後のさらなる遺構、遺物の検出と、それらの分析を通して明らかにすることが今後の課題といえよう。

古代では、自然流路を中心として 7 世紀末頃から 10 世紀初頭頃までの土器が定量出土した。ただ、SB1 や SB5 などの建物がどの土器の時期かは明らかにできなかった。周辺遺跡の項で触れたように、海川右岸の台地上に位置し、南方 1.4 km にある岩野下遺跡、同じく南方 1.3 km にある岩野 A 遺跡、南東 1.2 km にある小出越遺跡や、南東 0.3 km にある山崎 A 遺跡には時期の重なる土器があることから、これらの遺跡と密接な関係にあったと推測される。

要 約

- 1 六反田南遺跡は新潟県糸魚川市大字大和川に所在する。遺跡は海川右岸の沖積地に立地し、現況は宅地、水田であった。遺跡の標高は2.6～5.0mを測る。
- 2 発掘調査は一般国道8号糸魚川東バイパスの建設に伴い、平成20年4月1日から11月13日にかけて実施した。調査面積は3,964㎡である。本報告書は、六反田南遺跡の3冊目であり、調査によって、縄文時代から中世の遺物とそれらが出土する遺構、自然流路を検出した。
- 3 縄文時代中期は遺構が存在しなかったが、自然流路や包含層から中期初頭～中葉の土器、土製品、石器、石製品が出土した。土器は北陸系の新保・新崎式、上山田・天神山式、東北系、関東系などが出土した。また、粗製土器とされる縄文施文主体の土器も定量出土した。
- 4 縄文時代の石器は、打製石斧・磨製石斧・剝片・敲石・磨石が出土した。これまでの調査から、水場と磨製石斧製作の関連が示唆される。
- 5 弥生時代以降の遺構は掘立柱建物4棟、土坑16基、溝40条などを検出した。そのうちの掘立柱建物2棟は長軸が南北方向にある桁行3間、梁間2間の建物で、梁間の中央の柱穴がわずかに外側に出ていることから、近接棟持建物〔宮本2002〕に分類される。
- 6 遺物は土器、陶磁器、土製品、石器、石製品、木製品が出土した。弥生時代から古墳時代の土器は弥生時代中～後期、古墳時代前～後期のものが出土したが、特に古墳時代前期の土器が不成形の土坑や溝からやや多く出土した。古代の土器は自然流路から8～10世紀代のものが出土した。また、墨書土器が8点出土し、「継人」「久」と書かれたものや渦巻模様が描かれたものなどがある。
- 7 古墳時代のものと考えられる石製品は、蛇紋岩製の勾玉や管玉、砥石・内磨砥石・敲石等が出土した。そのうち管玉は形割段階・側面剝離段階・穿孔段階・成品が出土した。
- 8 木製品は流路1を中心として、古墳時代から古代の農具の柄・「大足」・工具のへら、容器の皿・槽・曲物、器具の腰掛け・脚部、祭祀具の斎串・人形・舟形・刀形・竿、漁撈具の浮子、舟の部材、建築部材など多く出土した。
- 9 建築部材は2か年の調査から楣・大引・サス材・梯子・壁板・破風材などの特定部位を想定できる部材が出土した。なかでも壁材は正倉級の建物に使われた可能性がある。
- 10 木製品の使用樹種の9割以上をスギ材が占めるが、古墳時代では直径1.5m前後、古代では直径50～60cm前後のものが多く利用されたのではないかと考えられる。

引用・参考文献

- 青木重孝 1966 『青海－その生活と発展－』青海町役場
- 青木重孝 1976 『糸魚川市史』1 糸魚川市教育委員会
- 足立順同^{ほか} 1995 『池ヶ谷遺跡』(遺物編)財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 阿部朝衛 1984 「多面体を呈する敲石について」『豊栄市史研究第2号』豊栄市教育委員会
- 荒川隆史 2005 「新潟県の概要」『出土建築材資料集－縄文・弥生・古墳時代－』第一分冊 小矢部市教育委員会
- 荒川隆史^{ほか} 2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第133集 青田遺跡』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯坂盛泰 2009 「山岸遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成20年度』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 糸魚川市史編纂委員会 1986 『糸魚川市史 資料集1 考古編』糸魚川市教育委員会
- 伊藤恒彦 1985 「行塚遺跡出土の玉造り関連遺物について」『柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第4 吉井遺跡群』柏崎市教育委員会
- 遠藤孝司^{ほか} 1987 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第46集 岩野下遺跡』新潟県教育委員会
- 大谷弘幸 2002 「第3章 木製農具の変遷と若干の問題」『千葉県文化財センター研究紀要』23 財団法人千葉県文化財センター
- 小川忠明 1998 「新穂村蔵王古墳集落遺跡」『新潟県考古学会代10回研究発表・調査報告等要旨』新潟県考古学会
- 小矢部市教育委員会 2005 『出土建築材資料集－縄文・弥生・古墳時代－』第一分冊小矢部市教育委員会
- 春日真実・小池邦明・品田高志 1996「新潟県」『古代の木製食器』埋蔵文化財研究会
- 春日真実 1997 「越後・佐渡における9世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1998 「西頸城地域における古代土器様相」『研究紀要』第2号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 「第4章 古代 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』高志書院
- 春日真実 2006 「越後における7世紀の土器編年」『新潟考古』第17号 新潟県考古学会
- 春日真実^{ほか} 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第202集 六反田南遺跡・前波南遺跡』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2009 「越後における古代掘立柱建物」『新潟県考古学Ⅱ』新潟県考古学会
- 加藤 学 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第173集 大角地遺跡』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2009 「姫御前遺跡Ⅱ」『竹花遺跡』『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成20年度』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤三千雄 2008 「新保・新崎式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 木島 勉 1989 『糸魚川市埋蔵文化財調査報告書 16 立ノ内遺跡・山崎三十三塚』糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 2008 「糸魚川市山崎 A 遺跡－平成18・19年度の調査－」『新潟県考古学会第20回大会発表要旨』新潟県考古学会
- 北村 亮・高橋 保 1992 「第Ⅵ章 遺物 1 古代の土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第28集 木崎山遺跡』新潟県教育委員会
- 桑原 健 2008 「第Ⅴ章 内磨砥石の分類」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第188集 横マクリ遺跡』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池勝典 2009 「南押上遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成20年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池勝典・水落雅明^{ほか} 2011 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第220集 南押上遺跡』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池 聡^{ほか} 2000 『神奈川県小田原市千代南原遺跡Ⅶ地点』小田原市千代南原遺跡Ⅶ地点発掘調査団

引用・参考文献

- 小島俊彰 2008 「上山田・天神山式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 坂井秀弥 1982 『栗原遺跡(第4次・第5次調査概報)』新潟県教育委員会 新井市教育委員会
- 坂本太郎・平野邦雄 1990 『日本古代氏族人名事典』吉川弘文館
- 佐藤友子^{ほか} 2009 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第205集 田伏山崎遺跡』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤雅一^{ほか} 2005 『津南町文化財調査報告第47輯 道尻手遺跡』津南町教育委員会
- 塩 沢 町 1997 「第四章 山里に出現した地方豪族」『塩沢町史 資料編』上巻
- 志田諄一 1985 『古代氏族の性格と伝承』雄山閣
- 鈴木郁夫 2000 「I 概説1 地形概説」『新潟県地質図説明書(2000年度版)』新潟県商工振興課
- 鈴木俊成・高橋昌也 1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第54集 鰐口下遺跡・美山遺跡』新潟県教育委員会
- 鈴木俊成^{ほか} 1988 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第51集 小出越遺跡』新潟県教育委員会
- 千家和比古・山本 肇 1979 「第五章 西角地古窯跡」『大角地遺跡－飾玉とヒスイの工房址－』青海町教育委員会
- 高橋 保 1988 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第49集 立ノ内遺跡』新潟県教育委員会
- 高橋 保・小池義人^{ほか} 1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告 第45集 中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡』新潟県教育委員会
- 高橋 保^{ほか} 1994 『和島村埋蔵文化財調査報告書第3集 八幡林遺跡』新潟県和島村教育委員会
- 滝沢規朗 2005a 「越後・佐渡における弥生時代後期～古墳時代前期の「く」字甕について」『三面川流域の考古学』第4号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2005b 「土器の分類と変遷－いわゆる北陸系を中心に－」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第1分冊 新潟県考古学会
- 竹内理三^{ほか} 1989 『角川日本地名大辞典15 新潟県』角川書店
- 田中一穂 2009 「則天文字「天」墨書土器の再検討－西部遺跡出土墨書土器の前提的考察－」『新潟考古』第20号 新潟県考古学会
- 茶谷 満 2005 「第2章 青谷上寺地遺跡出土の木製容器 第2節器種の構成と分類」『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告8 青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告1 木製容器・かご』鳥取県埋蔵文化財センター
- 辻 範朗 2006 「須沢角地遺跡」『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成16年度』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土田孝雄 1986 「道者ハバ遺跡」『糸魚川市史 資料集1 考古編』糸魚川市教育委員会
- 土田孝雄・小池義人^{ほか} 1988 『須沢角地A遺跡発掘調査報告書』青海町教育委員会
- 寺崎裕助^{ほか} 1988 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第50集 原山遺跡 大塚遺跡』新潟県教育委員会
- 寺崎裕助・水落雅明 2009 「糸魚川六反田遺跡の縄文時代遺跡」『新潟考古』第20号 新潟県考古学会
- 寺崎裕助 2009 「新潟県における新崎式系土器－縄文時代中期初頭後半から前葉の編年と型式－」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会
- 寺崎裕助 2010 「和泉A遺跡における縄文時代中期初頭の土器(1)」『新潟考古』第21号 新潟県考古学会
- 寺村光晴 1966 『古代玉作の研究』吉川弘文館
- 寺村光晴 1969 『勾玉の故郷 はまやま』富山県教育委員会・朝日村教育委員会
- 寺村光晴^{ほか} 1987 『史跡寺地遺跡』青海町教育委員会
- 富山 博 2004 「第3章 正倉の構造とその変遷 三 板倉」『日本古代正倉建築の研究』財団法人法政大学出版局
- 豊田市教育委員会 2009 「千石遺跡 ②水田で使う大足が出土」『豊田市 報道発表資料』
- 長澤展生 2009 「新潟県の前期末葉～中期初頭の土器について」『第22回縄文セミナー 縄文中期前半の再検討』縄文セミナーの会
- 奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始編』
- 新 潟 県 1983 『新潟県史 資料編』1(原始・古代一 考古編)
- 新潟県西頸城郡教育委員会 1972 『西頸城郡誌』新潟県西頸城郡教育委員会
- 細井佳浩 2006 「第Ⅶ章 まとめ B 木製農具大足について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第166集 土居下遺跡』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 細井佳浩 2007 「木製農具「大足」について」『新潟考古学談話会会報』第32号 新潟考古学談話会
- 細井佳浩^{ほか} 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第211集 六反田南遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 本間嘉博^{ほか} 1953 『新潟県文化財報告書 第一(考古)千種』新潟県教育委員会
- 本間嘉博^{ほか} 1978 『竹田沖条里』畑野町教育委員会
- 水落雅明 2010 「第Ⅳ章-2-C 石器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第211集 六反田南遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 宮本長二郎 1996 「高床建築の種類と形式」『日本原始古代の住居建築』
- 宮本長二郎 2002 「古代末から中世の住居建築」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要 第16号』秋田県埋蔵文化財センター
- 宮本長二郎 2007 『出土建築部材が解く古代建築』(日本の美術)No.490 至文堂
- 望月精司^{ほか} 1999 『林タカヤマ窯跡』小松市教育委員会
- 望月由佳子 1996 「第Ⅵ章 まとめ・補遺 第1節 建築材について」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第79集 瀬名遺跡Ⅴ(遺物編Ⅱ)』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 山岸洋一 2006 『糸魚川市埋蔵文化財調査報告書53 平成17年度笛吹田遺跡発掘調査概要報告書』糸魚川市教育委員会
- 山崎忠良^{ほか} 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第201集 延命寺遺跡』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山田昌久 2004 『桜町遺跡シンポジウム 考古資料から建築材・建築技術を考える』記録集 桜町遺跡発掘調査団
- 山本友紀 2010a 「六反田南遺跡Ⅳ(下層)」『埋文にいがた』No.70 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山本友紀 2010b 「第Ⅳ章下層の調査 2遺物 A土器」『第Ⅶ章まとめ 1縄文時代 B土器』『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第211集 六反田南遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 渡邊裕之^{ほか} 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第188集 横マクリ遺跡』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

遺構観察表

遺構計測表（掘立柱建物）

遺構番号	位置	方位		間数		面積(m ²)	桁行(m)	梁間(m)	
SB1	38B・39B・39C	N-6°-W		2間×3間		39.8m ²	7.8	5.1	
	柱穴	柱根	平面形	平面規模(cm)	断面形	深さ(cm)	底面標高(m)	柱間(cm)	
	P165	無	隅丸方形	86×76	台形状	51	4.56	P165-P166	2.52
	P166	無	隅丸長方形	90×55	台形状	52	4.59	P166-P167	2.55
	P167	無	隅丸方形	75×72	台形状	42	4.7	P167-P168	2.50
	P168	無	楕円形	65×35	台形状	39	4.81	P168-P169	2.65
	P169	無	隅丸長方形	90×79	台形状	48	4.68	P169-P170	2.46
	P170	無	隅丸方形	74×63	台形状	50	4.67	P170-P171	2.44
	P171	無	隅丸長方形	89×63	台形状	33	4.71	P171-P429	2.60
	P429	無	楕円形	83×78	台形状	51	4.49	P429-P442	2.45
P442	無	楕円状	40×34	台形状	20	4.74	P442-P437	2.50	
P437	無	楕円形	88×76	台形状	35	4.53	P437-P165	2.70	
遺構番号	位置	方位		間数		面積(m ²)	桁行(m)	梁間(m)	
SB3	38C・39C	N-62°-W		1間×4間?		43.5m ²	8.12	5.36	
	柱穴	柱根	平面形	平面規模(cm)	断面形	深さ(cm)	底面標高(m)	柱間(cm)	
	P422	無	円形	52×47	台形状	23	4.77	P422-P421	208
	P421	無	楕円形	58×52	階段状	42	4.59	P421-P419	214
	P419	有	楕円形	70×56	階段状	40	4.57	P419-P420	204
	P420	有	隅丸方形	53×50	階段状	21	4.73	P420-P475	(190)
	P475	—	—	—	—	—	—	P475-P430	(536)
	P430	無	楕円形	55×45	台形状	11	4.73	P430-P426	206
	P426	無	楕円形	63×38	台形状	11	4.8	P426-P423	202
	P423	有	楕円形	6×46	箱状	30	4.7		
遺構番号	位置	方位		間数		面積(m ²)	桁行(m)	梁間(m)	
SB4	38D・39D	N-38.5°-E		1間?×3間		7.4m ²	4.5	1.64	
	柱穴	柱根	平面形	平面規模(cm)	断面形	深さ(cm)	底面標高(m)	柱間(cm)	
	P410	無	円形	24×23	階段状	15	4.7	P410-P405	164
	P405	無	楕円形	36×27	階段状	16	4.63	P405-P413	126
	P413	無	楕円形	26×21	台形状	14	4.63	P413-P402	172
	P402	無	楕円形	48×38	台形状	5	4.61	P402-P416	150
	P416	無	楕円形	38×33	台形状	19	4.56		
遺構番号	位置	方位		間数		面積(m ²)	桁行(m)	梁間(m)	
SB5	36D・37C・37D	N-4°-E		2間×3間		36.2m ²	7.7	4.7	
	柱穴	柱根	平面形	平面規模(cm)	断面形	深さ(cm)	底面標高(m)	柱間(cm)	
	37CP17	無	長方形	50×40	U字状	48	4.54	37CP17-37DP5	2.68
	37DP5	無	方形	56×52	台形状	56	4.54	37DP5-37DP17	2.48
	37DP17	無	方形	68×62	U字状	53	4.51	37DP17-37DP21	2.58
	37DP21	無	楕円形	86×54	袋状	54	4.50	37DP21-37DP23	2.24
	37DP23	無	円形	38×36	U字状	46	4.56	37DP23-P563	2.50
	P563	無	楕円形	118×78	階段状	76	4.23	P563-37DP20	2.30
	37DP20	無	円形	94×92	階段状	46	4.52	37DP20-37DP18	2.90
	37DP18	無	楕円形	69×52	台形状	50	4.51	37DP18-37DP1	2.48
	37DP1	無	長方形	106×70	階段状	39	4.65	37DP1-37CP16	2.38
37CP16	無	方形	38×38	箱状	36	4.71			

遺構計測表（溝）

遺構番号	調査区	位置	断面形	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	方位	底面標高(m)	流下方向
SD201	KF	26D24-26F3	弧状	13.84以上	328~512	32~59	N-62°-E/ N-43°-E/ N-17°-E	4.05~4.43	南西→北東
SD441	KC	39B22-39C8	台形状・凸凹状	4.36	68~106	49~56	N-20°-W	4.33~4.5	
SD445	KC	39B22-39C17	台形状 / 弧状	6.86	5~140	13~20	N-21°-E/ N-42°-W	4.74~4.79	
SD452	KC	39C6-8・11-13	台形状	2.72	86~112	24	N-87°-W	4.65	
SD501	KF	26C6-18	階段状	4.2以上	214以上	6~15	N-0° / N-50°-W	4.55~4.64	
SD551a	KF	26D24・25	不明	1.00以上	23~30	3	N-55°-E	4.66	
SD551b	KF	26D24・26E3-11	弧状	8.2	32~61	4~6	N-52°-E	4.54~4.7	南西→北東
SD552	KF	25E20・25・26E16・21	弧状	1.84以上	56~200	10	N-80°-E	4.49	
SD556	KD	36C13・14	半円形	2.3	18~26	7~8	N-77°-W	4.98~5.00	西→東
SD557	KD	36B25・36C5	弧状	1.47以上	74~114	17	N-48°-E	4.91	
SD560	KD	37C18	V字状	1.42	18~24	5	N-74°-W	5.01~5.02	西→東
SD561	KD	37C12	弧状	1.06	18	4~9	N-82°-W	5.03~5.04	西→東
SD562	KD	36C7-8・12-13	弧状	1.34以上	74	13	N-51°-W	4.92	
SD564	KD	36C24・36D3-5	弧状	3.9	48~70	11	N-3°-W/ N-86°-E/ N-10°-E	4.95	
SD565	KD	36D4・8・9・13・14	弧状	2.87	66~90	2	N-17°-E	4.82	
SD567	KD	36E9・10・14・15	弧状	2.92	62~86	6~8	N-49°-W/ N-79°-W	4.92~4.96	南東→北西
SD568	KD	36E20	弧状	1.46	46	15	N-2°-E	4.86	
SD571	KD	36E19・18	弧状	1.58	48~57	7~9	N-58°-E	4.92~4.94	南西→北東

遺構観察表

遺構番号	調査区	位置	断面形	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	方位	底面標高(m)	流下方向
SD572	KD	36D18・23・37E3・4	半円形	3.54	18~52	14~20	N-21°-W	4.84~4.91	南東→北西
SD576	KD	37D3・4・8・9・13・14・18・19・23・24	弧状	9.74以上	108~388	16~34	N-2°-W/ N-60°-E	4.71~4.89	北→南
SD576b	KD	37D24・37E3・4	台形状	2.24	78~86	14	N-14°-E	4.89	
SD576c	KD	37E8・9・13・14・18・19・23・24	階段状	7.4以上	114~220以上	16~25	N-21°-W/ N-62°-E	4.75~4.87	北→南
SD578	KD	36F9・10・15	弧状	2.18	74~88	11	N-40°-W	4.88	
SD579	KD	37F7・8・12・13	階段状	3.08以上	67~230	11	N-57°-W	4.72	
SD580	KD	36F5・10・37F1	台形状	1.82	12~60以上	17	N-36°-E	4.78	
SD583	KD	36D25	台形状	0.8以上	44	8	N-86°-W	4.92	
SD584	KD	37B23・24・37C3・4	半円形	1.5以上	30~64	5~19	N-13°-W	4.89~5.03	北→南
SD585	KD	37B22・23・37C2・3	台形状	1.4以上	50~70	9	N-3°-E	4.97	
SD586	KD	36C14	半円形	1.08	28~42	13~19	N-45°-W	4.89~4.94	南東→北西
SD587a	KD	36C3-4	弧状	1.66	14~24	5~9	N-53°-W/ N-38°-W	4.98~5.02	
SD587b	KD	36C4	弧状	0.7	12	5~8	N-40°-W	4.98~5.04	北西→南東
SD588	KD	37C7-12	弧状	1.2	40	4~11	N-9°-E	5.04~5.00	北→南
SD589	KD	37C12	弧状	1	28	7	N-86°-W	5.04	
SD590	KD	36C7-8	弧状	0.92以上	15~20	5	N-50°-W	4.99	
SD591	KD	36F10・15	凸凹状	0.72	38	6	N-36°-E	4.84	
SD592	KD	36E3	半円形	0.8	30	6~21	N-89°-E	4.82~4.97	西→東
SD593	KD	37C24	弧状	0.62以上	44	6~11	N-56°-E	4.91~4.96	北東→南西
SD594	KD	37D3・8	弧状	0.89	4	7	N-2°-W	4.97	
SD595	KD	37C11・12	弧状	1.56	20	6~	N-50°-W/ N-79°-W	5.04~	
SD596	KD	37E2・3・7・8	台形状	0.84	32~44	7	N-2°-W	4.91	

遺構計測表(土坑)

遺構番号	調査区	位置	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	方位
SK433	KC	39C23・39D3	不整形	台形状	204	168	82	4.05	N-24°-W
SK443	KC	38C15・20・39C11・16	不整形	凸凹状	170	104以上	45	4.49	N-23°-E
SK472	KC	39G21	楕円	台形状	120	86	67	3.54	N-18°-E
SK553	KF	26E25	不整形	階段状	169	96	11	4.60	N-11°-W
SK554	KD	36C18-20・23-25	長方形?	弧状	418	106~146	24	4.84	N-90°
SK555	KD	36C13・14・18・19	不整形	階段状	210	76	28	4.79	N-5°-W
SK559	KD	37C1・2・6・8	不整形	台形状	230	76~172	12	4.97	N-84°-W
SK563	KD	37D18・23	楕円	階段状	118	78	76	4.23	N-32°-W
SK566	KD	37C7-8・10-12	不整形	階段状	300	120~240	4	4.69	N-65°-W
SK569	KD	37E16・21・22・37F1・2	不整形	階段状	480	152	4	4.98	N-20°-W
SK570	KD	36E23・24・37F3・4	長楕円	階段状	326	162	35	4.53	N-46°-E
SK573	KD	37E7・8・12・13	不整形	台形状	196	56~178	32	4.66	N-40°-E
SK575	KD	36D20・25・37D16・21・22	楕円	台形状	274	128~146	25	4.75	N-58°-W
SK581	KD	36D25・37E5	楕円	弧状	102	72	21	4.81	N-82°-E
SK582	KD	36C23・37D3	長楕円	弧状	256	76~106	15	4.91	N-4°-E

遺構観察表(ピット)

遺構番号	調査区	位置	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)
36CP1	KD	36C14・19	楕円形	台形状	84	48	12	4.99
36CP20	KD	36C20	円形	V字状	20	18	9	5.02
36CP25	KD	36C25・36D5	楕円形	弧状	80	36以上	11	4.96
37CP2	KD	37C18	長方形	弧状	94	60	16	4.92
37CP3	KD	37C23	楕円形	台形状	94	58	59	4.48
37CP4	KD	37C17	円形	弧状	58	54	25	4.88
37CP5	KD	37C23・24	円形	V字状	28	24	33	4.73
37CP21	KD	37C3	長方形	弧状	66	54	11	5.0
36DP28	KD	36D23	楕円形	V字状	67	38	23	4.82
37DP4	KD	37D2・3	長方形	台形状	84	54	12	4.94
37DP3	KD	37D2・3	不整形	弧状	40	38	2	4.92
37DP22	KD	37D13・17・18	長方形	階段状	158	120以上	28	4.67
36EP5	KD	36E14・15	円形	U字状	26	24	30	4.71
36EP30	KD	36E25	長楕円形	弧状	82	28	6	4.9
37EP12	KD	37E21・37F1	長楕円形	弧状	90	40	7	4.89
37EP16	KD	37E24	楕円形	半円状	47	39	22	4.86
36FP15	KD	36F7	方形	階段状	42	40	24	4.75
37FP4	KD	37F2・7	長方形	台形状	68	46	11	4.8
P574	KD	36F17	楕円形	弧状	70以上	60	20	4.76
P401	KC	38E5	楕円形	弧状	18	14	21	4.59
P404	KC	39D6・11	円形	半円状	48	44	28	4.6
P428	KC	39C17・18	楕円形	半円状	105	72	26	4.63
P431	KC	39C13	楕円形	台形状	93	73	26	4.6
P432	KC	39C18	楕円形	V字状	95	74	62	4.24
P440	KC	39C6	楕円形	台形状	88	74	35	4.59
P451	KC	39C8	楕円形	台形状	88	40以上	28	4.65

遺構観察表

遺構計測表（流路）

遺構番号	位置	断面形	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	方位	底面標高(m)	流下方向
流路	39B23-39H1	台形状	40以上	18.56	1.74	N-32°-E/N-55°-E/N-19°-E		南西→北東
流路2	38B24-38E14	弧状	22.8以上	2.72		N-7°-E		南→北

遺構計測表（性格不明遺構）

遺構番号	調査区	位置	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	方位	底面標高(m)
SX447	KC	39C16-39D2	不整形	凸凹状	390	58~112	4~8	N-25°-W	4.78~4.83
SX455	KC	39G20・25	不整形	不明	153	110	18	N-2°-E	4.54
SX577	KD	36E12・13・17・18	不整形	階段状	186	64~96	19~36		4.64~4.81

遺構計測表（杭）

遺構番号	位置	深さ(cm)	標高(m)	
			杭頭	杭先
杭1	37C23	16	5.17	4.94
杭2	37C23	15	5.1	4.92
杭3	37C23	33	5.23	4.84
杭4	37C23	35	5.26	4.83
杭5	37C23	22	5.24	4.92
杭6	37C23	20	5.27	4.96
杭7	37C23	29	5.17	5.87
杭8	37C22	36	5.17	4.74
杭9	37C22	29	5.38	4.91
杭10	37C22	28	5.16	4.85
杭11	37C22	29	5.07	4.77
杭12	37B23	11	5.18	4.96
杭13	36C4	11	5.15	4.92
杭14	36D5	21	5.17	4.91
杭15	36D5	52	5.15	4.4
杭16	36D10	9	5.11	4.85
杭17	36D10	17	5.08	4.87
杭18	36D10	19	5.09	5.05
杭19	36D4	43/32	5.1/5.1	4.62/4.73
杭20	36D14	25	5.11	4.76
杭21	36D13	15	5.16	4.91
杭22	36D25	30	5.05	4.7
杭23	37D2	24	5.1	4.87
杭24	37D2	11	5.1	4.99
杭25	37D1	30	5.12	4.82
杭26	37D7	19	5.17	4.9
杭27	37D6	22	5.13	4.88
杭28	37D11	18	5.07	4.84
杭29	37D14	18	5.14	4.89
杭30	37D11	22	5.09	4.78
杭31	37D17・12	18	4.99	4.79
杭32	37D17	4	5.16	4.68
杭33	37D17	23	4.91	4.76
杭34	37D16	29	5.03	4.83
杭35	37D16	13	5.11	4.9

遺構番号	位置	深さ(cm)	標高(m)	
			杭頭	杭先
杭36	37D22	83	5.25	5.12
杭37	37D22・23	52	5.08	4.37
杭38	37D2	35	5.08	4.66
杭39	37D21	66	5.04	4.32
杭40	37E1	59	4.93	4.29
杭41	37E1	22	4.94	4.64
杭42	37E2	86	5.07	4.12
杭43	37E3	39	5.02	4.67
杭44	37E3	34	5.07	4.8
杭45	37E6	22	4.92	4.67
杭46	37E8	14	4.91	4.68
杭47	37E13	19	4.78	4.67
杭48	37E13	23	4.89	4.64
杭49	37E11	49	4.95	4.4
杭50	37E11	23	4.87	4.66
杭51	37E11	16	4.68	4.49
杭52	37E11	52	4.83	4.28
杭53	37E11	35	4.85	4.43
杭54	37E11	25	4.74	4.48
杭55	37E13		4.06	
杭56	37E22	18	4.59	4.38
杭57	37E22	26	4.64	4.33
杭58	37E22	27	4.65	4.35
杭59	37E24・37F4	48	4.71	4.18
杭60	37F4	30	4.72	4.46
杭61	37F4	47	4.72	4.2
杭62	37F4	41	4.61	4.25
杭63	37F4	50	4.71	4.14
杭64	37F8	27	4.46	4.15
杭65	37F2	19	4.51	4.41
杭66	37E21	29	4.98	4.66
杭67	37E21	14	5.02	4.01
杭68	36E10	23	5.1	4.81
杭69	37E1	37	4.94	4.43

下層石器・石製品観察表

報告 NO.	出土位置			種別	石材	法量				備考
	グリッド	遺構	層位			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
151	26C11		Ⅶ	打製石斧	黒色細粒砂岩	14.35	6.25	2.05	211.40	
152	26E16		Ⅶ	打製石斧	砂岩	12.50	7.20	1.60	162.90	
153	26F3		Ⅷ	磨製石斧	蛇紋岩	12.75	5.70	2.40	346.40	
154	25C14		Ⅶ	磨製石斧	蛇紋岩	9.40	5.50	1.90	195.70	
155	26D18		Ⅶ	磨製石斧未成品	白色細粒砂岩	12.60	5.90	2.35	281.90	
156	26D17		Ⅶ	磨製石斧未成品	蛇紋岩	14.85	6.10	3.60	429.40	
157	26D17		Ⅶ	磨製石斧未成品	蛇紋岩	11.25	5.10	2.25	200.20	
158	26D17		Ⅶ	磨製石斧未成品	蛇紋岩	10.40	4.80	2.40	161.80	
159	26D17		Ⅶ	磨製石斧未成品	蛇紋岩	6.80	3.70	1.80	76.80	
160	26F4		Ⅶ	磨製石斧未成品	蛇紋岩	4.90	4.70	1.80	72.90	
161	26D17		Ⅶ	敲石	安山岩	8.90	7.05	4.00	358.40	
162	26E16		Ⅶ	スクレイパー	砂岩	7.50	11.90	2.30	253.40	
163	39F11	流路1	河床	打製石斧	砂岩	15.25	6.95	1.90	200.20	
164	39E20	流路1	河床	打製石斧	安山岩	12.50	7.10	2.70	244.40	
165	39D24	流路1	河床	打製石斧	砂岩	12.60	5.70	2.00	178.50	
166	39F13	流路1	川底	打製石斧	黒色細粒砂岩	12.60	6.60	2.50	259.70	
167	39E	攪乱		打製石斧	安山岩	16.00	8.70	2.50	388.30	
168	39E19	流路1	河床	打製石斧	安山岩	18.00	8.30	2.65	433.70	
169	39F25	流路1	河床	打製石斧未成品	流紋岩	21.80	12.00	3.30	819.60	
170	39F9	流路1	河床	打製石斧未成品	安山岩	19.20	13.00	4.50	1545.00	
171	39F16	流路1	河床	打製石斧未成品	安山岩	12.60	9.70	3.00	343.30	
172	39F3	流路1	河床	磨製石斧	蛇紋岩	7.00	4.50	1.40	77.60	
173	39E20	流路1	河床	磨製石斧	蛇紋岩	7.30	4.70	2.10	93.10	
174	39F12	流路1	河床	磨製石斧	蛇紋岩	10.50	5.50	1.80	166.90	
175	39F12	流路1	河床	磨製石斧未成品	蛇紋岩	10.50	6.40	4.00	415.40	
176	39F12	流路1	5	磨製石斧未成品	蛇紋岩	9.40	5.90	2.50	193.40	
177	39G5	流路1	河床	磨製石斧未成品	蛇紋岩	10.65	6.25	3.50	268.80	
178	39F25	流路1	河床	磨製石斧未成品	蛇紋岩	9.85	9.60	4.50	548.90	
179	39E19	流路1	河床	磨製石斧未成品	蛇紋岩	14.30	9.50	3.70	742.90	
180	39F20	流路1	河床	磨製石斧未成品	蛇紋岩	14.65	9.00	4.40	718.90	
181	39F21	流路1	河床	磨製石斧未成品	蛇紋岩	13.30	6.50	5.10	485.50	
182	39E18	流路1	河床	磨製石斧未成品	蛇紋岩	12.40	10.50	4.70	803.30	
183	39E25	流路1	河床	磨製石斧未成品	蛇紋岩	14.40	9.80	4.10	440.80	
184	39E20	流路1	河床	磨製石斧未成品	蛇紋岩	10.10	5.10	1.85	177.00	
185	39G4	流路1	河床	砥石	砂岩	6.20	6.50	1.20	70.60	
186	39F8	流路1	河床	砥石	砂岩	9.00	8.60	2.20	152.40	
187	38F25	流路1	河床	砥石	砂岩	7.50	6.80	1.30	46.80	

上層石器・石製品観察表

報告 NO.	出土位置			種別	石材	法量				備考
	グリッド	遺構	層位			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
415	37D21	SK575	1	勾玉	蛇紋岩	1.80	1.15	0.35	0.90	
416	38E15	流路2	3	勾玉未成品	滑石	2.20	1.40	0.75	3.50	
417	38G25	流路1	3	管玉	緑色凝灰岩	1.00	0.60	0.60	0.60	
418	37D4	576a	1	管玉未成品	滑石	1.30	0.70	0.75	1.10	
419	36C23		Ⅲ	管玉未成品	緑色凝灰岩	1.85	1.00	0.60	1.40	
420	38D5	流路2	4	管玉未成品	緑色凝灰岩	2.10	0.70	0.70	1.70	
421	37D13	P22	1	管玉未成品	緑色凝灰岩	2.10	0.70	0.70	1.70	
422	37D18	SD576a	1	管玉未成品	緑色凝灰岩	2.10	0.70	0.60	1.80	
423	39	流路2	河床	管玉未成品	緑色凝灰岩	2.80	1.10	1.00	4.00	
424	39G15	流路1	河床	管玉未成品	緑色凝灰岩	2.40	1.15	1.00	2.80	
425	36E3		Ⅲ	管玉未成品	緑色凝灰岩	2.50	1.15	1.10	4.10	
426	37D21	SK575	1	管玉未成品	緑色凝灰岩	2.80	1.20	0.90	2.40	
427	39G4	流路1	5	管玉未成品	緑色凝灰岩	2.00	1.95	0.70	1.90	
428	38E5	流路2	3	管玉未成品	緑色凝灰岩	1.50	1.20	0.65	1.20	
429	37D4	SD576a	1	管玉未成品	滑石	1.00	0.70	0.45	0.40	
430	39E25	流路1	2	内磨砥石	砂岩	16.60	6.50	1.80	272.80	
431	39E4	流路1	5	内磨砥石	砂岩	19.40	9.40	1.90	338.00	
432	39E25	流路1	2	内磨砥石	砂岩	18.35	6.90	1.90	253.30	
433	39E19	流路1	5	内磨砥石	砂岩	18.40	7.60	1.95	316.00	
434	38H5	流路1	河床	内磨砥石	砂岩	10.00	6.90	1.60	155.00	
435	39F5	流路1	2	内磨砥石	砂岩	10.50	6.30	1.70	144.60	
436	39F16	流路1	河床	内磨砥石	砂岩	6.70	6.40	1.40	88.70	
437	37D22	SK575	1	内磨砥石未成品	砂岩	13.90	8.20	2.55	318.80	
438	39E2	流路1	4	砥石	粗粒砂岩	19.10	8.20	4.80	998.90	
439	39F19	流路1	河床	砥石	粗粒砂岩	23.40	14.40	9.30	5510.00	
440	39F6	流路1	河床	砥石	粗粒砂岩	15.90	12.00	6.10	1345.00	
441	37D14		Ⅲ	砥石	粗粒砂岩	8.50	6.90	4.00	231.90	
442	38G10	流路1	河床	砥石	粗粒砂岩	10.20	6.70	1.60	192.20	
443	37E19	SD576C	1	砥石	砂岩	13.70	10.00	4.90	740.40	
444	37C18		Ⅲ	砥石	凝灰岩	7.00	1.65	1.50	25.50	
445	39E20	流路1	2	敲石	ヒスイ	5.40	7.30	4.20	226.80	
446	38F25	流路1	河床	敲石	蛇紋岩	3.60	7.50	3.10	241.80	
447	39E19	流路1	河床	敲石	砂岩	15.80	9.75	4.90	1118.30	
448	37D2	37D P4	1	軽石製研磨具	軽石	4.10	4.70	4.05	12.90	
449	39D14	流路1	河床	スクレイパー	流紋岩	6.70	7.90	2.15	93.20	
450	26E8	SD201	1	スクレイパー	砂岩	10.40	15.35	3.40	597.80	
451	37D21		I	石錘	安山岩	17.30	6.60	4.75	742.20	

土器観察表 (2)

報告 No.	遺物名	クワット	層位	図版 No.	種別	器種	法 量 (cm)		残存率	胎土中の鉱物							色 調		調整・文様		彩色 / 付着物等	
							口径	底径		石	長	チャ	黒	角	海	絹	白	他	内面	外面		内面
215	SK573	37E8	1層	27	土師器	壺			小片	口縁部										口：ヨコナテ 体：ハケ	口：ヨコナテ 体：ナテ	
216	SK573	37E8	1層	27	土師器	壺			小片	口縁部										口：ヨコナテ 体：ハケ	口：ヨコナテ 体：ナテ	
217	SK573	37E8	1層	27	土師器	鉢			1/2	口縁部										口～体：ミガキ	口～体：ミガキ	外面と口縁部内面に赤彩
218	SK573	37E13	2層	27	土師器	鉢	5.4		残	底部										口～体：ミガキ	口～体：ミガキ	
219	SK573	37E8	1層	27	土師器	鉢	1.6		残	底部										口～体：ミガキ	口～体：ミガキ	
220	SK573	37E7	1層	27	土師器	小髷器台	(12.0)		1/3	脚部										口：ヨコナテ	口：ヨコナテ	凹形透かし等間隔で4単位か
221	SK573	36D25	1層	27	土師器	小髷器台	(17.8)		1/4	脚部										口：ヨコナテ	口：ヨコナテ	
222	SK581	36D25	1層	27	土師器	高杯	(17.0)		1/2	杯部										口：ヨコナテ	口：ヨコナテ	
223	SK581	36D25	1層	27	土師器	小髷器台	(10.1)		1/2	脚部										口：ヨコナテ	口：ヨコナテ	杯部内外面に赤彩
224	SD557	36C5	1層	27	土師器	壺	(15.0)	3.7	2/3	口縁部										口：指ナテ・指オサエ・ナテ (線状目) 体：ケズリ	口：ナテ 体：ケズリ・ナテ・ハケ	
225	SD557	36C5	1層	27	土師器	壺	6.2		1/2	底部										口：ナテ	口：ナテ	
226	SD568	36E20	1層	27	弥生土器	高杯			残	杯部下										口：ナテ・浅織3条・連織刺突文	口：ナテ	
227	SD568	36E20	1層	27	土師器	壺			残	杯部下										口：ナテ	口：ナテ	
228	SK576a	37D13	1層	28	土師器	壺	(13.2)	3.8	1/4	口縁部										口～体：ハケ	口～体：ハケ・ナテ	
229	SD576a	37D9	1層	28	土師器	壺			1/7	口縁部										口～体：ハケ	口～体：ハケ・ナテ	
230	SD576a	37D4	1層	28	土師器	壺	16.7		1/3	口縁部										口：ハケ→ヨコナテ	口：ハケ→ヨコナテ	
231	SD576a	37D4	1層	28	土師器	壺			小片	口縁部										口：ヨコナテ	口：ヨコナテ	
232	SD576a	37D9	1層	28	土師器	壺			小片	口縁部										口：ヨコナテ	口：ヨコナテ	
233	SD576a	37D4	1層	28	土師器	壺			1/7	口縁部										口：ヨコナテ	口：ヨコナテ	
234	SK576a	37D13	1層	28	土師器	壺	10.4	5.6	1/3	口縁部										口：ヨコナテ	口：ヨコナテ	
235	SD576a	37D23	1層	28	土師器	壺			残	底部										口：ハケ	口：ハケ	
236	SD576a	37D8	1層	28	土師器	壺	5.8		1/5	口縁部										口：ハケ	口：ハケ	
237	SD576a	37D9	2層	28	土師器	壺	5.9		残	底部										口：ハケ	口：ハケ	
238	SK576a	39D13	1層	28	土師器	高杯	(5.9)		1/2	杯部										口：ハケ	口：ハケ	
239	SD576a	37D19	1層	28	土師器	高杯			1/6	杯部										口：ハケ	口：ハケ	
240	SD576a	37D9	1層	28	土師器	高杯	(8.1)		残	脚部										口：ハケ	口：ハケ	
241	SK576a	37D14	1層	28	土師器	鉢			1/5	脚部										口：ナテ	口：ナテ	
242	SD576b	37D24	1層	28	土師器	壺	16.7		1/5	脚部										口：ミガキ	口：ミガキ	外面と口縁部内面に赤彩
243	SD576b	37E4	1層	28	土師器	壺	19.0		1/4	口縁部										口：ハケ・ヨコナテ	口：ハケ・ヨコナテ	
244	SD576b	37E4	1層	28	土師器	小髷器台			残	脚部										口～頸：ミガキ	口～頸：ミガキ	口頸部外面に赤彩
245	SD576b	37E4	1層	28	土師器	小髷器台			残	脚部										口～頸：ミガキ	口～頸：ミガキ	口頸部外面に赤彩
246	SD576c	37E24	1層	28	土師器	壺	19.9	4.3	1/4	口縁部										口：ヨコナテ	口：ヨコナテ	脚部外面と底部内面に赤彩
247	SD576c	37E24	1層	28	土師器	壺	18.2		1/2	口縁部										口～体：ハケ	口～体：ハケ	外面にコケ・スス付着
248	SD576c	37E14	1層	28	土師器	壺	(15.8)		1/5	口縁部										口：ヨコナテ	口：ヨコナテ	外面にコケ・スス内面にスス付着
249	SD576c	37E19	1層	28	土師器	壺			1/6	口縁部										口：ハケ	口：ハケ	
250	SD576c	37E14	1層	28	土師器	壺	(11.0)		1/2	口縁部										口：ハケ	口：ハケ	
251	SD576c	37E19	1層	28	土師器	壺	4.6		1/2	口縁部										口～体：ハケ	口～体：ハケ	
252	SD576c	37E14	1層	28	土師器	壺			残	杯部下										口～体：ハケ	口～体：ハケ	外面と体部内面に赤彩
253	SD576c	37E14	1層	28	土師器	不明	(5.3)		1/6	口縁部										口～体：ハケ	口～体：ハケ	
254	SD576c	37E9	1層	28	土師器	鉢	1.8		1/5	口縁部										口：ヨコナテ	口：ヨコナテ	杯部外面に赤彩
255	SD576c	37E24	1層	28	土師器	高杯			1/7	杯部										口：ヨコナテ	口：ヨコナテ	

土器観察表 (3)

報告 No.	遺構名	クワット	階位	図版 No.	種別	器種	法量 (cm)		残存率	胎土中の鉱物						色調		調整・文様		彩色 / 付着物等
							口径	底径		石	長	チャ	黒	角	海	白	他	外面	内面	
256	SD576c	37E19	1層	28	土師器	小甕器台		1/9	×	×	×	×	×	×	赤褐	浅黄橙	受~脚: ミガキ 受~脚: ミガキ	受: ミガキ 脚: 指ナテ	外面と受部内面に赤彩 外面と受部内面に赤彩 外面にスズ付着	
257	SD576c	37E19	1層	28	土師器	小甕器台		1/3	×	×	×	×	×	×	赤褐	浅黄橙	受~脚: ミガキ	受: ミガキ	外面と受部内面に赤彩	
258	SD579	37E7	1層	29	土師器	甕		1/6	×	×	×	×	×	×	浅黄橙	浅黄橙	受~脚: ミガキ	受: ミガキ	外面と受部内面に赤彩	
259	SD579	37E7	1層	29	土師器	甕		1/4	×	×	×	×	×	△	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面にスズ付着	
260	SD577	36E18	1層	29	弥生土器	甕		1/4	×	×	×	×	×	×	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面にスズ付着	
261	P574	36E7	1層	29	弥生土器	器台	7.4	残	×	×	×	×	×	×	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面にスズ付着	
262	P574	36E7	1層	29	弥生土器	器台	7.4	残	×	×	×	×	×	×	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面にスズ付着	
263	37C23	37C23	1層	29	土師器	甕		1/6	×	×	×	×	×	×	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面にスズ付着	
264	SK568	37D18	1層	29	土師器	甕		1/3	×	×	×	×	×	×	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面にスズ付着	
265	37DP22	37D18	2層	29	土師器	鉢	11.6 30	残	×	×	×	×	×	×	黒灰	灰黄褐	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
266	37DP22	37D18	2層	29	土師器	甕	(12.4)	残	×	×	×	×	×	×	黒	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
267	37DP22	37D18	2層	29	土師器	甕	18.3 4.5	3/4	△	×	×	×	×	△	浅黄橙	黒褐	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
268		36D14	皿層	29	土師器	甕	18.7	1/9	×	×	×	×	×	×	黒	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
269		37C23	皿層	29	土師器	甕		小片	×	×	×	×	×	×	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
270	SK433	39C23	4層	29	土師器	高杯		残	×	×	×	×	×	×	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
271	SK443	39C16	1層	29	土師器	甕		1/6	×	×	×	×	×	×	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
272	SK443	39C16	1層	29	土師器	甕		小片	×	×	×	×	×	×	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
273	SD441	39C2	1層	29	土師器	甕	(7.2)	1/4	△	×	×	×	△	△	浅黄橙	黒灰	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
274	SD441	39C2	1層	29	土師器	甕		1/9	△	×	×	×	△	△	浅黄橙	黒灰	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
275	SD441	39C2	下層	29	土師器	甕	17.2	1/5	△	×	×	×	△	△	浅黄橙	黒灰	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
276	SD445	39C2	2層	29	土師器	甕	(4.0)	1/4	×	×	×	×	△	△	浅黄橙	黒灰	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
277	SD445	39C2	2層	29	土師器	甕	(14.7)	1/7	×	×	×	×	△	△	浅黄橙	黒灰	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
278	SD445	39C2	2層	29	土師器	甕	(18.1)	1/6	×	×	×	×	△	△	浅黄橙	黒灰	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
279	SD445	39C2	2層	29	土師器	甕	(9.9)	1/5	△	×	×	×	△	△	浅黄橙	黒灰	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
280	SD445	39C2	2層	29	土師器	小甕器台		残	×	×	×	×	△	△	浅黄橙	黒灰	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
281	SD452	39C2	2層	29	土師器	甕	(11.1)	1/7	×	×	×	×	△	△	浅黄橙	黒灰	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
282	SD452	39C12	1層	29	土師器	甕	3.6	1/2	×	×	×	×	△	△	浅黄橙	黒灰	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
283	SD452	39C7	1層	29	土師器	甕		1/2	×	×	×	×	△	△	浅黄橙	黒灰	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
284	P427	39C17	1層	29	土師器	甕	4.3	残	×	×	×	×	△	△	浅黄橙	黒灰	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
285	P428	39C18	2層	29	土師器	甕	(17.8)	1/6	△	×	×	×	△	△	浅黄橙	黒灰	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
286	P428	39C18	2層	29	土師器	甕	3.3	1/8	△	×	×	×	△	△	浅黄橙	黒灰	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
287	SD445	39C25	2層	29	土師器	甕		残	×	×	×	×	△	△	浅黄橙	黒灰	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
288	流路1	39E20	河床	29	弥生土器	甕	9.2	1/2	×	×	×	×	×	×	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
289	流路1	38G15	河床	29	弥生土器	甕		小片	×	×	×	×	×	×	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
290	流路1	39F20	5層	29	弥生土器	甕		小片	×	×	×	×	×	×	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
291	流路1	39F17	河床	29	弥生土器	甕	(17.6)	1/7	×	×	×	×	×	×	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
292	流路1	38F10	2層	29	弥生土器	甕	14.1	1/9	△	×	×	×	×	×	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
293	流路1	39F13	2層	30	弥生土器	甕		1/6	×	×	×	×	×	×	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
294	流路1	39F19	4層	30	弥生土器	甕		1/4	△	×	×	×	△	△	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
295	流路1	39F5	4層	30	弥生土器	甕		1/6	△	×	×	×	△	△	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
296	流路1	39D19	5層	30	弥生土器	甕	(12.7)	1/4	△	×	×	×	△	△	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
297	流路1	39F2	河床	30	弥生土器	甕		1/5	×	×	×	×	×	×	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
298	流路1	39F15	河床	30	弥生土器	甕	4.4	1/8	×	×	×	×	×	×	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
299	流路1	39F19	4層	30	弥生土器	甕		1/7	×	×	×	×	×	×	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	
300	流路1	38I15	1層	30	弥生土器	高For器台		1/3	△	×	×	×	△	△	浅黄橙	浅黄橙	口: ヨコナテ	脚: ナテ	外面と受部内面に赤彩	

土器観察表 (4)

報告 No.	遺構名	クワット	図版 No.	種別	器種	法量 (cm)		残存率	胎土中の鉱物				色調			調整・文様		彩色/付着跡等
						口径	底径		石	長	チャ	黒	角	海	絹	白	他	
301	流路1	38G10	30	土師器	甕	166		1/2	△					×	口:ヨコナデ 体:ハケ	口:ハケ→ヨコナデ 体:ハケ		
302	流路1	38I25	30	土師器	甕	122	56	16.4	△						口~体:ハケ 底:指ナデ	口:ハケ 底:指ナデ		
303	流路1	39I22	5層	土師器	甕	240		残	△						口:ヨコナデ 体:ハケ	口:ハケ・ヨコナデ 体:ハケ		
304	流路1	39I23	3層	土師器	甕	(139)		1/6	△						口:ヨコナデ 体:ハケ	口:ハケ・ヨコナデ 体:ハケ		
305	流路1	38I20	2層	土師器	甕			1/7	×						口:ヨコナデ 体:ハケ	口:ハケ・ヨコナデ 体:ハケ		
306	流路1	39I11	5層	土師器	甕	(168)		1/3	×						口:ヨコナデ 体:ハケ	口:ヨコナデ 体:ハケ		
307	流路1	39I16	30	土師器	甕	(188)		1/4	×						口:ハケ→ヨコナデ 体:ハケ	口:ヨコナデ 体:ハケ		
308	流路1	39I10	30	土師器	甕	180		1/4	×						口:ヨコナデ 体:ハケ	口:ヨコナデ 体:ハケ		
309	流路1	39I12	5層	土師器	甕			1/2	△						口~体:ハケ・ナデ	口~体:ハケ		
310	流路1	39I19	4層	土師器	甕	170		1/5	×						口~体:ハケ・ナデ	口~体:ハケ・ヨコナデ		
311	流路1	39I12	5層	土師器	甕	(184)		1/6	×						口:ヨコナデ	口:ヨコナデ		
312	流路1	39I22	4層	土師器	壺	(130)		1/5	×						口~頭:ミガキ	口~頭:ミガキ	口頭部内面に赤彩	
313	流路1	38I15	3層	土師器	壺	164		1/2	△						口~頭:ハケ→ヨコナデ 体:ハケ	口~頭:ヨコナデ・ハケ 体:指ナデ・ハケ		
314	流路1	38G10	30	土師器	壺	76	14	8.3	×						口~体:指ナデ・指オサエ 底:ハケ	口~底:ミガキ		
315	流路1	39I24	フク土	土師器	鉢	2	56	(20)	×						口~体:指ナデ・指オサエ 底:ハケ	口~底:ミガキ		
316	流路1	38G4	5層	土師器	鉢	4.8		25	×						口~体:指ナデ・指オサエ 底:ハケ	口~底:ナデ・指オサエ		
317	流路1	39I25	河床	土師器	鉢	5.2	4.5	2.4	×						口~体:指オサエ	口~底:ナデ		
318	流路1	39I24	河床	土師器	壺			1/4	△						口:ヨコナデ	口:ヨコナデ・ハケ		
319	流路1	39I16	河床	土師器	壺	126		7/8	△						口:ヨコナデ	口:ヨコナデ		
								1/2							口:ヨコナデ	口:ヨコナデ		
320	流路1	38G10	河床	土師器	壺	64	134	残	△						体:ハケ→ミガキ 底:ミガキ	体~底:ハケ		
								残							体:ハケ・ナデ 底:ナデ	体~底:ハケ		
321	流路1	39I12	河床	土師器	壺	(67)		1/3	×						体:ハケ・ナデ 底:ナデ	体~底:ハケ		
322	流路1	38I25	河床	土師器	壺	6.5		残	△						体:ナデ	体~底:ハケ→ナデ	底部中央に焼成前穿孔	
323	流路1	39I23	河床	土師器	壺			1/3	×						体:ハケ・ナデ 底:ハケ	体:ナデ		
								1/3	×						口:ハケ・ナデ 体:ハケ	口:ハケ・ナデ		
								小片							口~体:ヨコナデ・ミガキ	口~体:ミガキ		
324	流路1	39I20	河床	土師器	鉢			1/9	△						口~体:ヨコナデ・ミガキ	口~体:ミガキ		
								1/2	×						口~体:ナデ	口~体:ハケ・ナデ		
325	流路1	39I19	4層	土師器	碗	(99)	0.8	5.7	×						口:ヨコナデ 体:ナデ・ハケ	口:ヨコナデ 体:ナデ		
326	流路1	39I16	4層	土師器	鉢			1/9	×						口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ		
								残							口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ		
327	流路1	39I12	河床	土師器	高杯	11.3		2/3	×						脚:ミガキ	脚:ナデ・ハケ	凹形透かし等間隔で3単位	
328	流路1	39I12	河床	土師器	高杯			1/4	×						脚:ミガキ	脚:ナデ・ハケ	脚部外面と杯部内面に赤彩	
329	流路1	39I25	河床	土師器	高杯			残	×						脚:ミガキ	脚:ナデ・ハケ	凹形透かし等間隔で3単位	
330	流路1	39I20	河床	土師器	高杯			2/3	×						杯:ミガキ	杯:ミガキ		
331	流路1	39I13	河床	土師器	高杯	(138)		1/8	×						脚:ミガキ	脚:ナデ		
332	流路1	39I4	5層	土師器	高杯	12.8		1/4	×						脚:ミガキ	脚:ナデ・ヨコナデ		
333	流路1	39I19	フク土	土師器	高杯			残	×						脚:ハケ・ミガキ	脚:ハケ		

土器観察表 (6)

報告 No.	遺構名	クワット	層位	図版 No.	種別	器種	法 量 (cm)		残存率	胎土中の鉱物				色 調			調整・文様		彩色 / 付着物等							
							口径	底径		石	長	チャ	黒	角	海	絹	白	他		外面	内面	外面	内面			
362	流路1	39G9	2層	32	須恵器	杯蓋	130	29	残 1/3	×				灰白	灰白	天:ロクロナデ 体:口:ロクロナデ	天~口:ロクロナデ									
		39G5	5層																3/4	×			灰白	灰白	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ
		39G3	5層																							
363	流路1	39F15	河床	32	須恵器	有台杯	184	11.9	残	×			灰白	灰黄	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ	底部内面墨痕									
		39F14	河床																							
		39F20	河床																							
364	流路1	39F25	河床	32	須恵器	有台杯	(16.7)	11.6	1/4	×		灰白	淡黄	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ	直線ナデ										
		39D5	河床																							
365	流路1	39E7	2層	32	須恵器	有台杯	16.9	11.2	小片	△		灰	灰白	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ											
		39D10	2a層																							
366	流路1	39E15	河床	32	須恵器	有台杯	(15.5)	(10)	1/9	×		灰	灰	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ	墨書:底部外面「□□」										
		39F13	2層																							
367	流路1	39F4	5層	33	須恵器	有台杯	14.8	11.3	1/3	△		灰白	灰白	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ											
		39E23	河床																							
368	流路1	39F3	河床	33	須恵器	有台杯	14.9	10.7	1/5	△		灰白	灰白	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ											
		39F22	河床																							
369	流路1	39G4	河床	33	須恵器	有台杯	13.8	10.2	ほぼ残	△		灰白	灰白	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ											
		39E23	河床																							
370	流路1	39D24	2層	33	須恵器	有台杯	14.6	10.7	3/4	△		灰	灰白	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ	直線ナデ										
		39F18	河床																							
		39G8	2層																							
371	流路1	39F4	2層	33	須恵器	有台杯	14.1	9.5	残	×		灰	灰	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ											
		39E23	河床																							
372	流路1	39G25	3層	33	須恵器	有台杯	(11.8)	(7.7)	1/9	△		青灰	灰	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ											
		39H5	1-2層																							
373	流路1	39H5	2層	33	須恵器	有台杯	10.5	7.1	4/5	△		青灰	青灰	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ	墨書:底部外面に渦巻き文										
		39H5	2層																							
374	流路1	39G5	河床	33	須恵器	有台杯	(11.6)	8.5	残	△		暗青灰	赤黒	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ	墨書:底部外面「□□」										
		39E24	河床																							
375	流路1	39G25	3層	33	須恵器	無台杯	(12.8)	(8.4)	1/2	△		灰	灰白	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ											
		39F25	2層																							
376	流路1	39E24	河床	33	須恵器	無台杯	(12.9)	(9)	1/6	△		灰白	灰白	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ											
		39F24	河床																							
377	流路1	39G3	5層	33	須恵器	無台杯	(13.4)	(8.2)	4/5	×		灰白	灰白	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ											
		39G2	3層																							
378	流路1	39F15	河床	33	須恵器	無台杯	(12.2)	(9.6)	1/3	×		灰白	灰白	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ											
		39G25	3層																							
379	流路1	39E13	河床	33	須恵器	無台杯	(12.4)	(8.8)	1/3	△		灰	灰	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ											
		39D24	2層																							
380	流路1	39E13	2層	33	須恵器	無台杯	11.4	3.5	7/7	×		灰白	灰白	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ											
		39D24	2層																							
381	流路1	39E13	河床	33	須恵器	無台杯	12.0	8.9	1/3	×		灰	灰	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ											
		39F24	河床																							
382	流路1	39E8	3層	33	須恵器	無台杯	7	残	×			灰白	灰白	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ											
		39E8	3層																							
383	流路1	39G8	河床	33	須恵器	無台杯	6.2	ほぼ残	×			灰	灰	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ											
		39E12	2層																							
384	流路1	39E12	2層	33	須恵器	無台杯	12.0	3	1/2	×		灰	灰	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ											
		39E13	3層																							
385	流路1	39E13	3層	33	須恵器	無台杯	12.4	7.4	1/7	×		灰白	灰白	口~体:ロクロナデ 底:口~体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ	墨書:底部外面「瀬入」										
		39E13	3層																							

土器観察表 (7)

報告No.	遺構名	クワット	層位	図版No.	種別	器種	法量 (cm)		残存率	胎土中の鉱物						色調		調整・文様		彩色/付着物等	
							口径	底径		石	長	チャ	黒	角	海	絹	白	他	外面		内面
387	流路1	39F3	河床	33	須恵器	無台碗	132	83	2/3								灰	灰白	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	黒書:底部外面「織入」 外面に自然釉かかる
388	流路2	39C25	3層	33	須恵器	杯蓋			残								灰	灰	天:指オサナ 体:ロクロナデ	口~底:ロクロナデ	黒書:体部外面「□」即天文字「天」か
389	流路2	38D10	河床	33	土師器	無台碗	149	6.1	1/3								橙	橙	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	
390	流路2	38D5	河床	33	土師器	無台碗	130	6.4	2/3								橙	にぶい橙	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	
391	流路2	39D	3層	33	土師器	無台碗	132	6.8	1/2								橙	橙	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	
392	流路2	38C15	3層	33	土師器	無台碗	128	6.9	4/5								灰白	灰黄	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	黒書:底部内面「久」
393	流路2	39D	3層	33	土師器	無台碗			残										口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	黒書:底部内面「久」
394	流路2	38C25	3層	33	土師器	無台碗	11.6	5.6	1/12								浅黄橙	にぶい橙	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	
395	流路2	38D5	3層	34	土師器	無台碗	(128)	5.6	1/9								にぶい黄橙	にぶい黄橙	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	
396	流路2	38D25	3層	34	土師器	無台碗	121	5.4	2/3								にぶい黄橙	にぶい黄橙	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	
397	流路2	39D	3層	34	土師器	無台碗	11.8	5.7	1/2								橙	橙	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	
398	流路2	38C15	3層	34	土師器	無台碗	11.6	4.8	1/4								浅黄橙	浅黄橙	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	
399	流路2	38D15	床直	34	土師器	無台碗	(12.1)	5.2	1/5								橙	にぶい橙	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	
400	流路2	38C5	3層	34	土師器	無台碗	12.6	6.4	1/2								浅黄橙	浅黄橙	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	
401	流路2	38E15	2層	34	土師器	無台碗	5.2		残								黄橙	黄橙	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	
402	流路2	38C	Ⅲb層	34	土師器	無台碗	5.6		残								にぶい黄橙	にぶい黄橙	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	
403	流路2	39E6	Ⅲa層	34	土師器	無台碗	11.7	5.6	1/9								浅黄橙	橙	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	
404	流路2	39D	3層	34	土師器	蓋			ほぼ残								黒	にぶい橙	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	
405	流路2	39D	3層	34	土師器	蓋	(189)		1/6								橙	浅黄橙	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	
406	流路2	39D	3層	34	土師器	壺	(139)		1/5								浅黄橙	灰黄釉	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	
407	流路2	39D	3層	34	土師器	高杯			残								橙	橙	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	
408	流路2	44C	7層	34	土師器	壺	19.5		3/4								橙	橙	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	
409	流路2	26D	Ⅲ層	34	珠洲焼	鉢			小片								青灰	青灰	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	波状文 口~体:ロクロナデ・御目 9条1単位か
410	流路2	25D	Ⅲ層	34	青磁	皿	4.8		1/3								緑灰	緑灰	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	外面と底部内面に緑釉がかかる
411	流路2	25D	Ⅲ層	34	瀬戸美濃	皿	(10.3)	5.1	1/2								灰白	灰白	口~体:ロクロナデ 底:回転糸切り	口~底:ロクロナデ	口縁部内外面に灰釉がかかる

木製品観察表

報告No	資料名	分類	分類2	出土位置			(現存) 法量 (cm)			木取り	樹種	備考	分析No
				グリッド	遺構No	層位	長さ	最大幅口径	厚さ				
452	柄	農具		39F2	流路1		54.5	5.5	3.0	削出丸棒	スギ	先端部を角状に加工	6
453	大足	農具	大足	39F8	流路1	3層	(42.4)	6.7	2.0	板目	スギ		97
454	ヘラ	器具	工具	39D5	流路1	3層	66.0	6.2	1.2	板目	スギ		27
455	皿	容器	挽き物	39	流路2	3層河床		(18.3)	1.7	横木取り	ケヤキ		102
456	槽	容器	削り物	39F12	流路1	4層	(102.0)	22.0	(4.0)	内削り	スギ		7
457	大型槽	容器	削り物	D9・10	流路1	3層	163.8	44.2	8.8	内削り	ヒノキ科	内面にチョウナ痕	68
458	槽	容器	削り物	39E15	流路1	2層	99.5	13.3	10.6	内削り	スギ		34
459	槽	容器	削り物	39D5	流路1	3層	(47.5)	(33.5)	(12.5)	内削り	スギ	古墳時代 木目が粗い	44
460	槽未成品	容器	削り物	39F23	流路1	5層	(37.8)	(9.4)	(6.0)	内削り	スギ	チョウナ痕	40
461	槽	容器	削り物	39F16	流路1	3層	18.0	12.2	18.5	外削り	スギ		74
462	槽	容器	削り物	39F14	流路1	3層	29.5	24.0	12.0	内削り	スギ		51
463	槽	容器	削り物	39F24	流路1	河床	(54.7)	(11.0)	(5.3)	底面が板目	スギ	表面炭化	14
464	槽	容器	削り物	39D5	流路1	3層	60.0	26.3	12.0	底面が板目	スギ		9
465	長円形槽	容器	削り物	39D15	流路1	3層	(53.5)	14.5	8.3	内削り	スギ		10
466	槽	容器	削り物	39E9	流路1		32.4	20.7	4.3	内削り	スギ		11
467	槽	容器	削り物	39E4	流路1	5層	35.0	11.0	6.0	板目	スギ		99
468	曲物	容器	曲物	39E14	流路1	3層		32.0	5.0	底板:板目 側板:板目	スギ		103
469	曲物	容器	曲物	39E14	流路1	3層		18.2	2.1	底板:板目 側板:板目	スギ		94
470	曲物	容器	曲物	39G15	流路1	2層		12.0	3.3	底板:板目 側板:板目	スギ		95
471	曲物	容器	曲物	39E18	流路1	河床		12.5	1.5	底板:板目 側板:板目	スギ		85
472	曲物	容器	曲物	39G13	流路1	2層		12.2	3.9	底板:板目 側板:板目	スギ		86
473	曲物	容器	曲物	39G15	流路1	3層		16.8	5.0	底板:板目 側板:板目	スギ		107
474	曲物底板	容器	曲物	39G12	流路1	3層		(30.0)	0.8	板目	スギ		82
475	曲物底板	容器	曲物	39E9	流路1	2層		15.4	1.1	板目	スギ		87
476	曲物底板	容器	曲物	41A	流路1			16.4	0.9	板目	スギ		84
477	曲物底板	容器	曲物	39E23	流路1	3層		16.9	1.1	板目	スギ		88
478	曲物底板	容器	曲物	38H5	流路1	3層		(17.1)	1.0	板目	スギ		83
479	曲物底板	容器	曲物	39G1	流路1	3層		17.8	0.8	板目	スギ		76
480	曲物底板	容器	曲物	39F9	流路1	3層		12.2	0.6	板目	スギ		89
481	曲物底板	容器	曲物	39G5	流路1	河床		10.6	0.7	板目	スギ		91
482	曲物底板	容器	曲物	39E14	流路1	3層		11.4	0.6	板目	スギ		92
483	曲物底板	容器	曲物	39F22	流路1	4層		(13.4)	0.6	板目	スギ		80
484	曲物底板	容器	曲物	39G15	流路1	2層		15.8	0.8	板目			—
485	曲物底板	容器	曲物	39G5	流路1	2層		11.5	0.6	板目	スギ		90
486	曲物底板	容器	曲物	39F2	流路1	4層		12.5	0.6	板目	スギ		93
487	曲物底板	容器	曲物	39E9	流路1	2層		9.4	0.5	板目	スギ		79
488	蓋	容器	曲物	39G12	流路1	河床	28.6	10.9	0.8	板目	スギ		77
489	曲物側板	容器	曲物	39E5	流路1	5層	22.6	1.8		板目		ケビキ有	—
490	柄	器具		39E8	流路1	4層	69.5	1.4	1.3	削りだし	スギ		19
491	長円曲物柄	器具	曲物	39F4	流路1	河床	33.4	(4.2)	3.1	分割材	スギ		42
492	腰掛	器具	椅子	39F15	流路1	河床	23.0	33.5	14.0	内削り	スギ	炭化部有	43
493	腰掛	器具	椅子	39D24	流路1		27.5	(38.0)	8.3	板目	スギ	弥生末~古墳	12
494	脚部	器具・容器		39D5	流路1	3層	86.6	16.6	1.5	板目	スギ	容器の差込脚部	105
495	斎串	祭祀具	斎串	39D10	流路1	3層	35.2	1.6	0.3	板目	スギ	斎串の可能性	75
496	人形	祭祀具	斎串	38G25	流路1	3層	(15.4)	2.8	0.6	板目	スギ		96
497	船形木製品	祭祀具	形代	39F8	流路1	河床	46.6	3.5	2.8	底面が板目	スギ	古墳時代前期	100
498	刀形	祭祀具	形代	38G25	流路1	3層	(11.2)	2.6	0.8	板目	スギ		101
499	竿か	祭祀具		39F6	流路1	4層	69.4	1.7	1.0	削出丸棒	スギ	先端部に差し込み加工	45
500	浮子	漁撈具		39D20	流路1	河床	27.5	5.1	1.7	削りだし		両端を加工	—
501	浮子	漁撈具		39D24	流路1	5層	16.5	3.0	2.7	削りだし		両端を加工	—
502	板材	交通遺物	舟	39F14	流路1	3層	(50.5)	4.5		分割材	スギ	年輪を切るように加工	17
503	板材	交通遺物	舟	39F8	流路1	4層	(188.6)	16.9	4.5	板目	スギ	年輪を切るように加工	52
504	板材	交通遺物	舟	39D5	流路1	3層	164.9	17.4	4.7	板目	スギ		65
505	板材	不明	不明	39F15	流路1	2層	54.7	6.8	1.9	板目	スギ	上端部に長方形の穴	2
506	板材	不明	不明	38G15	流路1	河床	23.2	5.4	3.1	板目		楔形	—
507	へぎ材	不明	不明	39E9	流路1	4層	(61.2)	2.5	2.5	板目	スギ		21
508	へぎ材	不明	不明	39G4	流路1	3層	(32.9)	2.4	3	板目	スギ		41
509	へぎ材	不明	不明	39G7	流路1	河床	(30.6)	2.6	0.6	板目	スギ		98
510	棒状木製品	不明	不明	39F9	流路1	2層	(47.4)	3.2	2.6	分割材	スギ	端部に加工	78
511	棒状木製品	不明	不明	39G3	流路1	3層	56.1	2.4	2.4	削出丸棒	スギ	端部に加工	22
512	横植か	不明	不明	39E14	流路1	河床		7.4	7.2	芯持			—
513	棒状木製品	不明	不明	39F14	流路1	3層	39.4	3.2	2.2	板目	スギ		—
514	棒状木製品	不明	不明	38G10	流路1	1	56.1	1.8	1.4	板目	スギ	側面に等間隔に刻み目	104
515	棒状木製品	不明	不明	39F3	流路1	2層	23.1	2.8	1.7	削りだし		上端部を有頭状に加工	—
516	柱材	構築材	構築材	39F23	流路1	3層	58.0	8.0	5.0	分割材	スギ		18
517	柱材	構築材	構築材	39E14	流路1	3層	(70.8)	(7.7)	3.0	板目	スギ	貫穴破損	26
518	柱材	構築材	構築材	39E13	流路1	河床	(204.5)	7.0	7.0	分割材 分割材	スギ	貫穴の中に角棒遺存	54
519	柱根	構築材	構築材	39C2	P419		(60.1)	(17.5)	16.5	分割材	スギ	直径70cm以上の木使用	48
520	柱根	構築材	構築材	39C8	P420	Ⅲ層	48.5	(12.0)	6.0	分割材	スギ		49
521	柱根	構築材	構築材	39C16	P423	Ⅲ層	53.0	18.5	7.6	分割材	スギ		50
522	横架材	構築材	構築材	39F15	流路1	3層	165.6	4.5	4.0	分割材	スギ		28
523	横架材	構築材	構築材	39F7-8	流路1	4層	151.5	17.4	6.1	板目	スギ		31
524	横架材	構築材	構築材	39F13	流路1	4層	107.0	11.0	6.0	追紐	スギ	切り欠き有 梁桁材	32
525	梁桁材	構築材	構築材	39D	流路1	3層	(220.4)	20.9	2.5	板目	スギ	厚補正	53
526	梁桁材(鴨居)	構築材	構築材	41A	流路1		(156.0)	(9.5)	2.5	板目	スギ	端部に納加工	59
527	横架材	構築材	構築材	39E10	流路1		259.4	7.1	5.9	分割材	スギ	切り欠き3か所	70
528	横架材片	構築材	構築材	39F16	流路1	3層	66.4	17.1	4.1	板目		厚補正 一端整材加工	—
529	梁桁材	構築材	構築材	39F9	流路1	2層	81.8	(9.5)	3.1	板目	スギ	切り欠き有り、厚補正	13
530	板材	構築材	構築材	39F11	流路1	4層	84.5	12.7	3.1	板目	スギ	壁材の押さえ	25
531	開口部材	構築材	構築材	39G14-15	流路1	2層	123.4	14.9	2.7	板目	スギ	輪難込 表面摩滅 厚補正	39
532	部材	構築材	構築材	39F8	流路1	5層	110.8	16.4	3.5	板目	スギ	方形仕口有	37

遺物観察表

報告No	資料名	分類	分類2	出土位置			(現存) 法量 (cm)			木取り	樹種	備考	分析No
				グリッド	遺構No	層位	長さ	最大幅口径	厚さ				
533	横架材	構築材	建築材	39F15	流路1	河床	(109.7)	24.5	5.1	柃目	スギ	輪難込	35
534	梁桁材	構築材	建築材	39D5	流路1	3層	(197.4)	26.2	3.1	板目	スギ	輪難込 厚補正	56
535	破風材	構築材	建築材	39D24	流路1		88.5	28.8	2.7	板目	スギ	厚補正	61
536	壁板	構築材	建築材	39E18	流路1	3層	105.0	14.0	1.5	板目	スギ	厚補正	1
537	板材	構築材	建築材	39F21	流路1	3層	128.5	12.5	4.0	柃目	スギ		24
538	壁板	構築材	建築材	39G15	流路1	2層	133.3	26.4	4.3	板目	スギ	落とし込み加工	29
539	壁板	構築材	建築材	39G15	流路1	2層	90.3	26.5	4.9	板目	スギ	538と同一個体	30
540	壁板	構築材	建築材	39D10	流路1	3層	(214.0)	6.3	2.3	板目	スギ		67
541	壁板	構築材	建築材	39D15	流路1	3層	149.7	16.0	2.8	柃目	スギ	孔の摩滅痕	72
542	壁板	構築材	建築材	39F12	流路1	4層	90.5	29.5	1.3	柃目	スギ	壁板一間分	73
543	木舞(棒)	構築材	建築材	38G10	流路1	1層	(72.1)	1.7	1.6	削りだし	スギ		15
544	床板材	構築材	建築材	39F7	流路1	5層	42.7	17.5	5.5	柃目	スギ		46
545	はしご	構築材	建築材	39D5	流路1	3層	64.0	(9.5)	6.7	外削り	スギ		47
546	垂木材	構築材	建築材	39E15	流路1	河床	99.0	4.8	4.8	芯持丸木	ヒノキ科	切り欠き有	38
547	栓	構築材	建築材	39E4	流路1	5層	61.5	4.9	3.3	分割材	スギ		20
548	差し釘	構築材	建築材	39E4	流路1	5層	54.2	7.3	3.2	板目			
549	杭	構築材	施設材	38H5	流路1		60.9	5.8	3.1	分割材	スギ	杭464	3
550	杭	構築材	施設材	38H5	流路1		51.7	6.1	3.6	分割材	スギ	杭462	4
551	板杭	構築材	施設材	38G20	流路1		63.4	7.0	4.8	板目	スギ	杭463	5
552	角杭	構築材	施設材	39D4	流路1	4層	100.3	5.8	3.4	板目	スギ	柄加工	106
553	杭	構築材	施設材	39F18	流路1	河床	33.2	2.6	1.2	板目			—
554	杭	構築材	施設材	39	流路2	3層	58.7	(径) 3.5		芯持丸木	ヒノキ科		108
555	杭	構築材	施設材	37D22	杭37		29.8	1.0	0.8	分割材	スギ		111
556	杭	構築材	施設材	37D7	杭35		24.5	3.1	3.0	分割材	マツ属 複雑管束 亜属		112
557	柱材	構築材	施設材	39F3	流路1	4層	(209.3)	14.1	5.4	分割材	スギ		55
558	板材	構築材	不明	39E20	流路1		74.5	3.5	1.0	柃目	スギ	切り欠き有り	8
559	角材	構築材	不明材	39F3	流路1	4層	(124.3)	6.3	5.2	分割材	スギ	先端部炭化	33
560	板材	構築材	建築材	39F8	流路1	4層	(122.2)	10.5	5.0	板目	スギ	先端部柄加工	36
561	割り板	構築材	施設材	39G17	流路1	3層	108.5	25.5	2.4	柃目	スギ	仕上げ調整無し	57
562	板材	構築材	施設材	39E8	流路1	4層	60.3	6.0	1.8	柃目	スギ	圧痕有 分割時の痕痕	23
563	板材	構築材	不明	39D15	流路1	3層	(197.5)	21.0	5.2	板目	スギ		63
564	板材	構築材	建築材	39G11-16	流路1	2層	(165.2)	19.3	3.2	板目	スギ	端部に柄加工有	60
565	角杭	構築材	施設材	39D10	流路1	3層	152.0	3.7	3.3	分割材	スギ		62
566	角材	構築材	施設材	39C5	流路1	2層	199.8	9.0	5.5	分割材	スギ	簡便な施設用材	58
567	角材	構築材	建築材	41A	流路1		176.0	5.6	4.6	分割材	スギ		69
568	柃目角材	構築材	不明	39D19	流路1	4層	81.3	5.3	4.2	柃目			—
569	柱?	構築材	不明	38G5	流路1	3層	21.3	8.2	4.1	芯持		わたりあご、貫穴痕	—
570	柱材	構築材	建築材	39G6	流路1	1層	53.3	5.5	2.5	板目	スギ		16
571	柱材	構築材	建築材	39D5・10	流路1	3層	188.9	9.7	3.1	分割材	スギ		71
572	板材	構築材	施設材	39D20	流路1	3層	165.4	20.0	9.5	柃目	スギ		64
573	横架材	構築材	欄材	39E9-10	流路1		329.5	21.0	2.2	板目	スギ		66
574	角材	構築材	不明	39E4	流路1	5層	79.0	7.8	4.5	分割材		端部に弧状の受け部成形	—
575	柱材	構築材	施設材	39F13	流路1	4層	65.8	17.2	10.0	みかん割			—